

若き日の山々



田中文夫



1966年10月

谷川岳一ノ倉沢南陵テラス(杉山君と)



2014年5月

丹沢 源次郎沢にて

若き日の山々

はじめに …… 5

第一章 谷川岳一ノ倉沢

- 1・衝立岩 正面壁 ダイレクトカント (一九六七年) …… 7
 - 2・衝立岩 正面壁 岳人ルート (一九六七年) 私はシャクナゲ (詩) …… 13
 - 3・衝立岩 中央稜 (一九六七年) …… 19
 - 4・滝沢下部 ダイレクトルート 第一スラブ 〓 ドーム正面壁 (一九六七年) …… 22
 - 5・滝沢第三スラブ 〓 ドーム正面壁 (一九七一年) …… 32
 - 6・滝沢リッジ 〓 ドーム正面壁 〓 冬季 〓 (一九七〇年) …… 39
 - 7・六ルンゼ 右俣 (一九六六年) …… 43
 - 8・烏帽子奥壁 中央カント (一九六六年) …… 44
 - 9・ある日の一ノ倉・烏帽子奥壁 変形チムニー (一九七一年) …… 46
- ## 第二章 ハケ岳
- 1・横岳 西壁 小同心クラック 〓 阿弥陀岳北稜 (一九六六年) …… 47
 - 2・阿弥陀岳 広河原沢奥壁 ニルンゼ 〓 横岳西壁 中山尾根 〓 大同心稜下降 (一九六七年) …… 48

第三章 北アルプス

- 1 ・ 北穂高岳 滝谷 第四尾根（一九六六年）…………… 51
- 2 ・ 前穂高岳 北尾根 四峰正面 明大（一九六六年）…………… 52
- 3 ・ 前穂高岳 北尾根 三峰リッジ（一九六六年）…………… 53
- 4 ・ 前穂高岳 屏風岩中央カンテ 岩溝ルートへ冬季↓（一九七一年）…………… 54
- 5 ・ 剣岳 本峰北壁 L1（一九六七年）…………… 61
- 6 ・ 剣岳 本峰南壁 A1（一九六七年）…………… 62
- 7 ・ 剣岳 チンネ 左方ルンゼくAバンドく右カンテ（一九六七年）…………… 63

第四章 若き日の想い

- 1 ・ エベレスト南壁によせて（一九七〇年）山岳同人・風 Ⅱ 会報より…………… 64
- 2 ・ 谷川岳遭難防止条例 — その解決点 —（一九六七年）…………… 69
- 3 ・ 小さな批判 — RCCⅡへ —（一九六七年）…………… 87
- 4 ・ 「星の王子さま」に親しんだ頃（一九六七年）…………… 89
- 5 ・ 社団法人 日本山岳協会への批判（一九七三年）山岳展望第十七号より…………… 93
- 6 ・ 登山の社会的背景 — 登山学確立へのアプローチ（一九七〇年）山岳展望第十四号より…………… 125

【山行記録】

わかるものだけを整理…………… 134

はじめに

三十歳後半から今に至る三十余年は、仕事（設計）と子育てに没頭し、登山界は関心の外となりました。

建築設計業界は知る人ぞ知る、超過酷労働環境にあります。残業、徹夜は当たり前。三十代後半では、十日間一睡もせず設計に没頭しました。家に帰れないので、妻と子が事務所に近いに来る始末。そうしないと、期限までに終わらないからです。この時心臓の鼓動は早鐘を打ち続け、呼吸も浅くなり、まるで8千メートルを登っているような心境でしたが、「仕事では死なない」という、登山体験から得た確信がありました。それから六十七歳までの超多忙な時期は、一日の睡眠時間が三〜五時間程度で、完徹もしばしばおこなないました。そのような過酷な設計業務にあつても、設計そのものは天職と思え、苦労は大きくても苦痛ではありませんでした。

しかし高齢の時節を迎えると、頭と手がバラバラになりがちです。頭はパソコンへ入力したつもりですが、手はまだ動いておらず、しばし錯誤が生じます。期日に追われる中で、より丁寧な内容の充実を図ろうとする心の焦りが、頭と手の連動を微妙に狂わせます。設計技術は年々進化したし、二十一世紀に入るとアナログ技術からデジタル技術へと大きな転換が図られます。この転換は単なる技術手法の異なりだけでなく、人間の思考から社会機構まで大きく変えてしまうことを、これまでの雑学から察知しました。そのような今において、老齢に鞭打つて新技術を追いかけるのではなく、大好きな山を通した哲学的探求により、「総合人間学」的視野から、独自のフィールドと論考をもつて整理することで、社会的な仕事を果たせるのではないかと考えるに至ります。

これまで折々に書き綴ったものを整理し、新たな論考による創意は、これまでの設計業務と対象が異なるだけで、もつと広い領域、宇宙までも視野に入れた【設計】ではないかという思いに至ります。大それた発見、発明はできませんが、私自身の言葉と論考による一つの物語、【登山と人・文明・文化Ⅱ環境】をまとめてみたい欲求に駆られているのです。

二十代の登山と論考は『若き日の山々』にまとめ、三十代の登山と論考は別冊『青春の山々』にまとめられ、四十代の登山と論考は別冊『頂きのかたに』（日本文学館）にまとめられます。三十代後半からは設計業務に埋没し、登山と論考をおこなう余裕はありませんでした。そして生業を卒業した今、『老いの道標』により、過去・現在・未来の論考を試みています。この四部作の先には『登山と人・文明・文化Ⅱ環境』の大論が待ち受けています。さらに私のルーツかもしれない「古代イヌエール人」への探査も欠かせません。私のルーツだけでなく、世界の平和を考える上において、欠かすことのできないテーマと思うのです。

これら作業の一面は、死にゆくための準備であり、もう一面は人類未来への道標となればという、大それた思いもあります。ちょっと大げさになりますので、せめて子や孫へ私の意図を書き残し、いつか読んで分かってもらえたら嬉しいのです。

『若き日の山々』…、時代の進化、変遷の中で、このような感性をもった登山は繰り返すべくもありません。『老いの道標』にみる「古と新」の世代にあつては、生死を媒介とする弁証法的登山の実践など、見るべくもないでしょう。科学技術を駆使した登山は死の感覚を不要とし、人工生命の誕生、生殖・再生医療の進歩、人工・移植臓器技術の進歩、人間のロボット化等々、「人間の生と死の定義」が揺らいでいる時代にあります。登山内容は、スポーツ化、観光化、ゲーム化等、デジタル技術機械と脳のデジタル思考法により、非連続で即時現象化へと進化するのでしょうか。「生と死の弁証法」や「歴史観」などの連続的思考法は、アナログ時代の遺物と言えなくもありません。しかしここに、あえてアナログ時代の遺物をまとめておくことは、次なるデジタル時代の登山と人の変遷を考える上で、礎になると思うからなのです。そしてデジタル時代の登山と人の論考は、これまでの四部作整理の次、『登山と人・文明・文化Ⅱ環境』にておこなうこととなります。

はたしてどの程度まで論考が進められるか分かりませんが、ともかく未知への探求です。

（二〇一四年八月）

第一章 谷川岳 一ノ倉沢

1. 衝立岩 正面壁 ダイレクトカンテ

(コンテニユアスクラブ春山合宿・谷川岳)

期 日 一九六七年五月三日

パーティ 保坂公人・田中文夫

アンザイレンテラス (AT) から十五メートルほどの懸垂下降で、ブッシュ帯とのコンタクトに降りる。そこでアンザイレンをし、保坂さんトツプで登攀開始。

ブッシュと草付き混じりのやさしいところを、凹角めざして二十メートルほど右斜上する。濡れてふわふわした草付きは、不快そのもの。ズボンが泥で汚れてしまう。傾斜も強く、ブッシュをつかんで凹角を抜けると、左のバンド状テラスへと導かれる。(1P)

ここからトップ(二重)ザイルにして、僕がトップになる。リップの左から二メートルほど登ったが、バランスがきびしく降りる。少し戻り、右側のフェイスを二メートルほど登ってから、オーバーハング下までのきびしいトラバース(横断)をする。ここからアブミ(ロープの梯子)に乗っての人工登攀になる。ハーケンは豊富でしっかりしているので、そう難しいことはない。二人共本番で初めての人工登攀なので、最初は力んでしまい、腕力が続くか心配になる。・・・が、しばらくすればそれにも慣れ、ゼルブストとアブミのコンビネーションで、ほとんど腕力に頼らなくなった。二〜三回アブミを掛け替えた時、一つを落としてしまった。幸い1P目でトラバースしたバンドに引掛かり、保坂さんに回収してもらおう。三台のアブミだった僕は二台に、二台だった保坂さんは三台を使うことにする。かぶった壁に単調なアブミの掛

け替え作業が続き、トップを吊り上げることもなく、ただザイルを繰り出すだけの保坂さんは「眠い……眠い……」とぼやいている。

四十歳登ったところにバンドがあり、向かつて右はその上部がかぶっているので立つには苦しい。一段降りた左の隅に立ち、ザックをハーケンに吊り、出で張った岩に腹をもたれかけさせて確保する。猛烈にノドが乾いて水を飲みたいのだが、ラストを待たせるわけにもゆかないので我慢する。そよ風にうたれていい気持ちになり、コックリ、コックリ、と居眠りが始まった。ザイルがたるめば登りにくいのはわかっているが、ピーンと張ったと思うとすぐに居眠りとなる。うつらうつらしては、ハツと正気になり、あわててザイルをたぐり寄せる。……なんと時間の長いことか……！

保坂さんがバンドに上がったところで「アー、ビールが飲みてえ……保坂」、「アー、ジュースだ……(田中)」と、いつものようにボヤキながら、ザックから水筒を出して「ウイー……」と飲む。

二P目も僕がトップになり、アブミで第二ハングの下まで登る。オーバーハング直下を右にトラバースし、ハングにぶら下がって右へと廻り込む。カラビナが不足し、ハングを抜けてから残ったのはたった一個。ハング下は衝立スラブまでスツパリと切れ落ちているが、アブミに乗っていると怖くない。これがフリーだったら……怖い。カンテを越えて凹角に入るが、ハーケンとポルトがベタ打だ。普通はここで確保するようだが、アブミに乗つての確保も気が進まず、先ゆく。ところがハーケンはすぐ上で切れ、右の手が届かないリツペ(出で張り)の上に一本見つかるだけだ。カラビナは不足し、ハーケンをポケットにしまつて一個、セルフビレイ用をとつて一個、残置されていたカラビナをいただき、どうやら三個が使えるようになった。ザイルを張つて身体を右のリツペの方へ振り、手を思いっきり伸ばしても五センチくらい届かない。何度も繰り返すがうまくゆかず、仕方なく細いリス(割れ目)にハーケンを打ったが、三分の一も入らずに曲がつてしまった。引つ張つてみるが抜けそうもないので、ソーツとアブミを掛けて乗り、ようやく凹角を抜けた。その上は少し傾斜が落ち、ハーケンに導かれて右上へと登る。すでにカラビナはないので、もしハーケンが抜けたら墜落は大きかろう。

ほぼ四十杯一杯で片足が半分乗るフットホールドがあり、ボルトが打たれている。片足をアブミに、もう一方を腿までアブミに通してからフットホールドに乗って確保する。オーバーハングと凹角で、やはり保坂さんも苦勞しているようだ。ザイルが緩んだと思えばすぐに止まり、再び緩んで、またすぐに止まる。アブミに乗って、眠っているんじゃないかと思うほどだ。

合宿に入る前、雲稜ルートを止めてダイレクトカンテに決めたのも、僕の体調が悪くてトレーニングがあまりできなかったからで、やはり身体がいうことをきかない。テールリッジで待つ一つの影にヨードルを送るが、唾が出ない喉では上手くゆかない。保坂さんにコールしても返事がない。オーバーハンズで聞こえないのだろうか。こんなことをしている僕、実は眠気覚ましにやっているのだが、それでも居眠りが止まらない。こんな壁にルートを拓いた先人を想いつつ、夜行日帰りで雲稜ルートを登る連中に頭が下がった。シャツがずり上がり、ヘソを出して登ってくる保坂さんが一段下のハーケンで止まり、アブミに乗って確保に入った。

四P目。もう北稜はすぐそこにある。僕は水平に右へとアブミトラバースを始めた。三杯ほどで途切れ途切れになったバンド状のフットホールドがあり、フリーになつてはげ落ちたバンドに立った。上のハーケンには手が届かず、かといってフリーで登るには岩が脆すぎ、二本残置されていつハーケンもグラグラだ。やっと見つけたリスにハーケンを打つても岩が開いてしまう。やむなく脆い岩にすがって爪先立ち、残置ハーケンに右手をグーと伸ばしてやっとカラビナを掛けた。アブミをセットして乗っ越す。この高度と垂壁で、おまけに脆い岩ときたら、イヤなものだ。すぐ上のかぶつた小さな壁を越えようと傾斜が落ち、フリーとアブミで不安定な大きい岩の上に立った。さらにブッシュ混じりの壁を右にトラバースすると、やっと終了点のテラスに飛び出した。一箇所リングの細いボルトがあり、アブミを掛けて乗るとグーツと伸びて気持ちが悪く、一番いやなピッチだった。

テラスの灌木にセルフブレイをとり、保坂さんを確保する。十五分して保坂さんもテラスに立った。そのまま保坂さんが一段上の広いテラスまで登り、僕もセルフブレイを外して続く。……終わった。

「…………どうも……………」と握手を交わし、テラスにひっくり返る。水筒の底に沈んだ僅かな水を分け合った。

「アー、うまいー！」

「さて、これからどうすんか?」、保坂さんは云う。もちろん、コップ状岩壁との連続登攀はできない時刻だ。合宿チームと別れる時、「ビバーク(露営)するようなら帰ってこいよ」、とチーフリーダーに云われていた。一ノ倉尾根を登って芝倉沢を下るか、北稜から衝立前沢を下るか、のどちらかである。「安全な方を行きましょうよ!」、と僕は答えた。この時安全な方とは、北稜を登り一ノ倉岳へ達する方である。なぜなら僕らにとって北稜は全くの未知であり、未知のルートでは登るより、下る方が難しい。さらに衝立前沢下降にはブロック雪崩の危険がある。その点芝倉沢の方が、はるかに安全である。

しかし、見上げる北稜の衝立の頭ははるかに上で、頭上の黒い岩壁を登る気にはとてもならなかった。まだ三時。「とにかく一眠りしてから決めましょうよ!」、と僕が云うと、「寝ぼけて落ちるといけないから……」、と保坂さんは残置されていたボルトにセルフビレイをとる。だが本当のところ、テラスは広いんですよ。

一時間近くも眠ってしまった。目が覚めた僕は急に身体が重くなり、足がふらふらしている。さあ、どちらを行くか……!

今の僕はどちらも行きたくない。ここでビバークできたら……と、動かたくない気持ちでいっぱいなのだ。とにかく出発の不手際から、ツェルト(緊急露営テント)、コンロ、ガソリン、はてはラジオまでかついで登っていたのだ。今僕らが一番欲するのは、休息と水だ。

僕の頭(理性)は一ノ倉岳まで行けと云う。登山理念からすれば、衝立岩は一ノ倉岳のほんの中間部分であり、ピークに至る一過程ではない。スポーツ・アルピニズムからすれば、衝立岩の登攀だけでも価値あることになっている。しかし衝立の頭まで登る雲稜ルートならまだしも、ダイレクトカンテの終了点は北稜の途中なのだ。二人の計画は、ダイレクトカンテからコップ状岩壁を登り、一ノ倉岳へ達するものだった。コップ状岩壁がだめなら、せめても北稜を登って一ノ倉岳へ行くべきなんだ。バタとは云え、僕らにはどちらのル

ルートを選んだとしても、芝倉沢出合の合宿ベースキャンプまで行き着けるだろう自信と体力は残っているはずだ。初登攀ではなく、すでに登りつくされているルートなのだから、気は楽なのだ。それらの不安を打ち破つてルートを拓く初登攀こそが、より大きな価値を生ずるのだ。

しかし僕らは誘惑に負けた。衝立前沢のクレバス(雪溪の切れ目)の間に飛び散る水を見下ろすと、もう一步も上には登りたくなかった。腹いっぱい、水のみたい!

登攀用具を散らしたまま、ふらつく足でテラスに続く踏み跡を追ってみた。なんと!北稜を下降している跡だった。テラスに戻って保坂さんに告げる。黙っていても、もう下降ルートは決まったのだが、言葉にして確かめ合った。

一Pの懸垂下降をまじえて衝立前沢に降り立ち、腹一杯の水を飲んだ。

コップ状岩壁は……、はるかに上。略奪点を通り過ぎ、いよいよ衝立前沢を下ろうとした時だ。にぶい音とともにブロック雪崩が、さつき水を飲んだ辺りを落ちていった。危ないところだった!

「はらへったあ!」、「もう歩きたくない!」、「………」、ののしりながら、僕らは新道を芝倉沢へと向かった。

それらの言葉は完登と名うって、その実は心の山に敗退した、みじめな気持ちをカモフラージュする発散だった。

僕らは困難ではなく、危険を選んできました。

【タイム】

土合(二・五五)↓一ノ倉沢・新道出合(三・五〇)↓四・〇五)↓旧道出合(四・二〇)↓四・四五)↓中央稜基部(五・三〇)↓六・三〇)↓AT(六・三〇)↓北稜終了点(二五・一五)↓一六・二五)↓芝倉沢出合BC(二七・五〇)

2・衝立岩 正面壁 岳人ルート

(コンテニアスクラブ Ⅱ 会報 NO.8)

期 日 一九六七年十月八〜十日

パーティ 佐藤功・田中文夫

中央稜のチムニーへのびるレンゼの末端に降りる。取付の赤黒く錆びたボルトにセルフブレイをとり、草付の凹角を登る。出口をアブミで乗越すと、ボサの中にテラスのようなどころがある(1P)。

垂直と感ずる急なフェイスを直上し、左へトラバース気味な草付へと登り着く。見た目よりホールドは豊富だが、ほとんどがフィンガーホールド(第一間接の指先)で、かなりキビシイ。簡単な草付を登ると、ボサ帯の先端に大きなテラスがある(2P)。

一段上のテラスから、バンド状を慎重に右トラバースする。七段行くと少し広くなり、ハーケンが三〜四本打たれている(3P)。

頭上に三段ハングが覆いかぶさり、ここからアブミに乗る。フェイスを登り、三段ハング下を左へトラバース。段違いとなったオーバーハングの切れ目を直上する。この辺は長いアイスハーケンが打たれているが、グラグラ動く。岩が積み重なったところに枯れ木があり、この間五段のフリークライムはいやなどころだ。石を落とさないよう気をつけるとともに、自分も落ちてはいけなからだ。凹角に入り、かぶった壁を左に寄ると、ボルトが打たれている。すぐ左のばかでかい手製ハーケンにアブミで乗り、ボルトを使ってグリッブブレイとす。四十センチサイルは一杯だ(4P)。

すぐ左のオーバーハングの下をトラバースし、切れ目を直上するとボルトが一本ある。そのフェイスをハーケンに導かれて登ると、十段で岩茸テラスに着く。二人は立てる(5P)。

さきほどからの霧雨は、本格的な雨になってきた。指先は着白になり、吹き上げる風にガタガタ震えてしまう。テラスから上のフェイス2Pをフリークライムし、リップを越えてフェイスを登ると、シヤクナゲハングだ。このあたりはハーケンが半分くらいしか入っていない。効いていそうなハーケンの頭が、ガクツと下がった。シヤクナゲハングはハーケンがしっかりしている。真上に越して、右にトラバースするとシヤクナゲテラス(6P)。雨は降り続き、あと一時間もすれば暗くなるので、ビバークと決める。狭いテラスに、寒くて長い夜だ。快晴の陽に暖まつてから出発。テラス左のカンテをアプミで登り、右へトラバースして草付を登ると、ブッシュ帯の上に出る(7P)。

上端を四十杯一杯左へトラバース(8P)。

ここから草付の凹角を登り、傾斜の落ちたフェイスを登ってブッシュにはいると3Pで完登できる。しかし我々は、昨日の登攀から精神的な敗北を感じていた。迷ったが、完登をあきらめてブッシュ帯の上を、中央稜へと逃げた(9P)。

衝立正面(岳人)↓コップ状岩壁正面(雲表)↓滝沢第三スラブ↓マッターホルン状岩峰、の連続登攀をめざしていた。これらのルートはいずれも最上級のルートだ。あまりトレーニングもせずに取り付いた私は、登りながらも、登る資格がないように感じていた。もはや一つのルートの完成が問題ではなかった。いさぎよく、出直すことだった。中央稜を下降し、快晴の二日間を一ノ倉の麓で過ごした。

【タイム】

土合(三・〇〇)↓一ノ倉沢出合(四・二〇)↓四・四〇)↓岳人取付(七・四〇)↓2P目大テラス(九・〇〇)↓九・四〇)↓シヤクナゲテラス(一六・三〇)↓ビバークくく七・〇〇)中央稜(八・三〇)↓中央稜基部(一〇・三五)↓一三・三〇)↓一ノ倉沢出合(一四・五五)

わたしはシャクナゲ

わたしはシャクナゲ

衝立岩の狭いテラスにたった一人で

今日もスラブを見下ろしています

時は神無月

吹きすさぶ、風と雨と岩のモロイ垂直の道に

傷ついた蒼白な指先でハーケンにしがみつき

歯の根も合わずにガクガクふるえたアルピニストが

オーバーハングを乗り越えて

一人わたしを訪れました

シャクナゲさん、こんにちは！

お元気ですね

おや、シャクナゲさんも寒いのかい？

緑の葉っぱをそんなにガタガタふるわせて……！

ハーケンにカラビナをかけ、ザイルを通した彼は

やがてザイルをたぐりはじめました

わたしもいつしよに震えながら

ザイル引きを手伝います

もう一人のアルピニストが

わたしのもとにはい上がりました

思いもかけない時の流れに

二人のアルピニストはわたしにむかって

一夜の宿を乞いました

やっと二人が座れるこのテラスに

手足の複雑なわたしは、ジャマだったので

されるままにいさぎよく

私の座をゆずりましょう

はぎとられてしまったわたしにむかって

涙を見せはしませんでした

アルピニストの濡れた瞳に

わたしの涙が映ったからです

ハーケンに身体を吊った二人のアルピニストは

ザックに入れた足を宙にぶらつかせ

ツェルトを被りました

濡れた衣服に熱をうばわれ

左右にゆれる動きもやめず

思い出したように時計を見る

まだ六時

まだ八時

まだ………十一時

はるか真下に見下ろす

テールリッジにデポしたザックに

パインの顔を思い出しているのだろう

しるこ、ヨーカン、雑煮もみんな

暖をとるコンロさえも、その中

もしもわたしの葉っぱで飛べるなら

飛んで行って、とってあげよう

わたしの葉っぱを、彼らにかけてあげようか！

マッチは終わり

ローソクも消え

濡れそぼった寒さに耐えて

時折口にしたコーヒの味もなく

おぼろげに歌を口ずさむ彼

彼らはただ

ひたすらに待った

時の流れ

黎明のさしこむのを……

わたしは祈った

早く彼らに陽が射すように………！

星も消え

白毛門の空がうす赤く色づきはじめた

彼らに朝を告げよう

そして言おう

よくがんばったね、と

わたしはシヤクナゲ

もうふたたび彼らに会えない

だがたしかに、そこにわたしはいた

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

シヤクナゲさんありがとう、ぼくはきみを忘れないよ

またきつとくるからね

ここにシヤクナゲの木が一本あつたんだよ

そしてぼくらがここでビバークしたんだ、つて

すてきなぼくのパートナーは

きつときみを想ってくれるよ

そしてきみに言ってくれるよ

シヤクナゲさんありがとう、つて

そしてぼくも言おう

ここをシヤクナゲテラスと呼んだんだよ、つて

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

一九六七年十月

一ノ倉沢 衝立岩正面壁

岳人ルートの登攀より

3・衝立岩 中央稜

期 日 一九六七年八月一九日

パーティ 上村英子・田中文夫 (コンテニユアスクラブ)

恐れと幸せな気持ちで、僕は上越線に眠れぬ時を過ごした。

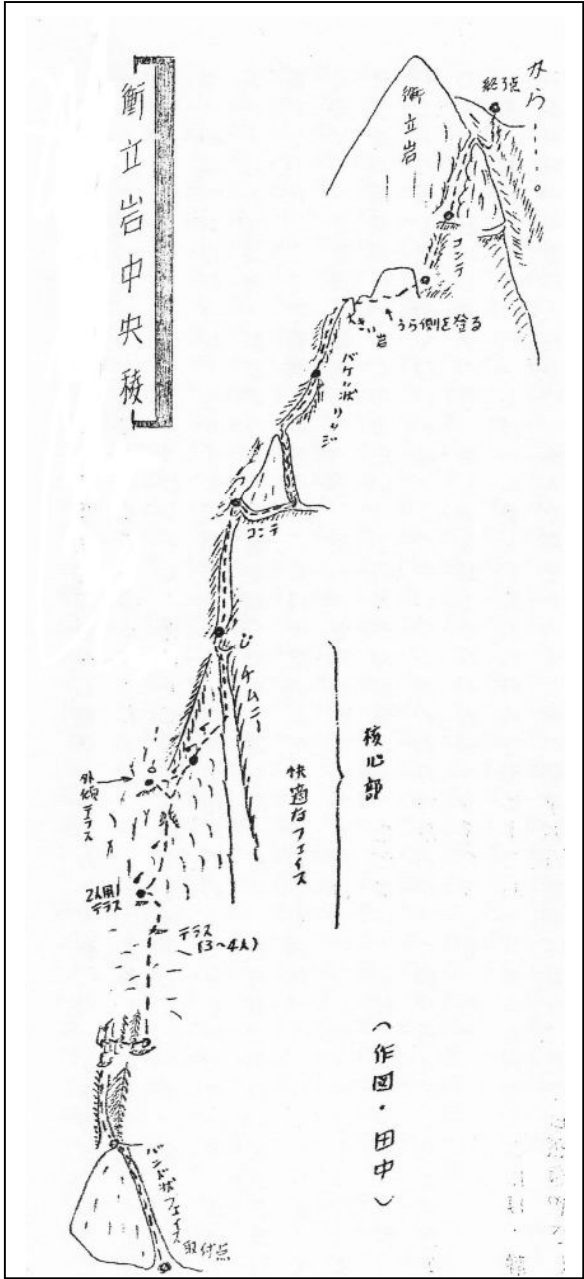
「一ノ倉」という名は、僕に深い沈黙を与えてくれるのだ。それは僕にとつて、「恐怖」の代名詞でもある。

だが今日は、王女さまが一緒。暗い一ノ倉に灯す二つの星に血が通うとき、なんと光輝いた幸せが感じられることだろう。暗いからこそ、愛する生命の輝きで、スラブ(平坦な岩)の小さな凹凸さえも照らし出せるのだ。

「それじゃ!」、と声をかけて僕に登りだす。三角のフェイスに区切られたバンド状の壁を左上すると、髪の毛のようにフサフサした草付きに、ふっと、いたずら気が涌く。子供の頃、田んぼの畦道に生えるレンゲやハコベを刈にいったものだった。それらの草はやがてウサギの胃袋に入ってしまうのだが、それらに混じって名も知らぬ雑草が少女の髪のように、スラリと伸びている。畦道に沿う二本の輪達に少女の髪草を結び合い、雑草の中に髪草のアーチを隠す。ぼんやりと後ろを歩く友達はその気に気づかず、つまずいてステッ、コロリン。倒れた友と顔を見合わせる。友は怒った顔立ちの中で、その目は笑っている。

衝立岩になびく少女の髪草を結んで、下で確保する王女さまに笑顔の合図を送る。

だがやはり、ふざけて登るのはやめよう。一ノ倉沢は僕にとつて、恐れ場なんだから。結んだ草を解き、僕はふたたび登りだした。



王女さまは何の臆気もなく登ってくる。快調・・・、快調・・・。

岩と泥で階段状の凹角を登り、ハークンにカラビナを掛け、ザイルを通してフェイスを右へとトラバースする。続くフェイスから草付きのテラスを過ぎ、一段上にハークンが打たれている二人用テラスまで登る。王女さまは表情のない顔をして登ってくるが、別に怖いわけではない。憧れと期待で、つい黙ってしまうのだろうか。なにしろ、初めて触れた一ノ倉の岩場なのだから……。

順層でホールド豊富なフェイスを快適に登ると、傾斜が落ちる。手前にリッジが伸び、右手にチムニー(筒状な岩)が開けている。僕はカラビナがなくなったのでハーケンをポケットにしまい、吊るしていたカラビナを使って小さなスタンスの上でグリップブレイをする。三トビほど下にある外傾テラスまで王女さまに登ってもらい、回収されたカラビナをザイルで吊り上げる。僕はチムニーに入り込み、出口がcaぶった壁を腕力で乗っ越した。だが、腕力のない王女さまは苦しそうだ。ここでの苦戦は予想の上だが、王女さまは頑張ってジリジリと登ってくる。アブミを使えば楽だろうが、それは安易な解決にすぎない。ピーンと張ったザイルに、王女さまの呼吸が伝わってくる。この大きな岩壁の真ただ中に、孤独で一人取り残された寂しさを感じないのは、この赤いザイルのおかげだ。一瞬、グラツとした王女さまもすっかり岩にしがみつき、苦しみを乗り越えて僕が確保するテラスに立った。

もう、核心部は終わった。しばし休んで乱れた呼吸を整えよう。リズムとバランスには、静かな呼吸が必要なんだから。並んで腰を下ろすと僕の闘争的な興奮はさり、自然な優しい心が戻ってくる。

生命のない黒い岩肌、その中にこそ真に力強い生命の花、人間の生命を咲かせることができるのだ。

核心部を過ぎると、頭上には凹んだ道が続いている。

【タイム】

土合(二・五〇)↓一ノ倉沢出合(四・〇〇)↓四・五〇)↓中央稜基部(六・一五)↓六・五〇)↓中央稜登攀終了点(九・四五)↓一・〇〇)↓六ルンゼ右俣下降開始(一一・四〇)↓本谷バンド(一四・三〇)

4・滝沢 下部ダイレクトゝ第一スラフゝドーム正面壁

期 日 一九六七年八月三十日

パーティ 古井孝明・田中文夫 (コンテニアスクラブ Ⅱ 会報NO.8)

雑然としたいつもの騒ぎは全くなく、快適な眠りに三等寝台(座席の下)の僕が正気に戻ったのはトンネルの中。しまった……。眠り過ぎて乗り越してしまったのだ。

『国境の長いトンネルを抜けると雪国であった……。』川端康成の小説【雪国】で知られる「清水トンネル」を抜けると、山間に小さな駅舎がある。ひんやりとしたそのホームに降り立ったのは、それでも十名近くいた。みなザックを肩に、大きな靴をはいている。照れくささのあまり、いたつて僕らの顔はほころんでしまう。その中にもう一人の登山者が、「乗り越しちゃいまして……。と、照れくさそうに笑顔を振りまいている。

メガネをかけた親切な駅員さんから案内書を受け取った僕らは、やがて目勘定を始めた。

ここは土樽駅の待合室。たった一つの蛍光灯に蛾が飛び交い、カブト虫はさつきから僕の腕を這っている。「やっぱり土合に戻ったほうが一番早いよ!」。そう結論をくださった僕らは、ふたたび深閑とした待合室で横になった。

小学生がちらほらと駅に集まってきた。雪国の夏休みは短く、今日から登校するのだろう。大切そうに定期券をしまっている。

一番の通勤電車に乗り、今度こそは土合駅に降りた。今日は水曜日。雨上がりの空は青く、山の緑は化粧を落として素肌立ち返っている。

指導センターに寄り、登山計画書を出す。「滝沢下部く第一スラブ」、係員の目は訝しげになった。横柄な対応から、「今日行つたて登れるものか。それにこんな遅い時間では……」と、僕は彼が口を開く前に、そう彼の言葉を聞いた。晴れ間が出ているとはいえ、雨が降り続いた。山を越えたお隣の新潟では、集中豪雨で大騒ぎしている最中なのだ。その言葉は、実は僕ら自身の不安な胸の内でもある。僕らとしても、「多分スラブは雨で濡れ、登れないだろう！」と、半信半疑だったのだから。しかし可能性は薄くとも、それはまだ推測の域にすぎない。僕が土合まで切符を買ったのも、この点にあつた。豪雨だろうと、風雪だろうと、登攀不可能を確かめるまでは、せめても取付点まで行かなければならない。新潟が集中豪雨だから、一ノ倉も悪だろうと思うのは、主観的な連鎖反応にすぎない。土合まで列車が通っているかぎり、やはり中止の理由にならなかつた。でかけたそこで天気が悪く中止になつても、本心から悔いることはなくなろう。だつて、仕方ないのだから。

「雨が続いたから十分気をつけるように！」。係員の言葉を後に、通い慣れた林道へと歩を進めた。雨上がりの空気は澄み、旧道の樹木も今日は生き生きと深呼吸している。あまりののどかさに、蛇が散歩をするかもしれない。

出合から見上げる一ノ倉の岩壁も、今日は絵のよう。今日のそれは僕らを圧倒していない。かといつて、それらの壁にハーケンを打ち付け、痛めて登るには美しすぎた。こんな日は出合いにひっくり返り、気の向くままに眺めているのが、最も山のムードに合っているだろう。

そんなムードに逆らつて、僕らは穏やかで美しい山々の中に意志を示そう。

ひんやりとした空気の中でテールリッジを登り、中程から一Pの懸垂下降で烏帽子スラブに降り立った。岩の間をぬって流れる水は温み、全く静かな一ノ倉沢。南稜にだけ白いヘルメットが二つ、蝸牛のように動いている。

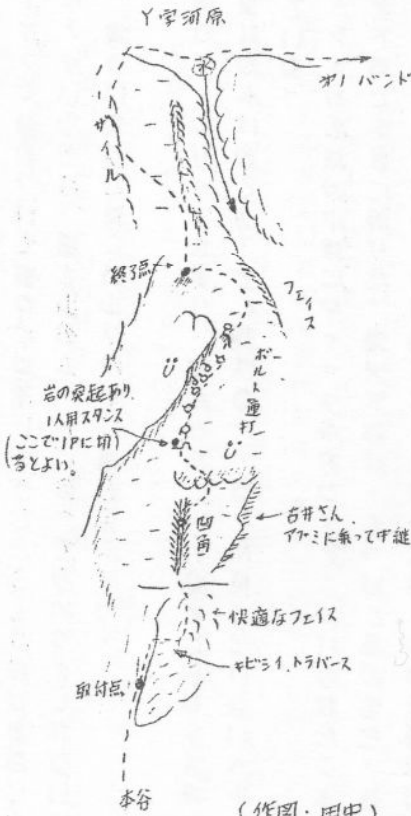
南稜テラスに延びるブッシュの尾根の途中にギヤップがある。そこに打たれた二本のボルトに捨縄をかけ、一Pの懸垂下降で本谷に降りた。滝沢下部は、もう目と鼻の先だ。遠くから見ると全く人を拒絶するようなその岩壁も、真下に立った僕らには僅かながらの可能性を見出すことができる。「滝沢」という名は、僕にとって最も怖い名前なのだ。

初めて一ノ倉に入った時だった。滝沢の逆層なスラブは太陽の光を映していた。丹沢しか知らなかった僕は、どんなに威圧されたことか……朝のパンは、喉を通らなかつた。僕らは一番易しい二ルンゼを登って広河原にいた。落石のような大きな音が、耳に飛び込んできた。それが何を意味するのか、広河原にいた僕らには分からなかつた。それは僕の恐れた滝沢スラブが、二人の若者の意志を拒絶した、その音だった。『ザイルに結ばれたまま二人がスラブを落ちてきた。先に落ちた一人は第一バンドで止まったが、もう一人はそのまま落ちてしまったので、ザイルに引つ張られて二人共本谷まで落ちてしまった。』と、そのとき中央稜を登っていて、墜落の全容をみてしまった古井さんは言った。

それ以来、一ノ倉沢、滝沢は、僕にとって最も怖い名前となつてしまった。「僕に登れるところではない」という先入観、しかし怖いからといって逃げてしまったのでは真の解決にならない。怖いからこそ、今日こうして僕は滝沢の一番下に立ったのだ。そして何よりも、僕にも登れる力が備わっているはずなのだ。

古井さんがトップで赤いザイルは伸びてゆく。五^{トドメ}登り、頭が押さえられたところでカンテを右にトラバース。古井さんの踵が細かく上下する。かなりキビシそうだ。カラビナをつかんで小さなフットホルドの上をゆく。右のフェイスに移ると、「これが岩登りだ！」というような、豪快なフリークライムができる。傾斜は強いが、ウロコ状の岩はガバツと握れ、グイツと身体を持ち上げることができ。全く快調。続く凹角をアブミで登る古井さんは、「カラビナがなくなつた！」と、凹角の中でアブミに乗って確保に入る。

滝下部ダイレクトルート
(カモシカ・ルート)



調子良く登り出した古井さんの様子から、「こりや、いただきだな！」という気がしてくる。僕はザイルを通したカラビナをつかみ、小さなスタンスを拾って凹角を古井さんのところまでアブミなしで登った。ツルベ式に僕がトップとなり、すぐ上のオーバーハングを登る。ハーケンをチエックし、二台のアブミを掛け替えるのだが、そう難しいことはない。最初は右上に、そして出口は左上へと登る。オーバーハングを抜けるところで、ザイルの動きが悪くなった。一人がやっと立てるスタンスに乗り、打ち残されたボルトでセルフビレイをとって古井さんを迎える。

古井さんはそのままオーバーハンズ下を右上へとアプミトラバースしてゆく。残置されたボルト連打で気分的には楽だが、ハングから垂れる水滴はつま先の岩を苔生し、ヌラヌラとアプミなしでは登れない。ホールドもなく、初登攀の苦勞が偲ばれる。オーバーハングを抜け、フェイスを右から捲くように登ると、傾斜が落ちてくる。ここからはもう、ザイルはいらない。

気づかった天気は、やはりバツとしない。国境稜線の上には、白濁した雲が押し寄せている。雲の層は薄く、ところどころで靑空をのぞかせているので、そう大きく崩れることはなさようだ。しかしスラブに雨は大敵だ。僕らはワラジを持つていないから。「スラブは雨に会っても大丈夫！」という噂を頼りにしてみるもの、やはり未知のルート、その名も高き「滝沢スラブ」なので不安は隠せない。

下部のカモシカルートを終え、ザイル、アプミをザックに入れ、すぐに登りだす。Y字河原から第一バンドを伝って本谷F1の落口に立った。落口の右をしばらく登り、左へトラバースして第一スラブへと延びるリッジを登る。ありあまるホールドと乾いた岩は、快適だ。思ったほど傾斜もきつくなく、ザツテルのように狭まった核心部めざして前後したり、並んだり、思い思いにルートをとる。ザツテル状の下はチムニー状に狭まっているが、中は階段状。問題なく通過した。

広大なスラブは登っても、登っても、高度が上がらない。とりわけ緊張するところもなく、いささかウンザリしてくる。かといって、雑に登ってもスリップしたら・・・アウト！本谷まで止まらないだろうから、気も許せない。滝沢スラブが困難なのは、高度なテクニクではなく、実はこの緊張の持続力が要求されるのだろう。乾いた状態での部分、部分をとつてみれば、初心者でもこなせる岩だ。しかしこれといったテラスもなく、高度感が出るので緊張する。もし落ちたら・・・と思うと、よけい萎縮してしまう。この緊張の持続力こそがキャリアと体力とファイトのたまものだろう。

頭上になおも広がるスラブの中を、僕が先頭になって右端へと登ってしまった。連日の雨でスラブの中には水流が生まれ、一面に濡れている。ぐしよぐしよで急なスラブを微妙なバランスで五つほど登ってしまった。その上のゆるいレンゼ状の草付を登ると、上は大まかな

逆層のスラブとなつてゐる。苔むしたそのスラブはとても難しそうだ。やむなく、ハーケンを打ち、懸垂下降で凹角を降り、水平に大きく左へトバースして、第二スラブと境界を成すリッジへと入る。しばらくリッジを登ると傾斜が落ちたテラスがあり、お腹がすいたので腰を下ろす。ここから眺める南稜は、何と短いことよ。登ると威圧的な衝立岩も、ここからはかなり傾斜を落としてゐる。

見上げるドームの頭はガスに包まれ始めている。急がなければならぬ。バター・コナツ、みつ豆、ゼリーと、大急ぎで頬張る。南稜の白いヘルメットの二人も、すでに六ルンゼの下降を始めた。僕らも早くスラブから抜け出そう。

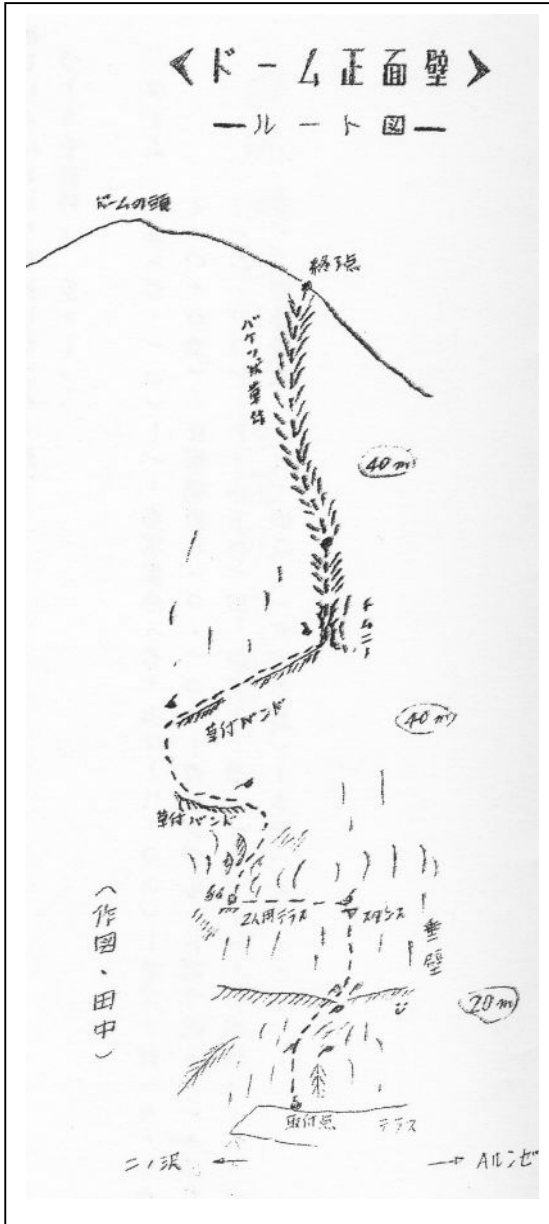
雲と争つて僕らも登り出した。草付のフェイスは濡れている。ハーケンが所々に打たれているが、先を登っている古井さんは「大丈夫だよー」と、相変わらずザイルを背負つたまま僕も続く。上部の草付は不規則な階段状で、足の短い我々は苦労する。かなり長い草付で、足元は切れ落ちている。草をひとまとめにしてつかんだり、もたもたしているとブヨに喰われる。僕らはもうすつかり、灰色のガスに包まれてしまった。第一バンドからここまで、ノーザイルで登っている。

やっとドームの下まで登り着いた。ここからAルンゼに降りられることを知っていたので、踏み跡を頼りに、Aルンゼ側へと向かった。新しいボルトに捨縄が二本かけてある。Aルンゼへの下降点だ。しかしルンゼの底はおろか、目前にあるはずのマッターホルン状岩峰も見えない。ドームさえも二十メートル先は見えない。全くガスに包まれてしまった。こんな時、初めてのルートには不安が生じやすい。

誰も登っていないので、ルンゼに石を投げてみた。しばらくして音がするが、距離は分らない。時計を測つてニュートンの法則も面倒だ。とにかく懸垂下降用のザイルを投げてみる。先端にハンマーをくくりつけたので、壁に当たれば音がする。……音がした。だが、ハンマーが見えないので、ルンゼの底か、側壁なのか分らない。宙ぶらりんでないことは確かなので、アプミ、ハーケン、捨縄を持って、僕が下降してみる。五メートル下るとハンマーが見え、どうやら側壁に当たつたようだ。霧に包まれた未知のルンゼに下降するのが可能だったとしても、危険な気がした。四十メートルザイル二本ならば確実に降りられるだろうが、今は半分の二十メートルしか下降できない。アプミで

◀ドーム正面壁▶

—ルート図—



中継するとしても、果たしてハーケンを打つリスが見つかるだろうか？僕はそれ以上降りず、すぐに戻った。

ドームに二本のルートが拓かれている。取付点さえ見つければ、なんとか上へ抜けられるだろう。易しくても危険であるより、困難であっても確実な方をとるべきなのだ。同じルートにビレイして、古井さんが十ほど登ってみるが、ルートは依然見つからない。視界が二十メートルも満たないのだから、ドームがどんな形をしているのかも分からない。二人共やや動揺した顔は隠せないが、最悪ならばビバーク(緊急露営)しても良いことだ。一瞬でもよいから、ガスが切れてくれたなら……！しかし、ドームの基部を一回りすれば、どこか

に取付点が見つかるはずだ。滝沢リッジや第三スラブからドームを登った記録を、いつか本で読んだ気がする。正面壁には羚羊山岳会によって、昨年新たなルートが拓かれたのを、今月号の「山と溪谷」でちらりと目にしたことがある。だが、不勉強な僕らには、その正面壁がどこなのかさえ分からない。正面壁と呼ぶからには、スラブの頭上となるだろう。とにかく、滝沢リッジの方へ廻ってゆけば、どこかにハーケンがあるはずだ。

コンテニアスで左の草付をゆき、リッジを廻り込むところからスタツカットで僕がザイルを延ばしてゆく。小石の道を過ぎ、やがて広いテラスに達する。……あった……！テラスが切れる手前に、真新しいハーケんと、古く錆びたハーケンとがあった。「あったヨー！」大声で古井さん呼びかける。古井さんもザイルをたぐって、すぐにテラスまで来た。やれ、やれ……、だけどオーバーハングがあるのに、ハーケンは二本しか見つからない。でも僕らにとっては、それらのたった一本が必要だったのだ。一時間近くもドームの周りを暗模索した結果の、たった一つの貴重な情報を手に入れたのだ。答えは、登ってみれば出ることだ。

雨がしとしと降る中を、古井さんが取り付いた。が、取り付きの濡れたホルドに思い切れず、次は僕が取り付く。……落ちてても下は広いテラスなのだ……と自分に言い聞かせ、濡れて外傾したフットホルドに乗る。うまくいった。すばやく二、三步登ってハーケンにカラビナをセットし、ザイルをカラビナに通すと一安心。頭上のオーバーハングにハーケンが見つかった。もう、ルートに間違いない。二台のアブミでハングを越え、垂壁を登って左にトラバースすると、ハーケンが打たれたテラスがある。古井さんを迎え、そのままトップを交代する。姿は見えないが、ザイルは序々に繰り出され、ほぼ四十杯一杯になった。テラスの上のフェイスから草付のバンドを左上し、少し登って右にバンドをトラバースする。チムニーを突っ張りで越すと、階段状の草付が続き、古井さんが確保していた。いつか見たルート図は、上部が草付になっていたことを思い出し、「もう難しいところはないな」と思う。ツルベ式に、次は僕が草付にザイルを延ばす。四十杯一杯で、稜線らしき踏み跡に出た。すぐ上がドームの頭らしいが、ガスはおぼろげにそれを見せてくれるだけ。果たしてオ

キノ耳へと稜線は続いているのだろうか？古井さんもすぐに続き、コンテナユアスでドームの頭に立った

まだ完登の握手はしない。オキノ耳へと続くはずの岩稜をゆく。視界は二十メートル。足下には、たしかに岩稜がある。しかしその先は、全く分からない。安全を期してスタックツトで三P登る。踏み跡があり、どうやら国境稜線に向かっているらしい。休む間もなく、コンテナユアスで登り続ける。「もう稜線みたいだ！」という古井さんの声に、ひと登りすれば国境稜線の小さなピークに飛び出した。

「やったぞー！」とばかりに握手する。

あれほど恐れていた滝沢スラブを、とうとう登ったのだ。自信はあったが、何か一つが僕を不安にしていた。未知への不安！しかしそんなものは、もうガスの中に捨て去ってしまった。僕らはこの足で、この指先で、登ってきたのだから。

古井さんもさすが嬉しさを隠せず、「登ったぞー！」と、灰色のガスに向かかって叫んでいる。三年來の念願だったのだろう。

ラジオやテレビは東北、新潟の集中豪雨を伝え、天気図は前線が一本、本州を横断している。おまけに列車は乗り越しし、出足は全く登るムードでなかった。滝沢の名にふさわしく、終盤はガスと小雨が僕らを盲目にした。手探りで踏んだそのピークだった。

【タイム】

土合(七・〇五)↓一ノ倉沢出合(七・五〇)↓滝沢下部(九・三五)↓一〇・〇五)↓登攀開始(一〇・一〇)↓カモシカルー
ト終了点(一一・四五)↓一二・〇〇)↓ドーム下(一二・四〇)↓一五・一〇)↓ドームの頭(一六・一五)↓国境稜線(一六・四〇)↓
一六・五五)↓土合(一九・一五)

5・滝沢 下部ダイレクトく第三スラブくドーム正面壁

(山岳同人・風 Ⅱ 会報NO.1より)

期 日 一九七一年八月三十日

パーティ 堀井忠夫・田中文夫

(堀井忠夫・記)

私が一ノ倉に入つて初めて登つたのが中央稜。そのとき、圧倒的なスケールで対岸から私を見つめていたのが、滝沢スラブ。二度目に入つて登つたのが、南稜。そのときも、滝沢スラブは私を見つめていた。

以来、一ノ倉に入るたびに、滝沢スラブは私を捉えて離さなかつた。中でもドームまでスッキリと一直線に延びている第三スラブは、大きく、恐ろしき存在であった。それゆえに、どうしても登つてやりたい私の憧れであった。高度差にして七〇〇m、滝沢下部からドームの頭まで、コンテニユアスの部分を除いても二五ピッチ(P)以上はある。しかもほとんどがフリークライミングであると聞き、どうしても登つてやろうと心に決めていた。

初めて滝沢スラブを見ると、まずその急峻さにビックリさせられる。とても人間が登れるところとは思えない。ルートファイディングの困難なこと、ビレーピンの少ないこと、上部の草付の急なことが、どの案内書にも書かれている。そのような困難さを知れば知るほど登攀意欲は募り、立て続けに計画すること三回。いずれも天候、その他で流れ、今年もダメかと思つていたら、やっと四度目にアタックすることができた。

夜のうちにテールリッジを登り、南稜テラスでツェルト(簡易テント)をかぶつて仮眠したが、さすがに寒い。

一本谷バンドから下降し、滝沢下部ダイレクトルートの取付点に立つ。

アンザイレン(ザイルを結び合うこと)して、いよいよ登攀開始。田中さんはここを登っているのです、私がトツプをやらせてもらおう。フリーで少し登ると、いやらしいトラバース(横断)。良くこの辺で落ちるといっているので、慎重に行く。テラスの手前はハング(オーバーハング)しておりアプミで乗っ越すが、ファイイ(引つ掛け金具)の紐がからんで時間をくってしまう。ファイイはカラビナと違い、つかむ部分がない。だからハングでは大変不利になる。私の人工登攀が遅いと言われる理由は、この辺にありそうだ。四十杯一杯でテラスに着く。

やがて田中さんが来て、そのまま上に行く。上部のハングに阻まれるスラブをトラバース気味に右へ斜上する。ここを越えると傾斜はゆるくなり、目の前も開けて快適なフェイスクライミングとなる。やがて、Y字河原である。こんなところに、こんなゆったりしたところがあるとは、思ってもみなかった。ここから見上げる第三スラブは、下で見るほど傾斜はない。まずホツとする。「そんなに急じゃないよ!」といわれていたが、自分の目で見るまでは、どうしても信じてできなかった。

ここからはコンテニユアスで、F1の右側にある草付リτζを登り、第一バンドに立つ。いよいよ本格的な第三スラブの登攀にかかる。心を引き締め、まず私がトツプで上部のハングをめざす。少々水が流れ、天候があまり良くないのでスラブ全体は濡れている。ハングに突き当たったところで水平に右側へトラバースし、ハーケンを打って確保する。

滝沢下部から六P目、田中さんがそのままトツプを行く。広く開けたフェイスとなり、登るに従って逆層気味で傾斜もきつくなる。やがてハングに阻まれるが、少し手前で小さなリツペ(稜)を左廻り、少し登ると田中さんが待っている大きなバンドに着く。高度感と傾斜が強いため、緊張させられるピッチだった。

ここからさらに左へトラバースし、簡単なフリークライムで約三十杯ほど登ると、ハングにぶつかる。上部が見えず、ザイルの残りが心配となる。ここでピッチを切り、次は田中さんに行ってもらおう。

ハングを越えたところに安定したテラスがあり、そこからトップを交代して私が行く。(前のピッチでここまでザイルを延ばすべきだった)少し登ると小さなハングが横に走っている。ハングに沿ってアプミを使いながら右へトバースする。高度感が出る。下の方に滝沢下部の雪渓が、大きな口を開けて我々を見つめていた。ハングの切れ間からフリークライムで直上し、四十杯一杯延ばしたところで残置ハークンを見つけ、確保する。第二スラブとの中間リッジの末端あたりである。

ここから左へトバース気味に簡単なフリークライムを田中さんが登り、次に私が右岸を直上する。やがて周りをハングが圧し、ジメジメしたところに着く。十三P目。次がいよいよ最後の滝である。

私がトップで直上する。逆層のスタンスに、逆層のホールドが肩の当たりにあり、それをつまむようにして、そろり、そろり、と登って行く。濡れていて、今にも滑りそうである。出口が見えてきたが、ハング気味で乗っ越しが悪そうだ。十杯ほど登ったところで、下の田中さんから「そこじゃなくて、右側のハングの切れ目から行くらしい。ハークンも見える！」と、声が掛かしてきた。ルートを間違えたらしい。滑りそうなスタンスでハークンを打つ。幸い効いてくれる。シュリングを通して下降する。

交代して田中さんに行ってもらおう。「上部のスラブにでたぞー!」、と声があり、私が登りだす。明るいスラブで傾斜もない。これなら雨が降っても登れそうである。

スラブの小さなリッペ(稜)の上で、初めて小休止とし、軽い食事とする。草付で雨が来たら・・・という懸念から、今まで休みも取らずに登ってきた。ここまでツルベ式(交互にトップを交代)できたから、ジッヘル(確保)のときに休めるので、それほど疲れは感じなかったが、前のピッチでルートを間違えたことに対し、精神的動揺を沈めてやろうという、田中さんの心遣いであつたらしい。

ここからは快適なフリークライムで、三P登ったところで大きなギャップに出る。ここは広いテラスになっており、安全にヒバークもできる。しかし今にも雨が降りそうで、早く草付を抜けねばとの思いから、この先は中間リッジに入ることにする。

いよいよ草付に入る。V級(グレード、I:…:VIでVI級が最困難のフリークライムもあると聞いていたので、慎重にまず田中さんから行く。ヤブをくぐったり、草につかまったりしてゆくが、踏跡は第二スラブ側へ大きくトラバース気味に登っている。四Pで、最終的には第一スラブの上部へ出る。心配していたきわどいところもなく、話にある悪い草付とは、中間リッジのギャップへ出ないで、第三スラブを直上する草付のようだ。

二十一P目、草付を登り始めてから初めて、重いザイルを解いてドームの基部までの易しい道を行く。広いバンド状になっていて、テントさえ張れそう。ようやく、ゆつくりとくつろいで、今登ってきたばかりの第三スラブを見下ろしながら食事をとる。

四十分ほど休んでから、ドームの登攀に入る。田中さんは第一スラブの時、冬の滝沢リッジの時、合計二度登っている。私がトップを行く。凹角をフリーで少し登り、アブミの掛け替えて右側のハングの上に立つ。ここでトップを交代し、IV級程度のフリークライム十五分で草付バンドとなる。

二十六P目、ついにドームの頭に立つ。

だがまだ握手はしない。国境稜線に着くまで終わりでないと、お互いに心の中で考えていたからである。アンザイレンしたそのままでは岩稜を行く。

アルンゼ終了点まで右に見えるマッターホルン状岩峰をやり過ごす。このM状岩峰を、高橋福四郎さんが初登攀していると聞かされておき、衝立正面にひけをとらないすごい岩層に、改めて驚きを禁じえなかった。アルンゼ終了点の少し手前でザイルを解き、百ほど登ると国境稜線に飛び出した。

「さまあみろ、やったぜ！」、初めて固い握手を交わす。

滝沢下部も初めて、滝沢スラブも初めて、そしてドームを登ったのも初めてである。それだけに、喜びはひとしであった。通らねば

ならない暗闇を過ぎ、さっぱりとした気持ちであったが、とっておいた楽しみをなくした寂しさも、同時に私の心を通り過ぎたのも確かであった。

.....

(田中文夫・記) **滝沢第三スラブの前後**

登攀にはドラマがある。簡単に登ってしまえばドラマ性は薄く、何度も失敗するほどドラマチックになつてくる。

私が滝沢スラブをこの目にしてから、すでに丸六年が過ぎていた。

六年前、そのとき初めて一ノ倉沢に入り、二ルンゼからDルンゼを登った。テールリッジから見上げる岩壁群に、すでに私のフアイトは圧倒され、食べることもすら満足にゆかなかつた。我々がザツテル(二ルンゼとDルンゼの間)に着いた頃だ。何か落石のような大きな音がした。その音が何を意味するのか、我々には分からなかつた。コンテニユアスクラブに入会して、最初の一ノ倉集中登山のときだった。中央稜や南稜を登った者は、その全貌を見てしまった。二人のクライマーが滝沢スラブの上部から転落した音だったのだ。

私と滝沢スラブとの出会いは、こんなことから始まった。それ以来何度テールリッジを登ったことだろう。衝立岩や烏帽子奥壁、南稜、中央稜、各ルンゼを登りながら、幾度も滝沢スラブと向き合った。滝沢スラブに向き合おうと、誰しもが圧倒されそうに切り立っているし、雨後のスラブは白く光る。とても登れそうには思えない。特に第三スラブは伝説めいた困難が、クライマーの間に伝わっていた。その困難に立ち向かったのが松本龍雄氏ら雲表クラブの四人であり、今からすでに十三年前となる。

四年前、私は第一スラブを登った。血気盛んな頃で、新潟の集中豪雨が治まった翌日であり、スラブには水が流れていた。しかしフアイトは揺るがず、下部ダイレクトを終えてからドームの基部まで(第一スラブ)を、ノーザイルで登った。ドームのカモシカルートを登って稜線に立つまで、ほぼ五時間であった。

さらに昨年二月、滝沢リッジを登った。(冬季登攀)

しかし第三スラブは、ボクシングでボデーを打たれてじわじわと体力を消耗してゆくように、その容貌は見れば見るほどジワジワと圧倒してくる。こんなとき、そのまま見過ごせばいつか時は流れ、登れなくなってしまう。逃げては解決にならない。取り付いてみることだ。同人として今のメンバーが集まって約二年が過ぎる。海の者、山の者とも分からなかった連中が、今はバリバリ登れるようになった。手とり、足取り、面倒はみないが、どこでも行けば登ってくるだけに育ったことが嬉しくもあり、それだけ私のパートナーが増えることでもあった。

そして今年、ようやく第三スラブを登ろうと、七月にやってきた。しかし天候が悪く、取付きから本谷バンドの昼寝に終わってしまった。八月二十九日、再度計画したが、丸六年寝ていた母の葬儀となってしまった。母の闘病生活は、私が東京のコンテニアスクラブに入会した年の秋からである。脳軟化症の一因が、私の山にあるのかもしれない。

私にとつて大きな登攀の夜、よく両親の夢をみた。穂高のとき、滝沢リッジのとき……、風雪荒れ狂うドームの基部で、私は「神様!」と心でつぶやき、「南無大師遍照金剛……」と、真言の一句を思ったこともある。それは幼い頃、母から習った真言宗の経文の一句だった。人は不幸が降りかかると、しばらくしてそれをね返そうと頑張る。「よし、ニスラを登つてやる」、久方ぶりに充実した気力で、堀井くんへ電話した。

九月十五日。我々は本谷バンドから下降して、滝沢下部ダイレクトの取付に立った。

登攀は順調に、さしたる困難もなく進んだ。めきめき上達した堀井くんは、登攀そのものに喜びを感じているようだ。六級ルート（最難関ルート）と称される困難さを、自信をもつて登れる喜びであろう。私は母の写真をポケットにしのばせ、伝説と闘いながらツルベ式にトップを交代する。

第一スラブを登ったときのほうが、高度感があつた。第三スラブは滝と滝を区切るバンドが高度感をさえぎっている。虚像は我々の想像をたくましく育ててしまふが、虚像に負けることなく実像を知ることが、クライマーの心である。山だけではなく、生活においても、である。血気盛んなときだけでなく、落ち着いてなお、真実を探求することには勇気がともなう。そしていつも、勇氣ある人でありたいと思う。

二十九日、約千二百メートルを八時間の登攀の後、国境稜線に出た。

交わす握手と笑顔の中で、宿題を終わった学童のような、ホッとする安堵の一時であつた。

6・滝沢リッジとドーム正面壁

(山岳同人・風 Ⅱ 会報Z.O.Iより)

期 日 一九七〇年二月八日

パーティ 杉山美裕(横浜蝸牛山岳)・田中文夫(山岳同人・風)

冬季滝沢リッジの初登攀は昭和三十五年であるから、ちょうど十年前になる。昭和山岳会・樽木氏らと、時を同じくして登った横須賀山岳会・亀井氏らによつて、二月の一ノ倉で一週間にわたる登攀によつて完登されたのである。

それから十年を経た今、気心知った杉山さんと登るべくやつてきた。それまで何度か冬の一ノ倉に足を踏み入れたものの、中央稜の基部や、衝立岩のアンザイレンテラスまでしか登ることができなかった。冬の一ノ倉を完登することは、私の大きな課題であり、どうしても通り抜けねばならない関門だったのである。

八日。

あまり天気は良くないが、晴れ間が見えるので出かける。夜明けの本谷をテールリッジに沿つて膝下のラッセルを続ける。本谷上部からの雪崩に気を配りながら急いでトラバースし、滝沢リッジの末端に延びる扇状の岩の右手に取付く。取付の雪壁にはクレバースが隠れているので、気をつけねばならない。

私がトツプでスラブに薄く雪がついた岩場を、トラバースぎみに左へ登り、ブツシュに入つて一Pを終わる。あとはツルベ式に、急なブツシュの中を直上してゆく。三P目で飛込台、七P目でオムスビ岩下のビバーク可能なテラスに着く。もうしばらく前から、ミゾレ混じりの小雪がちらつてきた。このテラスにビバークした跡があり、乳白の世界の頭上から、かすかに人声が聞こえる。そういえば薄くトレ

ールが残っていて、それに導かれて何となくここまで登ってきたのだ。

一休みしていると、後続の山岳同志会ハーテイに追いつかれる。スピードのある彼らに先に行つてもらふことにする。

九Pでオムスピ岩の上に出る。荷が重く、オムスピ岩の乗越しに、アプミ一台を使う。この先からが滝沢リッジの名をとった、リッジの登攀となる。リッジはブッシュの生えた雪壁と化し、その先はナイフリッジとなり、左は二の沢に、右は滝沢スラブに切れ落ちている。十二PでP1を越し、十四PでP2を越え、十五PでP3の基部に着く。ここもビバークに十分なテラスがある。P3は立派な岩峰で雪をつけず、油氷をまとっている。滝沢側のバンドに沿つてトラバースし、さらにアプミに乗つてトラバースとなるが、出歯アイゼンを持たない我々は油氷に滑り、次のハーケンに届かない。気を取り直し、二度目のアタックでやつと乗り越す。雪壁に移り、百三十以上のナイフリッジを慎重に越すと、二十一P目でP4の基部に着く。かぶつた凹角を右からぬけて、雪壁を登ると二十五P目でドームの基部に着く。

ここから直上するのがカモシカ山岳会で拓いたルートであり、私も夏に登つたことがある。油氷に覆われた垂壁は、極めて困難な登攀になろう。山岳同志会のすぐ後に続いて、我々も基部を右へ一Pトラバースして、ノーマルルートである横須賀ルートを登ることにする。この頃から天気も落ち着き、東尾根の彼方は薄赤く色づいて視界も開けてきた。しかし四時が過ぎ、ドームの基部でビバークとする。オムスピ岩のビバーク跡は緑山岳会のものであった。今宵は緑山岳会五人、山岳同志会二人、それに我々二人の合計九名が、ドーム基部でビバークとなった。

九日。風雪。

先着順に朝から、緑山岳会の五人が登り出したがピッチがあがらない。午後を過ぎても、ラストはまだドームに取付いていない。結局この日は夕方に、同志会のトップが一P登つてザイルをフィックスしたところで下降し、ドームの基部でビバークとなる。さらに後続の

アルムクラブ三名が基部に到着し、今夜は合計七人でビバークとなる。

夜行の疲れで昨日は居眠りしながら登っていたが、今日はゆっくりと寝つぶして、トイレに外へでるのも面倒なくらいだった。それでも午後には登れるかと思いい、外に出てみるがダメな様子に、雪洞を堀はじめた。最初は二人用と思ったが、だんだん豪勢となり、ついには七人収容できる大きな穴ぐらとなった。

十日。強風雪。

天気は悪くなる一方だ。三パーティで協議し、なるべく早くドームを抜けようと、ドッセル二重ザイルの我々と、同志会のザイルをフィックスして時間をかせぐことにする。先着順に同志会・板垣氏がトップを登り出す。十時頃、我々の番となる。私がトップでアプミの人工登攀を開始する。オーバーハングを右に乗っ越すところで、アプミを掛けたアイスハーケンのリングが外れ、墜落する。気がついた時には、取付の雪の上に座っていた。五^分ばかりの痛くも、シヨックもない墜落だったが、念の為に杉山くんとトップを交代する。そういえば昨年六月、穂高の屏風岩東稜の終了点間近でハーケンが抜け、杉山くんが墜落し、無事に止めることができた。「これでお互い様だな！」と、笑い合う。

杉山くんはハングを抜けた右のスタンスで、ピッチを切った。次は私が垂壁を登り、左へアプミトラバースしてガリーに入り、右手の灌木のあるテラスまで登る。さらにアプミトラバースでふたたびガリーに入り、草付バンドを右にトラバースして出口のかぶった凹角をフリーで右へ抜ける。その上はブッシュ混じりの急な雪壁で、ドームの頭へと続いている。杉山くんが続き、さらにドームの頭へとザイルを延ばす。私は岩が得意で、杉山くんは雪が得意だ。このルートを登るには、ちょうど良いコンビである。

二十九目でドームの頭。そこから先はナイフリッジのコル状となる。吹き飛ばされそうな風の息をぬって前進するも、岩と雪と強風とガスの中、うっかり厳冬の穂高を登っているような錯覚に陥る。強風の息の合間に少しずつ前進する。

三十一Pで小ピークの上に出る。さらにナイフリッジを一Pと、雪崩そうな雪壁一Pとで、国境稜線へと続く尾根筋へ出る。膝上のラッセルを続けること二Pで、国境稜線に出た。合計三十五Pの、長い登攀だった。

降雪量は少ないが、風の強い国境稜線はクラスト(氷化)し、追い風も手伝って、むしろ夏よりも楽だ。一度トマの耳に立ち、見当をつけて一直線に避難小屋(肩の小屋)へ下降するのだが、黒い岩影らしきものが小屋に見えたりして、取り巻かれたガスの中で小屋探し、西黒尾根の下降点を探し出すのが、冬の谷川で感に頼る困難なところだ。我々は少し右側に寄ったようだが、割合樂に小屋を見つけたことができた。十時頃に登りだし、小屋への到着は午後三時半だ。同志会の二人は一時頃到着したと云い、すでにツェルトの中で暖まっていた。同志会の渋谷氏はアイガーのダブルシューズ(二重靴)が凍りつき、内靴が脱げない。指も第二関節まで水泡になり、私の持っていたヨードチンキを塗って殺菌し、三角巾で保温してやる。しかし私と杉山くんはシングルシューズと、靴下は一枚でロングスパッツのみである。それでも凍傷にならず、杉山くんの手の指先が少し白くなった程度だ。稜線直下で手袋を交換していたのでたいしたことにはならなかった。このことからの教訓は、冬は身体を締め付けないことが大切だ。

フィックスしたザイルを、アルムクラブの三名が回収してくる予定なので待つが、ついに夜になつても到着しない。
十一日。ガス深し。

十時半頃、アルムクラブの三名が小屋に着く。昨夜はドームの頭でビバークしたという。やはり指先が軽い凍傷にかかったというので、湯を沸かせて指先を突っ込んだ。大したこともなさそうだ。ザイルを受取り、十一時頃、一足先に出発する。ガスが濃く、トマの耳に向かつて登り、頂上の少し手前の右手の雪のふくらみが西黒尾根だ。雪が深く、胸までのラッセルを、同志会の二人とともに交代しながら下る。旧道まで下り、ロープウェイ駅に午後一時半頃着く。滝沢リッジは登攀距離が長く、雪と岩と油氷と体力の、総合的な登攀技術を必要とするところだ。一度は登っておきたいルートである。

7・六ルンゼ右保

(コンテニアスクラブ Ⅱ 会報No.11より)

期 日 一九六六年六月十九日

パーティ 保坂公人・田中文夫

今日はギリシヨン(小雨)。テールリッジを登る連中は、みな揃ってゲンナリしている。六ルンゼ左保から五ルンゼを連続登攀の予定だが、ともかく南稜テラスまで登る。さすがの保坂さんも食欲がなく、きつぱりと左保をあきらめ、自信のある右保へ入り込んだ。

草付を登るとルンゼ状になり、滝にぶつかってアンザイレンする。保坂さんは一度トップで登っているからと、僕を先に登らせてくれる。水が流れ、出口がカブリ気味で気持ちが悪い。覚えたての『ザ・ロンサム・ヨーデラー』を二人して吠えながら、ツルベ式(交互に先頭を交代すること)に登ると、もう左右の分岐点だ。

保坂さんが二〜三步左保に触れてから、僕が右保へ入る。ヌルヌルで気味の悪い垂壁にアブミをセットし、南稜へと抜ける。

南稜をツルベ式に登り、最後のフェイスを保坂さんがトップで快調に登ると、我々が今日の一番乗り。

国境稜線の岩で遊び、雪を取ってスूपを作り、楽しんだ。巖剛新道の駆け下りにブツブツ言いながら、マチガ沢の出口へと下った。

【タイム】

土合(三・〇〇)↓南稜テラス(五・二〇)〜五・五〇)↓終了点(七・五〇)〜八・一五)↓オキの耳(一〇・五〇)↓マチガ沢出合(一二・

四〇)〜一三・三〇)↓土合(一四・〇〇)

8・烏帽子奥壁 中央カンテ

(コンテニユアスクラブ Ⅱ 会報NO.1より)

期 日 一九六六年八月二八日

パーティ 保坂公人・田中文夫

めずらしく昼の列車で上野を発ち、土合駅に着いたのは夕方の五時半だった。本谷への下降では、すっかり暗くなってしまった。ガスがたち込め、なんとなく不気味な一ノ倉も、我々のビバークする本谷バンドの頭上から、しだいに星が瞬き出した。ひっそりした一ノ倉の岩肌は、スラブの鏡に光をためて、星ぼしの瞬きに答えているのかもしれない。

保坂さんトップで登攀開始。バンドを右にトラバースして凹状岩壁に入り込んだ。やさしいスラブを過ぎる手前の左上するクラックからカンテに取付くが、全体的にモロイ岩だ。カンテというよりも凹角で、上部がフェイスとなり、ふたたび凹角となってチムニーへと続いている。チムニーの出口を右にトラバースするが、身体が外に振られてバランスが要求された。

草付バンドを右へ水平トラバースし、フェイスを左上すると変形チムニールートと合流する。傾斜がゆるく、ホールド豊富なフェイスを右に登ると凹角になり、ピナクルの頭をつぶしたようなところに出た。頭上の垂壁を右に廻つて登り、A1級(人工登攀で一番やさしい)となっている凹角を、外側の小さなスタンスを利用して保坂さんが乗っ越す。

傾斜も緩くなり、灌木でビレイしてバンドを左上し、チムニーを越えるとバケツ状(不規則な階段状)の草付となる。傾斜があり、不安定と間隔が遠いため、コンテニユアスで手にしたザイルが邪魔になる。さらに左へとトラバースしてチムニーを登ると、グツと傾斜が落ちて烏帽子岩直下の終了点に達する。全てツルベ式に登り、十二Pの楽しい登攀だった。

六ルンゼ左俣との連続登攀を期していたのだが気が進まず、本庄山の会の飯塚さんとザイルを共有し、六ルンゼを下降して本谷バンドでトカゲ(昼寝)を決め込んだ。

【タイム】

土合(二七・四〇)↓一ノ倉沢出合(二八・二五)↓本谷バンド(二〇・四五)↓三・五五↓取付点(四・一五)↓四・四〇)↓終了点(六・五〇)↓懸垂岩(七・〇〇)↘七・五〇)↓本谷バンド(九・五〇)↘一二・三〇)↓土合(一六・一〇)

9・ある日の一ノ倉 ・ 烏帽子興壁 変形チムニー

(山岳同人・風 Ⅱ 会報Z.O.T.より)

期 日 一九七一年七月十四日

パーティ 佐々木誉実(東京電力山の会) ・ 田中文夫

当年三十五歳、二人の子持ちである佐々木さんと、極めて困難ではなく、さりとて易しすぎないルートを、ゆつくりと登って見たかったのである。

平日の一ノ倉沢は静かだ。我々を含めて四パーティである。しかし天候は、バツとせず、取付から見上げる烏帽子岩はガスの中にボンヤリとしている。

ゆつくりと、四時間半をかけて一ノ倉尾根へ出た。

若輩の私がザイルをリードし、先立って稜線に立った佐々木さん。登攀を終えて交わす握手。歳は忘れ去った和みこそが、「山ヤ」の友情だと思う。

こんな山行もしてみたくて、佐々木さんと私の初めての山行に、変形チムニールートに登ったのである。

【資料】

当時、「山岳展望」第二次編集委員

現在(二〇一四年) 日本山岳文化学会会員 (佐々木さんは副会長)

第二章 ハケ岳

1・横岳 西壁 小同心クラック〜阿弥陀岳北稜

(コンテニアスクラブ Ⅱ 会報NO.7より)

期 日 一九六六年九月三〜四日

パーティ 中村祥子・田中文夫

九月三日。晴れ↓ガス。小同心レンゼの入口を間違え、小同心稜にくい込むスラブ状レンゼに入り込む。ボロボロな岩で、上部は垂直とオーバーハング。が、倒木や灌木が適当にあるから、さほど困難でもない。やがてハイ松のヤニに悩まされながらも、やっと基部に着く。小同心は普通二Pのルート。だがまずは二十^{メートル}直上し、二人用のテラスで中村さんの調子を見ながら確保する。頭上の垂直なクラックも、見るよりは登るが易し、ダンゴ状の岩だ。二十^{メートル}登ってクラック内の外傾テラスでビレーピンを打って確保する。中村さんは高度感に慣れたかな・・・。

今日はクラックの中を登る。上で二分されるが、やや困難な左を登ると、もう肩に出る。四十^{メートル}を一気に延ばした。肩を廻り込み、容易な凹角を十^{メートル}登ると、もう頭だ。トップを交代し、僕はカメラマンへと変身した。

【タイム】

美濃戸口(七・三〇)↓赤岳鉱泉(一〇・一五)〜一〇・五〇)↓基部(二三・四五)↓小同心の頭(二四・四〇)〜一五・〇五)↓横岳(二五・二二)↓赤岳鉱泉(二七・二五)

九月四日。ガス↓雨。目先しか見えない。やっと岩肌を見せた北稜らしきところへ踏み込む。ガリーは見た目よりも傾斜が強く、とにかくモロイ。一Pで抜け、上のハイ松帯を腕力で登り、右へトラバースしたところが北稜。

しばらくコンテナユアスで行くと第一岩峰。五^ノを快適に登ると、もう階段状でハイ松帯へと続く。すぐ上が第二岩峰となり、中村さんトップにてスムーズに乗っ越すが、何と十^ノくらいのもの。ザイルを解き、ハイ松にネをあげながらも、ピークは目の前だ。

【タイム】

赤岳鉱泉(七・〇〇)↓第一岩峰下(八・四〇)↓阿弥陀岳(九・一五)↓九・三〇)↓赤岳鉱泉(一〇・三〇)↓一一・四五)↓美濃戸口(一四・一〇)

2・阿弥陀岳 広河原沢奥壁 ニルンゼ 横岳 西壁 中山尾根 大同心稜下降

(コンテナユアスクラブ Ⅱ 会報Z〇.8より)

期 日 一九六七年三月一九〜二二日
パーティー 佐藤功・保坂公人・田中文夫

三月一九日。快晴。農場から入り、ニルンゼ出合の大滝の下にてピバーク。雪は締まり、ラッセルもなく、アイゼンは快適にきしむ。
【タイム】

農場(八・四〇)↓ニルンゼ出合大滝下(一四・四五)

二〇日。快晴。アイゼンをきかせてニルンゼ大滝の下に立つ。体調の良い田中がトップ、保坂、佐藤さんの順となる。左側のクラックに入り、残置ハーケン四本にカラビナを通す。出口がかぶったクラックに、アプミを使って氷結した滝の正面にトラバース。氷の垂壁にアイスバイルを振るい、厳しいバランスで抜ける。上は急な堅雪の壁となり、四十メートル一杯登った右側のリッジにまたがって確保する。

二P目はコンテナユアスで十メートルほどの滝の下へと登る。三P、氷結した滝の正面を登り、右へ二メートルトラバース、ホールドが大きくて、がっちりした雪と岩の壁を左へ斜上する。滝の上は堅雪のルンゼ状雪壁で、四十メートル登ったルンゼの中で、ピッケルを支点に確保。上部は同じような堅雪で、時折氷が現れる。ザイルの必要もなくなったが、太陽と雪と、碧い空との中でノンビリとザイルを延ばす。八Pで稜線に出る。

阿弥陀岳の頂上へはひと登り、日陰で -12.5°C だった。大休止の後、中岳とのコルから行者小屋へと下る。佐藤さんは風邪をおして出てきたのがたたり、いづこうに頭痛が治らない。やむなく以後の登攀を打ち切り、赤岳鉱泉まで下ることになった。

中山乗っ越して佐藤さんと別れ、保坂さんと田中で中山尾根に踏み込む。基部までラッセルがしてあるので楽だが、腹が空いて一気に登れない。一P目、基部から右へ下り気味にトラバース。左上に延びる浅いクラックに入る。ホールドが大きく、ダケカンバもあって、アイゼンで快適に登る。二P目、ツルベ式にトップを交代し、オーバーハングになった大きな岩の下を左へと廻る。日ノ岳ルンゼ側の氷壁に残されているステップを追い、上の雪稜に座り込んで確保する。雪稜をコンテナユアスで、上部岩壁帯の基部に行く。右に廻り、切れ落ちる手前から階段状の岩を二十メートル登る(三P)。さらに左へトラバースバンドを伝うと、灌木のある雪のテラスに着く(四P)。名も知らぬ鳥が飛んできた。右に続くバンドをたどり、急なクラックのダンゴ状ホールドを快適に登るとリッジに出る(五P)。その上を左に廻り込み、氷と岩の混じった急な壁を登り、身体が入るくらいに凹んだスタンスで確保する(六P)。風は冷たい。すぐ上は傾斜が落ちてトサカ状の岩稜が続く。日没が近いので岩稜をあきらめ、雪のバンドをトラバース(七P)。凹状の、正面がかぶり気味な岩溝を左か

らへずるように登ると、雪のルンゼとなる。夕月が浮かぶ日ノ岳頂上直下で、保坂さんが確保していた(8P)。

【タイム】

ビバーク地(六・五〇)↓大滝下(七・一五)〜七・五〇)↓大滝上(八・五〇)↓阿弥陀岳(一二・四〇)〜一三・三〇)↓中山峠(一四・一五)〜一四・五〇)中山尾根基部(一五・三〇)〜一五・五〇)↓上部岩壁帯基部(一六・五〇)↓日ノ岳(一七・五〇)〜一七・五五)↓赤岳石室(一八・二〇)ビバーク

二二日。晴れ。横岳に登り、大同心ルンゼに入る。アイゼンは快適にくい込み、雪崩る心配は全くないほど、ルンゼの雪はよく締まっている。正面壁の基部へ向かい、ちよつと嫌な雪壁をトラバースする。正面壁を偵察し、大同心稜を下る。ふたたび大同心ルンゼに入り、佐藤さんの待つ、赤岳鉱泉に着く。

雪質、天候の良い、絶好の登攀日和の三日間だった。空腹の連続登攀は苦しかったが、より上級ルートへの試練でもあった。

【タイム】

ビバーク地(五・五〇)↓赤岳鉱泉(七・三五)

第三章 北アルプス

1・北穂高岳 滝谷 第四尾根

(コンテニアスクラブ Ⅱ 会報NO.7より)

期 日 一九六六年八月二日

パーティ 鈴木喜之・高橋和雄・杉崎勝雄・田村達也・田中文夫

(田村達也・記)

第三尾根へ行く予定だった鈴木・高橋・杉崎パーティが変更して、私たちと四尾根を登ることになってしまった。C沢左俣を下つてスノーコルに着いた時には、すでに先行パーティが何名もいて詰まっているので、のんびりと取付く。

ツルムの頭まではリッジを登り、カンテ、凹角などさまざまであるが、全体的に岩が脆いので、落石を起さぬように苦勞する。ツルムの頭から少し下り、コルから十五分ぐらいのフェイスを登り、バンド状テラスから五分のチムニーを抜けると広いテラスである。

ここからカンテ状のところを二P快適に登ると終了点で、縦走路は少し上に見える。

四尾根は長大で、滝谷の概要を知るには良いルートである。岩はツルムの頭まで浮石が多いが、後半はしっかりしている。先行パーティがいて待たされると、うんざりする。

【タイム】

スノーコル取付(二〇・〇〇)〜一一・〇〇)↓終了点(一六・三〇)

2・前穂高岳 北尾根 四峰正面 明大ルート

(コンテニアスクラブ Ⅱ 会報NO.7より)

期 日 一九六六年八月一日

パーティ 古井孝明・野沢武洋・田中文夫

(古井孝明・記)

北尾根五く六のゴルから、今ではすっかり道らしくなったところを下る。奥又白の岩場が手に取るように見渡せる奥又白本谷へと降り立つ。ここから岩場の下まで雪渓を登り、インゼル下部の赤茶けた岩の少し上から草付を登れば、取付点である。

岩場のルートはどここもとれそうだが、L字洞穴を目指す。我々が登ったルートは中大ルートであるが、現在では東南壁と正面壁の間の緩傾斜部分を、明大ルートと総称しているようである。

取付からはL字洞穴を目指し、草付まじりで浮石の多いところを斜上気味に登り、快適な登攀は味わえない(一P)。二P目、L字洞穴の下でフェイス状のところをトラバースし、L字洞穴右の凹角状を登る。この辺りでようやく、登攀らしくなってくる。凹角状を抜けザラザラしたところ一Pで終了点となる(三P)。あとは四峰まで一息だ。

【タイム】

取付点(九・二五)↓終了点(二〇・四〇)

3・前穂高岳 北尾根 三峰リッジ

(コンテニユアスクラブ Ⅱ 会報NO.7より)

期 日 一九六六年八月五日

パーティ 古井孝明・田中文夫

C沢からB沢へトラバースするインゼル上部の、三峰リッジ末端から古井さんトツプで取付。フェイスを快適に二十^{メートル}直上した古井さんの姿が消え、緩傾斜となった草付に四十^{メートル}一杯にザイルを延ばす。

ツルベ式にトツプを交代し、目の前の三^{メートル}の垂壁を登ると、ゆるい馬の背状のリッジとなる。右岩稜、東壁、Dフェイスと、手に取るよ^うだ。コンテニユアスで二十^{メートル}登ると、五^{メートル}ほどの垂壁が立ちほだかる。C沢側から廻り込み、左へ斜上したが浮石が多くてあきらめる。草付バンドC沢側逃げ、外傾したテラスで食事をとる。四峰東南壁が目の前だ。

やさしいリッジから凹角に入り、バンドに立って確保する。

凹角を直上し、ピナクルの下を左に廻る。ここからハイ松が現れ、簡単な2Pをツルベ式に登る。踏み跡のような草付をC沢側へトラバース気味に登れば草付混じりのフェイスとなり、頂上直下の岩峰へ出る。やさしい凹角を三十^{メートル}登ると、三峰のピークに立った。

【タイム】

取付点(七・五〇〜九・一〇)↓三峰(一一・二五)

4・前穂高岳 屏風岩中央カンテ 岩溝ルート

(山岳同人・風 Ⅱ 会報ZOOIより)

期 日 一九七一年十二月二十九〜三十一日

パーティ 佐藤功・田中文夫

二十九日。快晴

天候は全くのピーカン(快晴)。慶応尾根パーティを見送ってからすぐ、慶応尾根末端にあるベースキャンプ(BC)を出る。梓川をト
ラバースして夏道を横尾に向かう。屏風岩の東壁には、すでに赤や青の点が散らばっている。涸沢への道はトレースがしっかりついている
が、涸沢新道への分岐点を見過ごしてしまったため、中央カンテの末端とおぼしきところをめがけて分け入る。十一月に取付点付近
を偵察しておいたため、中央カンテに至る押し出しはすぐに分かった。

下部岩壁の取付付近は腰までのラッセルとなるが、さして長い距離ではない。下部岩壁の雪壁を少し登ってから、アイゼンを着ける。
十二時の交信時間なのでトランシバーを探すが、ザックの中身を全部出しても出てこない。一度ザックに入れたはずなのだが、嫌がって
逃げってしまったのだろうか。これで東稜を登っている富田パーティとの連絡がとれなくなってしまった。T3に赤いヤツクが見え、時折声
も聞こえるので、我々も大声でコールしてみるが、さっぱり応答はない。

アイゼンを着け、手袋をはめていよいよ下部岩壁を登り出す。クローアル状の雪壁は雪崩の通路のために良く締まっている。シャル
レの出歯アイゼンが心地よく突き刺さる。それもすぐにふんわりした雪稜となり、腰までもぐる。左にトラバースすれば夏道ルート
だが、我々は登れそうなところを直登する。雪は柔らかく、ブッシュを掴んで登る。下部岩壁を三分の一ほど登ったところで、アンザイ

レンザイルを結び合う。まったく不安定な雪で、膝以上もぐつても安定したスタンスにならない。雪崩のように雪を落とし、トップを交代しながら登る。「八高テラス」といっても、どこだか分からず、それでも二人は何とかなるだろうと思っている。登れなければ、降りれば良いのだ。登攀原理はそうなのだが、「登れない」限界を自覚するのが、いわゆる登攀者の能力だと思っ。

アンザイルンして七P目。インゼルルート取付の、オーバーハングの右斜め下に、太い灌木が密集している。たぶんそこが岩溝ルートの始まりだと思っのだが、どうしても灌木帯へトラバースできない。ザイルを結んでいるものの、トップの墜落は許されない。ハーケン、カラビナはザックの中で、セルフビレイは確かでない。足元はスパッと切れ落ちているが、頭上の垂壁の枯木を頼りに、度胸を決める。二、三步登ると腕力はなくなり、墜落寸前となる。枯木を小脇に抱え、呼吸を整えて一気に垂壁を乗り切る。しかしその上も見通しは全く暗く、急な雪壁にふつくらした雪を乗せ、ブツシュはない。またもや覚悟を決めてそろそろと重心を移動させ、インゼルルート始まりのオーバーハングと雪壁とのコンタクトまで登った。しかしテラスはなく、右にも、左にも、動けない。夜のとばりもうつすらと降り出し、いささか焦りが出てきた。すでにザイルは一杯。二層上には捨縄が見えるが、そこまで登れない。仕方なくザックを下ろし、ハーケンを打つてみるが、岩が開いてしまう。雪を落としてリスを探すが、めぼしいリスはない。重ね打ったハーケンも、すぐに抜けてしまう。焦りは増すばかりだ。暗くなれば佐藤さんが登れなくなってしまう。またもや覚悟を決めて捨縄まで登り、カラビナとザイルをセツトしてからコンタクトまで降り、確保態勢を固める。

「佐藤さん、いいよー！」。枯れ木の垂壁はザイルで引き上げ、それでも例外と速く登ってきた。急な雪壁を切ってみると、二人が並んで座るに十分な広さとなった。月は煌々と蝶ヶ岳稜線の上に輝き、横尾の灯が点々としている。セルフビレイをとってツェルトを被ると、垂直の世界を忘れて丹沢の河原にいるような気さえしてくる。アルファ米と釜飯の素、それに生のナメコを入れた味噌汁が今宵の夕食だ。ビバークの夕食には、草履のような肉が四枚もある。

三十日。曇りのち雪。

パツとしない天候に、なんとなく出渋ってしまった。明け方から雪が流れ、もう一面が花曇りである。まもなく雪が降ってこよう。

アンザイレンしたのは十時ちよつと前。斜め下に見える灌木帯までのトラバースは厳しそうだ。しかしジツヘルポイントは上なので、なるとかなるだろう。昨日のトレールを慎重に下り、灌木帯と水平にトラバースする。急な岩壁にふんわりとした雪がのついているだけのデリケートなトラバースだ。しかしなんとかごまかしなら、落ちずに済んだ。下から声が届き、なんともう、二P下にヘルメットが見えるではないか。昨日は我々二人だけの岩壁だったのが、そうもゆかなくなってきた。しかし行く手にトレースがあるわけでなく、我々二人にとっては冬季初登攀と条件的に違いはない。我々は夏さえも岩溝ルートを登っていない。違うのは、心である。「すでに十余年も前から冬季に登られた」ことの事実」が、「我々にだつて登れる」という推量を呼ぶのだ。我々の心は、まだ追従者でしかない。それでも一つ、装備がある。出歯のアイゼンは、欠点に比べ、利点が勝っている。

岩溝ルートの始まりの灌木帯にやつと着いた。佐藤さんは意外とスムーズにトラバースを終える。トップを交代し、いよいよ岩溝ルートに入る。岩溝ルートの一P目。カンテラインを右に廻り込む。浅い凹角を登り、ブツシュと雪の壁を右斜上し、木に乗って一P目を終える。足元が切れ落ちているとはいへ、ブツシュの密生した壁に、下部岩壁ほどの高度感はない。

二P目。ふかふかの雪壁から、いよいよ核心部がおおいかぶさってきた。岩溝といっても全体的に広いフェイスとなっているので、どこを登るのか分からない。頭上にオーバーハングがあり、ずっと右のフェイスに捨縄が見える。フェイスといっても何本かのクラックが突き上げている。降雪で上部がはつきり分らないが、どうやらハング下を左に捲いてから、凹状の壁を登るらしい。カンテラインから、垂直壁よりのガリーを登る。ところどころブツシュがあるが、傾斜はかなりきつい。氷も発達しておらず、岩の表面を五ミほどのやわらかい氷が覆っているが、スタンスにはならない。五く六ミ登ってみるが上部にテラスは見当たらず、捨縄を見つけただけである。カラビナを

通し、ザイルをセットしてみるが、降り続く雪が一丸となつておそいかかってくる。チリ状の雪は身体を引き剥がすほどの威力はないが、連続して絶えることがない。佐藤さんに雪壁と岩壁のコンタクトまで登ってもらい、さらに上部をアタックすべきか相談となる。今日の天気は良くなる見通しもなく、さらに上部の岩溝に入り込むほどにチリ雪崩は集まつてくる。捨縄にザイルをフィックスし、下降してビバークすることに決める。

一P目の終わりより少し下の雪壁はカンテラインが大きくかぶり、チリ雪崩を避けることができる。切り開くと、かなり広いテラスとなる。畳二枚分ほどの真ん中に、ツェルトを張る。まだ一時ちよつと過ぎである。やがて下から声が届き、JHMJの二人がテラスに着いた。夕方近くにはさらに大阪の三人パーティが到着し、今宵は七人でにぎやかなビバークとなる。濡れたツェルトは通気性が悪く、夜中にローソクは消えるし、呼吸困難にもなり、「まるで八千^ギみたい……」、とばかりに、時々入口のチャックを開ける。

人が集まると、弱気な人間は不安なことばかりを考えなくて済む。自分に忠実であろうとすると、我々は自信家にはなれない。時には自己を欺き、過大評価してみることも必要だ。それが行動のエネルギーとなり、自己の能力が頭で考える以上のものであることにも気づく。

三十一日。曇り のち 快晴

朝、花曇りであった。そんな中、先着順に我々がトップで七時に出る。準備は六時頃終わっていたのだが、夜が明けきららないので待っていた。アイゼンを着けている時、突然にシャルレの一番先端のリングが開いてしまった。出発を前に下駄の鼻緒が切れるような、何ともいやな予感がある。昨日残置したフィックスザイルのところまで、簡単に登った。佐藤さんも続き、雪壁と垂壁の切れ目で灌木にセルフビレイをとる。

ここからが岩溝ルートのコア部分らしい。私がトツプで登りだす。昨日ザイルをセットした捨縄までの五メートルを登ると、いよいよ垂直に近くなる。その上の一歩はホールドが乏しく、踏み切れない。一歩登ってしばらくするとスタンスが崩れ、三十センチほどスリップするが、左足のスタンスで止まった。次は気合を入れ直し、懸命に登る。ところどころブツユがあり、夏は草付なのだろう。アイゼンの爪が泥に突き刺さるような感覚だ。傾斜が強く、柔らかな雪はホールドにならず、トラバースもあつて非常に困難となった。それでも何とかハング下の太い灌木まで登り着き、ピッチを区切る。佐藤さんはユマールで続くが、なにせ二度目のユマール（投降器具）登攀の不慣れな手付きで苦闘している。それでもやはり、ユマールの方が速い。二人共かなり腕力を消耗したので、なんとなく次のピッチへ出にくい。しかたなく、私が出る。

頭上の雪はかなり厚いが、全然スタンスにならず、全部落としてから岩を掘り出す。と、垂壁にボルトが一本残置されている。アブミをセットし、右上の小さなスタンスを利用して、ハングの下にもぐり込んだ。左に廻り込めるバンド状になっている。左に廻り込むと頭上はやや凹状となり、核心部の岩溝が続く。溝といつても雪と氷の垂直に近いフェイスである。雪崩のように雪を落とすため、後続のJHJパーティのトツプから声がかかり、彼らの厳しいトラバースが終わるまで、我々の行動を停止する。その間私はハング下にハーケンを打ち、カラビナを通す。

天気はすっかり回復し、空は青い。足元は切れ落ち落ち、下部岩壁の取付近くには、またもや中央カンテを登るだろう二人のパーティが見下ろせる。後続の厳しいトラバースが終わったところで、ふたたび登り出す。雪崩のように雪を落とし、柔らかいクラスト状の雪をホールドにして、慎重に登る。やがて右壁がオーバーハングになってくるが、丁度そこにある灌木につかまり、左側を抜ける。ここは垂直。灌木につかまる時は手袋を外す。三十五メートル登ったところに灌木があり、その木に乗って確保となるが、体勢は極めて悪い。草付を剥がしてリスに打ち込んだハーケンは半分も入らず、全体重をかけることはできない。ユマールで登るはずだった佐藤さんは、私の

ザックも背負って登るといふ。頭の上までザックを乗せ、それでも確実に登ってくる。さすがだ。三分の二ほど頑張ったところで力尽き、ザイルにぶら下がってやっこのことで私のザックを下ろし、少し身軽になってふたたび登る。往年の気迫がなくなつたとはいへ、さすがに確実なクライミングだ。私の脇をくぐり抜け、少し傾斜の落ちた灌木帯の雪壁にザイルを延ばし、太い木にビレイする。私が続く。すぐ上はガリーとなつて狭まり、出口はシグしている。右側のブッシュに沿って登れないこともなさそうだ。しかし岩溝を終えたら左へトラバースするという。そういえば、左のカンテラインから落ちる壁に、ハイ松と雪がバンド状に不連続なつき方をしている。よく見るとカラビナ一枚が残置されている。

私は少し疲れてきた。佐藤さんと登れば、必ずトップに立たなくても良い。佐藤さんならなんとかなる、と思うと、つつい気が緩んで疲れを感じてしまうのだ。佐藤さんも同様に、「田中と登るとトップをまかせられるから、つついトップを登らなきゃ！」という気がなくなつちやうよ！」という。そういえば佐藤さんはイネムリしているような顔して登っている。次のカンテラインへの廻り込みはどうにも気が進まず、佐藤さんに出してもらふ。ゆつくりだが、それでも確実に安心して見ていられる。廻り込んで姿が見えなくなり、ザイルが足りないので灌木帯の末端まで、五メートルほど移動する。トップを登ると厳しいところでも案外楽に登れるのだが、ラストでゆくと、「よくこんなところを登つたな！」と、感ずるところがある。カンテを廻り込むところでは、捨縄につかまって身体を左へ振り、やっこのことで廻り込む。足元はスパッと切れ落ち、後続パーティーはここですべて墜落したという。インゼルートとの合流点だろう。佐藤さんは太い灌木にビレイしていた。

ここから上は灌木帯だ。喉が乾き、雪をかじりながら登る。十五メートル登ると雪に覆われたカンテとなり、佐藤さんを迎える。もう傾

斜も落ち、足元が切れ落ちているとはいえ、さして困難ではなくなつた。雪崩のように雪を落としながら、佐藤さんが四十崙登ると、Aフェイスの基部となる。快晴の昼下がりの山々はのどかだ。ときおり雪崩の音が響く。「涸沢へ行くパーテイが、キスリングを放り投げた。逃げていった」と、佐藤さんはいう。そこは横尾尾根に突き上げるルンゼの末端だつた。

Aフェイスの基部でしばし腹に詰め込み、いよいよファイナーレの障害物、Aフェイスを登る。雪を落としながらトラバース気味に右斜上し、小ハングをアプミで越してバンドに立つ。ハーケンは二手の別れ、しばし迷つた末に左の凹角へとトラバースする。連打された垂直の凹角をアプミで慎重に登ると、雪のテラスである。夏の終了点。「やったー!」、しかしはやる気持ちを押し静め、ザイルを固定する。佐藤さんはユマールで続き、私のザックを押しながら登ってくる。午後四時。二人は夏の終了点に立つた。

後続パーテイの姿は見えない。かなり調子よく登つたのだろう。しかしまだ油断はできない。ザイルを一本外し、シングルザイルにして灌木帯へとザイルを延ばす。かなり雪は深いがスタンスにならず、杖を掘り起こしてつかまる。二P登ると慶応尾根の稜線に出る。トツプを交代して佐藤さんが岩稜を一P登れば雪の稜線となり、どうやら登攀終了のようだ。オレンジ色の空はやがて濃紺へと変わり、蝶力岳の稜線上にボツカリと、まん丸な月が浮かんでいる。

「どうも!」、手袋を外して交わす握手。私の山登りの恩師でもある佐藤さんとは、これで十分に心は伝わる。二人にとつてもエポックとなるビッグクライムであつたが、我々の心は静かだつた。もはや登り古され、痛めつけられました岩壁である。他者に成果を誇るものではなく、初登攀者の気概もない。かつて初登攀をなした時(韓国・ウルサンバイ)とは別な、二人に通じ合う静かな興奮であつた。

5・剣岳 本峰北壁 L1

(コンテニユアスクラブ Ⅱ 会報 No.8より)

期 日 一九六七年八月一日

パーティ 松崎徹・田中文夫

三日月のアゴのようにえぐられたベルクシルンドは降りられないので、コンテニユアスでAバットレス寄りにトラバース。スノウ・ブリッジから岩に飛びついた。今度は岩肌を、元のところまで大きくトラバースする。一箇所微妙なバランスを強いられ、やっとのことで取付き点らしきところに出た。

凹角上部のオーバーハング下を左にトラバースし、ホールド豊富なフェイスをガバガバ登ると四〇^分一杯でテラスがある。ツルベ式に松崎さんとトップを代わる。やさしいリッジから、かぶり気味な岩をダイレクトに登って四〇^分。すぐ上のハイ松混じりのリッジをコンテニユアスで登ると、スツパリ切れ落ちたテラスに着いた。左手のかぶった壁を腕力で乗っ越すと、垂直フェイスに突き当たる。フェイスに取付くがフリークライムでは自信が持てないので、降りて左のガリーに入った。フェイス上のバンドを右にトラバースして、小さなオーバーハングを腕力で乗っ越すと、ハイ松のリッジとなる。ナイフでバサッと切ったようなテラスに出た。すぐ左側がL2で、ここを終了点と決め込んだ我々は、ザイルをたたんで他パーティへの応援団に早変わりした。

【タイム】

B C(五・一五)↓取付点(九・〇〇)↓終了点(二〇・〇〇)〜二〇・二五)↓L2合流点(二〇・三〇)〜二一・〇五)↓頂上直下雪田

(一一・二〇)

6・剣岳 本峰南壁 A1

(コンテニユアスクラブ Ⅱ 会報No.8より)

期 日 一九六七年八月三日

パーテイ 小池武・田中文夫

カッティングをしてベルグシュルンドの中に降りた。

階段状の凹角からチムニーに入り、草付を登るとテラス。カンテを右に廻つて草付を登ると、頭上にリンネが大きく口を開けている。その左の細かいフェイスから、小さなオーバーハングを乗っ越してリツジに出る。小さなピナクルもあるが、リツジをダイレクトに四P登ると、容易になる。

あとはコンテニユアスで六十^{メートル}登つてザイルを解く。二十^{メートル}ほどの急な岩稜を登りきると、ここはもう三〇〇三^{メートル}の剣岳の頂上だ。

【タイム】

BC(五・五〇)↓一服剣(六・二〇)↪六・三〇)↓前剣(六・五五)↪七・〇五)↓平蔵のユル(七・三五)↪八・〇〇)↓取付点(八・一五)↪八・三〇)↓終了点(一〇・四〇)↓剣岳(一〇・四五)↪一三・一五)↓平蔵のユル(一三・三〇)↓平蔵谷出合(一五・二五)↓BC(一六・四五)

7・剣岳 チンネ 左方ルンゼとAバンドと右カンテ

(コンテニアスクラブ Ⅱ 会報 NO.8より)

期 日 一九六七年八月二日

パーティ 今村進治・田中文夫

(今村進治・記)

田中さんトップで草付バンドのトラバース。ルンゼの入口はスラブで逆層とのこと。だいぶ長い時間が過ぎたと思ったが、ほんの数分でOKの声。入口は足が届かず、片手でぶらさがる。ルンゼ内はチムニー登り、股の間から三ノ窓の雪渓が見える。もろいフェイスを一P。中央バンドで昼食をとる。

Aバンドのトラバースは高度感があり、緊張させられる。右カンテのオーバーハングをフリーで越える田中さんのバランスに見入っているうちにOK。腕力で強引に登る。後続の田村さんの声に下を見ると、靴の間の雪渓でアリののような人影が動いている。Bクラックに入ると簡単な一Pでチンネの頂上だった。

【タイム】

取付点(九・四五)↓中央バンド(一〇・五〇)〜一一・五〇)↓右カンテ取付(一二・二〇)〜一二・三五)↓終了点(一二・五七)〜一三・五〇)↓長次郎のコル(一四・二五)↓長次郎谷出合(一五・三〇)↓BC(一七・〇〇)

第四章 若き日の想い

(山岳同人・風 Ⅱ 会報No.1より)

1・エベレスト南西壁によせて

先ごろある新聞に、エベレスト南壁をアタックする国際登山隊のメンバーが発表された。それを見て、ふと二つのことが浮かんだ。一つは、ドイツのクライマーが参加していないこと。

もう一つは、ミシエル・ヴォーシエ、イベット・ヴォーシエ夫妻の参加である。

前者については、今ここに書くことではない。後者のヴォーシエ夫妻こそ、私の山登りに大きな影響を与えてくれたのである。

それは芳野満彦氏の著書、『われ北壁に成功せり』に記されていたことであつた。芳野氏が、アイガー北壁で墜死した渡部氏とともに、日本人として初めてマッターホルン北壁を完登した記録の書の中で、小さな微笑ましい発見として書いている。

芳野氏より数日前に、マッターホルン登頂百周年を記念して、スイスのガイド、ミシエル・ヴォーシエとその妻、イベット・ヴォーシエによつて、北壁が完登されていたのである。芳野氏らがたどつた氷壁の中に、やがてヴォーシエ夫妻のステップを発見した。芳野氏は、大壁の中で妻のためステップを刻むミシエルを想い、心とむととも自分の娘へと想いおよぶのである。

それを読んだ私は、山登りにおける一つの「美」を感じたのである。それは完全なる、エロスの世界でもある。

人間を拒絶する大北壁に挑むことだけでも、そこには登山行為を発想する「美」への憧れがある。それを実現するザイル・パートナ―として、男どろしの友情もある。しかしもつとも完璧には、男と女であるほうが美の世界に浸ることができないのではないだろうか。男と女、しかも人間の生命を否定する大北壁の中で、岩・雪・氷との闘いこそが、完全なる人間として創造できる美の形式となる。

男と女、それが夫婦でなければならぬこともない。しかし現代文明における身も心も許しあつた男女とは、人類最小単位のパーティとして、結婚という儀式を経た「夫婦」と呼んでいる。身も心も許し合うことに疑念を抱かぬよう、結婚という儀式での契りによつて、一つ一つの確認手続きが省略できる、便利な制度となつている。そのことはと・も・か・く、ミシエルがイヴエットを連れだつて登るマッターホルンの登攀に、私は「美」を感じたのである。

その頃私は、マッターホルン、グランドジョラス、どこへ行つても登れると思ひ込む、絶好調な時期にあつた。というよりも、山の怖さを圧倒しきれるだけの気力と、何よりもよじ登ることが楽しくて仕方なかつたのである。天から見れば、無謀ともいえる。そして本多勝一氏のバイオニア・ワーク論にある、『山は死んだ』という言葉を嫌悪した。理屈ではなく、よじ登ることが楽しい、感性を大切にしたいと思つていた。ヴォーシエ夫妻への憧れは募り、女性との登攀が増えていった。丹沢から八ヶ岳、谷川岳、夏の岩壁から冬の氷壁へと深化していった。

ちょうどその頃、良きパートナーだつた保坂氏が、青年海外協力隊としてラオスへ行つてしまつた。多様化かつ局所化の中にあつた山のバイオニア・ワークにあつて、私はヴォーシエ夫妻に憧れて夫婦での先鋭的な山登りに、その道を辿らうと思つたのである。それは完全な「男」としての振る舞いが要求され、逆にまた、完全なる男の証しでもあつた。身体的弱き者を護つて道を切り拓いて登る、「力の証し」とヒューマニズム。絶対に失敗を許されない「完全」であることと、その責任の遂行。それらを一つの登山において、ザイルのトップに登るその時、全能という名の神様になることでもあつた。

男女の優れたザイル・パーティは数多い。コガン夫妻、リヴァノス夫妻、レイモン・ランベルとルルー・ブラーズ、そしてヴォーシエ夫妻は現役最高のアルピニストだろう。日本においても優れた男女パーティはあつた。しかし、アルピニスト夫妻は知らない。

私たちはアルピニスト夫妻にならうと、新婚の旅を中央線に乗り、穂高へと向かつた。お金があるか、貯めるまで待つてグランドジョ

ラスの美しいといわれる北壁を登りたかった。しかしその手だてではなく、屏風岩から北尾根を登ろうと、穂高へ向かったのである。

それから早三年。やはりヴォーシェ夫妻は偉大であった。今年はいよいよエベレスト南西壁である。我々はまだ、グランドジョラスへの切符も買えないのだから。古川純一氏の店、ジャヌーへ行くと、古川さんは良く、「岡村くんを思い出すよー」と言われる。もうかなり前に夫婦して一ノ倉沢滝沢第三スラブを登られた記録を覚えていた。JMCに所属される岡村氏であろう。古くは日本山岳会の松田氏夫妻はヒマラヤで活躍されたというが、まだまだ我が国におけるアルピニスト夫妻は少ない。

我々の三年間は沈滞気味だった。毎年五十日近く入山しているものの、夫婦して登った最高なものは、秋の谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁中央カンテと、正月の甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣の登攀程度では、それまでの心意気に比べるとはなはだ不本意なものであった。そのことは主に、私自身の責任であった。

山登り、そしてその行為を裏付ける登山学への学問的興味は、山登りを単純な遊びとして楽しむことを忘れてしまう。知的欲求の充足は、必ずしも遊び心を刺激するものではなくなってくる。精神分析や行動科学が人間解体に走りすぎる結果、人間行動論理からの開放や、不合理なものへの創造的意欲を失わせてしまうように、心を解放させる情熱を失わせていた。登山の社会性という海に溺れ、自身が泳ぐことを忘れていたようだった。

山登りは精神の集中が大切である。危険があるから、散漫な精神では後悔を残すことになる。しかし山においても、家庭においても、四六時中アルピニストであるならば、もはや発狂する以外に強いアルピニストでありえないように感じた。発狂を発狂と自覚できらるなら、もはや発狂ではないのだろうか。発狂はエネルギーが集中し過ぎた発振状態であり、もはや収束しきれない逃避の世界へと移行するにも等しくなる。

山登りの根源的根拠への追求と、アルピニズム、そして家庭の日常生活の共存は、やはり凡人のタブーなのかもしれない。



夫・文夫隊長（右）と田中英字さん

ヒマラヤへおしどり登山

女性ばかりの日本隊が「なるべから英字さんもまた一人の女性隊員（女性）（シエル）に頼らないで」として荷舞作業者などに加わってがたりまじりようとなし、マナスル（八二五六）への登山を開始したが、隣に居るP29（別名マナスルと隣 七八九五）の

アルプスなどへ、山で知り合った文夫さんと結婚してからは積層の岩壁も一緒に登るようになり、昨年は朝霧岳の崩落岩、谷川岳一の倉沢の衝立といった第一登のルートも登った。男顔負けの食料手数は二百万円だから、なんと四割の一を浮かされた。

めざすマナスル山群の難壁

「二人で立ちたい頂上」

氷壁の西壁をめざす横濱山岳協会の登山隊でも、田中英夫隊長（右）で、特別に参加を許されたのは、英字さん（左）がハッスルしていない。あくまでも本の実力者である。AP電によれば、すでに同隊は四、三〇〇坪高に第一キャンプをうつたところから、願望な

行へてに立ちたがる。平均斜度六〇度の岩と氷の間に五、六カ所の前進キャンプを進め、五月下旬に登山予定している。英字さんは食料費計、五十万円相当の食料は女でももって来た。食料手数は二百万円だから、なんと四割の一を浮かされた。

この寂しさを乗り越えようと計画・実践したのが、一九七八年ポスト・モンスーン期の二度目の挑戦であった。その途上、一九七八年九月十四日、氷河崩壊の大雪崩により、三隊員死亡事故となってしまった。

（青春のヒマラヤに学ぶ―参照）

その報道は、登山隊出発（二月六日）後の一九七四年三月二十日、朝日新聞でおこなわれた。（出発後に報道するよう記者へ依頼していた）

2・谷川岳遭難防止条例 — その解決点 —

(良きザイルパートナー 保坂公人氏(餞別の書「一ノ倉」より 一九六七年九月二十六日)

岳人に大きなショックを与えた「群馬県谷川岳遭難防止条例」を、湯浅道男氏はその違憲性を指摘された。大変参考になった一文であったが、湯浅氏が示された点からでは、不十分と思われました。

湯浅氏は当年三十歳、愛知学院大学で法学部の講師をしてられる法学者。一昨年にヨーロッパス六大北壁の一つ、「ドリユ北壁」に成功されている。

そして僕は二十一歳、高校の助手をしながら独学で電気の勉強をしている者です。山岳会に入つて三年目で、まだ谷川岳一ノ倉沢衝立岩を登つた程度の未熟者です。

そんな僕が湯浅氏やRCCⅡ(第二次ロッククライミングクラブ)、さらには岳界や世間を批判するのは不謹慎なことでしょうか。しかしこんなことを書くことこそ、自己を正当化したい自己弁護にすぎません。僕も山登りを真剣におこなっている者の一人いうことを、ここに書きとどめておきます。

一、結論

まず、結論から記します。

(1) 山登りは人間にとつて否定されるべきものではない。

山登りの一側面であるアルピニズムをもちろん含みます。ここではそのアルピニズムを問題とします。

(2) 遭難防止条例は人間性の本質に反するものだから、その条例を肯定すべきでない。

しかしながら、登山者自身の為すべきことをおこなうてからそう言えるのである。

(3) アルピニストとしての為すべきことを為さなければ、条例によつて行為を束縛されるのも当然な結果である。

谷川岳遭難防止条例は、必ずしも違憲とは限らない。それでアルピニストは、どうすれば良いのだろうか。

(4) アルピニストとしての義務は、果たさなければならぬ。

アルピニストも社会を形成する一員であることを自覚し、社会生活における最低限度の為すべきことを為さなければならぬ。それができてから次が、条例を廃止させることになる。

二、湯浅氏への批判

「岩と雪」第9号に発表された湯浅氏の「登山規制条例の違憲性」は、そのサブタイトルに「条例への認容的態度を弾劾する」、と

あります。たしかにアルピニスト自ら、条例についての研究不足はあります。しかしアルピニストを弾劾する湯浅氏自身、それ以上に批判されなければならないと思うのです。

「はじめに」と題し、「私は、この条例問題について、単に登山者の立場としてばかりではなく、その経過を興味深くみつめていた」とあります。法学者であるのだから、この条例内容を分析し、検討できる能力はアルピニストたちにおいて、高い位置にあるでしょう。ならばどうして、見つめるだけで、施行の後に批判されるのでしょうか。

法律にうとい僕らは本能的に、違憲・合憲を問わず、自由を規制するそんな条例は人間性の喪失だ、と感じます。しかしそのことを実証し、論理展開させるだけの能力がありません。手も足も出ない自分を情けないと思い、何とかしなくては……と学び始めてみました。

条例が群馬県議会を通るまでには、検討する余裕が十分にあつたようです。県側は法務省へ問い合わせ、慎重を期したことは、湯浅氏の文章から読み取れることです。また、新聞やテレビの報道からもうかがえます。ならばなぜ、その時に湯浅氏の意見を開陳されなかったのでしょうか。なぜ……!!

氏はいう。「多くの人々は自己に対して適用されない法領域については、鋭敏な権利意識を持ち得ないという哀しい現実、および岳界の権利意識の低さ、なかならず、戦争体験を経たオールド・リベリストを自認する諸先輩の権利意識の低さに、暗澹としたのかもかもしれない」と。さらに、「過去の岳界が、何度も条例制定の予告を受けながらも、根本的な遭難対策を講じなかったこと。あるいは遭難は何といつても登山者に非がある、というアルピニズムをも勿論含みます。そしてここではその、アルピニズムを問題にしています。

アルピニズムもさまざま解釈されていますが、ここでは岩や氷を登ることを対象として、「より高く、より困難をめざす」思潮をい

ます。ことさらアルピニズムなどと名付けなくても良いのですが、様々な登山形態や登山動機の中で、一つの定まった傾向として、アルピニズムとしてみます。

参考にもう一つのアルピニズムの解釈を記してみます。やはりRCCⅡ、吉尾弘氏らのいう「アルピニズムとは、ただアルプスの山々へ登りたいという人間本来の持つ欲求であつて、そこに様々な意義づけは入っていない」、とするものです。

すでに「より高く、より困難をめざして登る」登山者が多勢いることは事実なのだから、それらの人々を称して「アルピニスト」と呼んでみます。そして吉尾氏自身、その最先端をゆく登山者であることも事実なのだから。

(2) 遭難防止条例は人間性の本質に反するものだから、その条例を肯定すべきではない。

しかしながら、そういう登山者自身の為すべきことを為さなければならぬ。為すべきことを為して、はじめてそう言える。

氏は言う。『多くの人々は自己に対して適用されない法領域については鋭敏な権利意識を持ち得ない』という哀しい現実、および岳界の権利意識の低さ、なかんずく、戦争体験を経たオールド・リベラリスト(注・古くからの自由主義者)を自認する諸先輩の権利意識の低さに暗澹としたのかも知れない。』さらに、『過去の岳界が、何度も条例制定の勧告を受けながらも根本的な遭難対策を講じなかったこと、あるいは遭難は何といつても登山者に非がある、というクリーン・ハンド的思考があることは正しいとしても、当局側でさえ問題意識として有した【合憲か、違憲か】という問題について、日本山岳協会等の条例審議機関はなぜ、徹底的な吟味・検討をおこなわなかったのであろうか』と。

しかし僕は氏に言いたい。「これらの言葉をそっくり、「ご自身に向けて下さい」と。知っていてやらないことは、知らないからやれなかったことよりも、劣るのではないのでしょうか。知らなければ、やりようがないのです。つまり、草案の段階で、「その条例は違憲だ」と、

どうして湯浅氏は指摘されなかったのでしょうか。

もちろん、その立場でないこともあったでしょう。様々なしがらみもあることでしょう。しかし、アルピニズムの本質を葬っても良いなどと、決して思われずまい。ガストン・レビュファの愛読書であるという、サン・テグジュペリの書、『夜間飛行』のあのリベール(実はサン・テグジュペリの信念と行為を静かに思い起こしてみましよう。本質を正しいと信じたなら、その本質に対しては先生や生徒、親分・子分的関係ではないはずですよ。「師の跡を求めず、師の求めたところを求めよ」と、弘法大師は言ったそうですが、探求の徒にとつて共通する態度と思うのです。審議中においてすでにそれらの情報をお持ちなら、どうしてもっとアピールされなかったのでしょうか。登山家であり、法学者であるのだから……。

「岩と雪」の文章内容から理解できる湯浅氏が『違憲だ』と言ったところで、条例制定論議を覆せなかったことでしょう。法律はエゴイズムの欲望を守るものではないと思うからです。次節以降に述べますが、人間の本質は「私」というエゴであると思います。同様に他者にもエゴがあり、そのエゴも認めなければなりません。エゴとエゴがぶつかり合い、それらの主張を円滑に調整するための潤滑油が法律ではないでしょうか。湯浅氏の文章からは、エゴの主張のみが表面にあらわれ、権利主張になっていると理解できます。

一方、「登山は遊びであるだけに、具体的な地元の人に対する迷惑や申し訳なさというような、道義的良心とは、切り離して考える必要がある」、とも述べています。しかし人間欲求の法的解釈の外側に、具体的な利害関係や感情論があることを切り離し得ないからこそ、条例制定というタガをはめられてしまったのではないのでしょうか。問題は前者(法解釈)にあるのではなく、後者(利害、感情)が見過ごせなくなつたからこそ、自由の規制という手段になつてしまったと、僕は考えるのです。

三、アルピニズムの肯定

— その哲学的背景 —

アルピニズムの肯定を、その哲学的な面から捉えようとしたのが、最初の意図だった。というよりも、哲学書を読むにつれ、アルピニズムとの関連があまりにも多かったので、その関係性を明らかにしたくなつたにほかならない。

アルピニズムの「より高く、より困難」への指向性は、人間の実存へと導かれる。そしてアルピニズムの行為は実存の極致でもあるニヒリズムの克服の一手段となり得る。実存とは一つのエゴであり、一人一人を区別する一番大切な因子であろう。エゴイストは、それだけで存在できる限りにおいて、決して悪ではない。エゴの主張は、行為における最大な動機をなしている。しかし自然の中でエゴを主張しようとするアルピニストにあつて、その深層にあつては様々な社会性を含んでいる。例えば今日で最上級グレードにランクされている谷川岳一ノ倉沢衝立岩正面壁の登攀において、「あの人が登れたんだから、俺だった登れるだろう」と、他人と比較した上での意志決定には社会性が含まれる。

近年は二、三年本格的クライミングをすれば、衝立正面も難なく登つてしまう。しかし、「近くて、よき山なり」と、初めて一ノ倉沢を世間に知らしめた大島亮吉や、中央稜、南稜ら幾多のルートを切り拓いた小川登喜男らにとつては、垂直とオーバーハングの衝立岩正面壁が登れると思つてはいなかつたことでしょう。ここに歴史が生じます。先駆者が残したステップの、さらなる次のステップに挑むアルピニストによつて、新たな世界が切り開かれます。幾多の名クライマー、杉本光作、高木正孝、渡辺兵力、平田恭助……、彼らの後を継いだ南博人と藤芳泰は、ついに衝立岩正面壁を突破した。先駆者のパイオニア・ワークがあつたればこそ、次なる課題へと挑戦してゆき、ここに登山の歴史が生まれます。

アルピニズムは困難(課題)を求めます。その困難(課題)とは、一体何なのでしょう。単なる苦しみではなく、その根源には快樂があります。より困難(課題)な登攀であるほどに、のちの楽しい思い出に浸った経験は多々あるでしょう。落差が大きいほどに、快樂もおきくなる、一種の麻薬効果があります。人間は死を恐れます。しかし死んでしまったら、もはや快樂は味わえません。死から生還し得た生の世界こそが最大の喜びをもたらせますが、一般社会にあつては禁じ手です。現代科学と哲学は、かつて古人が描いたであろう「浄土の夢」を壊してしまつた。現代人は、死の後に何もないことを知つてしまつた。

そのような中で、どうして死後の快樂を約束できようか。それゆゑに、現代人が最も恐れることが「死」ではなからうか。

(1) 人間の二重規定

アルピニズムを肯定するにあたり、その出発点となることは「人間とは何か」、という問いだろう。

人間は自然の中に発生した、有機動物だという。自然によつて生み出され、自然の中で変革してきた、自然の一生物である。しかし、火と道具と言葉を得た人間は、自然の中で生み出された以上の「意志」により、自然史を変える存在にもなつてきた。自然科学の発達はついに核の利用にまで及び、その使い方によつては、地球そのものを破壊できるまでになつてゐる。自然の時間の中で生み出された人間は、自然に支配されながらも自然に手(道具)を加えて人工化を図り、自然が無視することもできない大きな人間環境を作りあげてゐる。それは自然の時間軸の中で、「人間史」となつて刻まれている。

自然という客体の中にもありながら、人間の主体的行為によつて客体までも変容させてしまう人間のあり方は、自然史と人間史の重層の中で、双方の規定によつて日々影響を受ける二重性が存在する。つまり、自然の法則からなる規定と、人間の意志が作り上げた規定(文明・文化)との二重規定の中で、日々の生活をすごしていることにならう。

(2) 人類の目的

人間の備える二重性、そして主体として実践し続けている人間史の中で、人間全てを一括りにした「人類」という概念をもつことができる。人類とは、あたかも一人の人間であるかのような、生物界における性格的特性を付与することができる。そして「人間とは」の問いに答えるには、実存の総合として捉える「人類の概念」から答えることが、より妥当な回答となるでしょう。人類に目的が仮にあるとするならば、その目的に対する個々人の位置づけができるでしょう。さすれば、アルピニストにどれほどの価値が生ずるのか、明白になる。

しかし、果たして、人類に生存の目的があるだろうか。自然の中から神を探し出し、その神の下に形而上学を創り上げることは、決して難しいことはありません。僕にだって、僕の神を創り上げることもできる。だがそれは自分自身の神であり、人類の神ではない。自己の生存する目的を持ってても、それが人類の目的とはなり得ない。

人類は自然に抗して人間史を連ねている。しかし何のために人間は、自然に抗しなければならないのか……？神を祭り上げ、その神の下で形而上学を展開させても、神そのものの存在を肯定できるのか……？神は死んだとして、ニヒリズムに浸りきることもできない。ニヒリズムは克服されなければならない。では、ヘミニズムで終わるには、自然に抗する主体的人間性、実践行為が無為になっってしまう。

果たして人類にとつて、生存の目的は存在するのだろうか。

今の僕には分からない。分からないからこそ現在を生き続け、探し続けなければならない。そのことはちやうど、未知の岩壁に挑むアルピニストの心に反映できるのかも知れない。

ニーチェは言う。『へ人間は何のために存在するのか』とは、回答のない問であった。あらゆる大きな人間的運命の背後には、それよりもさらに大きなわわけもなく〜という、折り返し文句が響いていた』と。『この真理を克服して生きるために、われわれは無を必要としている……この課題を解決するために人間は本性上、すでに虚言者なければならず、何よりもまず芸術家でなければならぬ』と。

我々は芸術をもつてニヒリズムを克服することができる。しかしこのことが、「私」というすでに生を与えられた一人の人間の実存の真理に答えられたとしても、人類としての答えにはならない。なぜならば、「すでに生を与えられた」ということが問題となる。僕らは確かに生きている。しかし僕自身の意思に関わりなく、すでに生を与えられている。僕の意思には無関係に……。

過去は許さう。親を責めるのもやめよう。僕らは芸術家になることによつて、ニヒリズムの真理を克服することもできるのだから。しかし実存としての人間からは、人類を継続させる生殖は否定されなければならない。なぜなら実存、その極限である。ニヒリズムからは、「この世に生まれないこと」こそが、最も叶ったものだから。

『この世に生を享けないのが、なんと言おうといちばん良いこと、生まれたからには出てきたところへ、そこへ速やかに赴くのが、次に大いに良いことだ』(ツフオクレス)

これは古代ギリシヤ的。ニヒリズムであるが、ニヒリズムにとつて自殺は否定するとしても、「生まれでないこと」こそ、ニヒリズム克服以前の命題とならう。次の世代でも知るだろうニヒルに対し、次の世代の人間を産まないこと、そのことがニヒリズム克服の最良な方法ではあるまいか。ならば、生殖を一番に否定しなければならない。

しかし現実として、食欲に次いで強いものが、生殖ではあるまいか。そして現実を肯定するならば、生殖も肯定しなければならず、そこに「人類」という概念が必要になってくる。生殖は種族の保存本能だという。ならば何のために、種族は保存されなければならないのか。やはりここにも、人類の目的が必要となる。

人類は何をめざしているのだろうか……？

どこへ行こうというのだろうか……？

今の僕には分からない……！

(3) 芸術と登山

前節から、人間にとつての目標、理想がなくては、困ったことになった。そして理想郷を創ろうと、すぐに形而上学を思いつくものだ。キリスト教の世界観ともなれば、その代表として世界を席卷している。

理想を永遠におきたい願望は、さらに人類を創造へと駆り立てる。ここに芸術への足がかり、動機づけが生じよう。芸術は個々の持つ夢を実現させる、自我の小宇宙を作り上げてくれる。しかし芸術に価値が認められるのは、その小宇宙の中に他者も入り込むことができる、自己と他者とが悦楽を共有できるからであろう。

『登山とはことごとく、夢と憧れと情熱の所産』という言葉があるという。あの峰、あの頂、あの岩壁、あの水壁に憧れたアルピニストの衝動は、やがて黙々とアタックへ出かける。そして過去となつてしまった先ほどの登攀を想う。この一連の所作こそが、芸術家の求めた小宇宙と同類のものではなかったろうか。芸術家に比べ、アルピニストの評価が低いのは、アルピニストの描く小宇宙に他者が入りにくいことであろう。登山行為を通して理想の完成、しかし完成された小宇宙が、他者の完成に対して関係性が薄い。アルピニスト

の高揚した心を、登らぬ他者の心をも高揚させることが難しいからだ。

芸術の多くの場合、物質へと変換させて他者へと伝播させる。絵画における絵具とキャンバス、彫刻も石や木に限らない多くの素材、音楽でさえ音波という空気振動をもつて表現、伝播させている。白鳥の湖を踊るバレリーナに観衆が魅了されるのも、バレリーナの動態表現とともに奏でられる音楽表現との共演にあらう。チャイコフスキーによつて創られたメロデーにのつて、動態表現の推移が観衆を陶醉に誘う。ただ踊るだけの白鳥の湖であつた場合、観衆の感動を呼び戻せるでしょうか。否！筋肉だけの芸術であるなら、人の死とともに消去されてしまう。ましてや年老いた筋肉によつては、もはや美の表現は難しい。だから筋肉ではなく、石や木や土や石膏といった物質に変換し、芸術の最高な一瞬、一瞬を捉えて永遠なものへと固定化しようとするのである。

登山が芸術として位置づけられないのは、踊るだけの白鳥の湖と同じでないだろうか。登山、最も困難な登山を想ってみよう。順調なリズムとバランスで高嶺の岩をよじ登るとき、垂直やオーバーハング、その高度差がより大きいほどにアルピニストの心は踊ります。しかしこの場面を、アルピニスト一緒になつて見ることはできません。遠くの望遠鏡で見られるとしても（たとえばアイガー北壁）、その観衆はアルピニスト同様な感動に浸ることはできません。観衆には、自然が放つ壮大なバック・ミュージックを聞くことができます。そしてなによりも、自然の重力に抗するアルピニストの快感を、観衆にとっては体感することができないからです。しかしアルピニスト自身にとつては、美しいバランスとリズムの体感が、彼の、彼女の芸術なのです。バレリーナも踊る中で陶醉できたとしても、ただそれだけでは芸術と認められないでしょう。しかし真の芸術家にとつて、他者の評価は二の次なのだ。

動態で表現する芸術に言葉はいらない。筋肉の衰えとともにその存在意味を失つてゆく、はかない一代限りの芸術なのだ。その一つに登山がある。そしてアルピニストが芸術家となり得るその時は、登山における一瞬、一瞬のその中にしかない。行為の中に時を超越した永遠な感覚、それはまさしく人間が感じる『美』の世界である。

(4) 死と登山

死と登山は、切つても切り離せない関係にある。ジャーナリズムによつて広められ、一般常識ともなつたしまつた「登山＝遭難」は、さらに「遭難＝死」が前提されている。そればかりでなく登山者自らの中でも、死との対決はアルピニズムの不可欠な要素であらう。

アイガー北壁の登攀史は、それを良く物語つている。先人の屍を乗り越えても登るアルピニストの心に、「人間と死」の対話がアルピニズムの中にあることを教えてくれる。その時の死は生の終焉であり、死の始まりではない。死をも含んだ、生の燃焼と捉えることができる。アルピニストの死、それはアイガー北壁登攀の生命の歴史でもある。

「われわれが生きているとき死はなく、死ねばわれわれは存在しない」、古代の唯物論者エピクロスはこう言つたといつたというが、生理学的な「死」としての事実であらう。死んで土に埋められ、または火に焼かれて、何がしかの原子に還元される。死は死であつてもはや生ではない。これを「実存の死」と呼んでみる。

一方で、「死して生きる」という言葉があるように、死ぬことはただそれだけのものでもない。あまりにも多くのドラマとなり、あまりにも多くの悲劇芸術を生んできた。例をあげるまでもないが、仏教の浄土、キリスト教の天国、国家主義体制下の靖国神社等々、各々の死の意味付けを与えることによつて来世への継続性を保ち、歴史の中にエゴの死を位置づける「歴史的な死」もある。

実存の死にとつて、彼の未来は何の約束もされていない。しかも「私」という存在すらもない。私という人間の有機生物体は、土や水、空気のような自然の中にふたたび還元されてしまふ。主体から客体へと変容するのである。そう思ったとき、我々は極度の不安が生じてくる。そして「何かにすがりたい」、「○○のために死んだ」と死の目的を見出し、死を意義づけて正当化したく考へる。前者は神や仏を、後者は「にえ」を要求する。さらに歴史的な死からは、人間本能が欲する「快樂」を求めるところまでいける。

実存の死から、快樂は導き出せない。死に快樂を与えるには、その死への意義づけが必要であり、社会という評価舞台を要する。自

己と他者との関係の中で、他者にたいして自己を隠蔽、奉仕させることなのだから。実存の死は主体性の消滅となり、自然の中に還元されて客体化されることにほかならない。しかし歴史的な死を考えてみると、自己の肉体を消滅させることによって、社会の記録の中へと還元してゆく。いわば自己は仮死状態となる。社会が認める意義の大きいほど、また人間としての存在価値の大きいほど、肉体は滅んでも未来社会の中に残像を残す。その残像を想い、密かな安堵感を覚えるのである。

しかし登山の喜びとは、そのような来世と関わりなく、現世の中だけにおける「人間の生の否定の否定(弁証法)」にありはしないだろうか。つまり生と死の弁証法によって、生を実感することではないだろうか。高嶺の岩や雪や氷といった、人間の生を否定するところ、エベレスト山頂に人が住めるか……？否。ドリユの針峰には……？穂高の頂には……？一時的に人は住めるにしても、下界からあらゆる物資を補給しなければ持続できない。

だが人間とは不思議なもので、生命を否定されるその中で、自然の否定性をさらに否定するその行為を通して、生きることの実感を得ることができる。そこにアルピニズムの真髄を見出すことができる。アルピニストが生命を否定する岩と雪と氷と高嶺を乗り越えるとき、その行為のなかで大きな喜びを得る。逆に乗り越えられないときは、大きな悲しみや自己の消滅となる。このいずれにおいても主体はアルピニストであり、客体は自然である。そして主体者たるアルピニストによる、一方的な自然(客体)へのアプローチでもある。それゆえ登山は人間の意思がなすものであり、自然を通じた喜怒哀楽の全てが人間の側に跳ね返ってくる。つまり、自然の生活の中でやらなくてもよいことを、意思によりあえて行う行為が登山なのである。自然と関わる中で自らの生を再確認し得る行為、さらにその素晴らしさを他者へと伝えたい心の芽生え。この感性があればこそ、生きることの素晴らしさを体感し得る。そして他者とともにその喜びを分かち合え、人間文化そのものとなるのです。

アルピニズムにおいて限界を乗り越えようとする行為は、限界が限界である限りその限界を乗り越えることはできない(客観的限

界)。しかし私にとつての限界は、必ずしも他者にとつても限界とは限らない(主観的限界)。この主観的限界を乗り越える行為がアルピニズムの考えであり、それは無限ではなく客観的限界の範囲を越えることはできない。自ら感じる主観的限界の世界を、困難な登攀によつて拡張できる実践の中で、自然における実存の主体的意味を知ることができるとはなからうか。

実存の追求といつても、それだけならば「山」に限ることもなからう。アルピニストが山を通しておこなうのは、登山における美への感性を抜きにはできないだろう。生命を否定する厳しい自然、その自然のなかを通り過ぎる生命の躍動こそが、生きている実感を得ることができるとはなからう。この弁証法的「否定の否定＝肯定」の論理こそが、未知の不安定な実存に充実感と自信を与える、アルピニズムの原型がある。アルピニストの主体性はこのように、ヘンリクスやニヒリズムを乗り越えて人類に生きるこの意味を気づかせる、文化的効果がある。

「死と登山」がテーマであった。しかし「死」とは「生」が終わったその時であり、「いかに生きるか！」が問題なのだ。唯物論的な死、哲学的な死、生物学的な死、さまざまな死の捉え方があり、さらに「いかに長く生きるか」という時間的概念もある。死を考えることに怯えながらも死の現場(山岳へおもむき、恐る恐る体験を重ねてみると、一番恐怖に感じるときは現場でなく、事前に死を考えるその中にあることに気づく。そして幸福も、どれだけのものを持ったかではなく、幸せと感じたその中にこそあることに気づく。そして幸せな時を、他者とともに味わいたいと願うとき、ヒューマニズムが芽生えるのであろう。

(5) ふたたび、人類とは

ふたたび人類は、果たして何をめざしているのだろうか。誰か、教えてほしい。「人類とはコレだ!」、と。

ニヒリストは言うだろう。「実は何の目的もないんだよ!」、と。

マルキストはこう言うかもしれない。「皆に等しく愛を分かち合うことさ」と。

芸術家は、「人間から時間を取り去った永遠の人間、完全な人間になるためだ」と言うかな。

美学者もまた、「悦楽のためさ!」と、さりげなく言うかもしれない。

しかし僕にとつてそれらは各々の存在理由となつても、人類の目的とするには心もとないのだ。そして、「未知だからこそ生きて知りたい!」、これが今の気持ちなのだ。だが以上の考察から、アルピニズムを肯定しきれぬだろうか……。しかし逆に、否定できる真の理由があるだろうか……。「夢から醒れへ、そして情熱に突き動かされてアタックする。それら一連の行為の中、さらに行為を振り返つて余韻に浸る。そして更なる次の困難な段階へと踏み入る情熱が湧く」。あたかも人の一生であるかのような、縮尺された人間の歴史(物語)を見ることができなのです。僕はまた、一人の実践者ではない。その一人一人の実践者が集まり、やがて「何か」が、分かるかもしれない。今はそのことに期待しよう。

僕は当初から「人類の目的」を求めていた。しかし、形而上な目的、形而下な目的、いずれもありえないように思われる。探せば探すほど、その何かは無限の中に拡がってゆく。無限の中から探し出し、それを「神」として有限な世界を持ち込むことに、ニーチェは「神は死んだ」と抗した。まさしく人類にとり、「神」は安易な答えを与えてくれるが、現代のエスプリでなくなった。人類にとつての「進歩」という概念も、果たして人類の目的となるだろうか。

『実は、何も無い』という理解こそが、現代のエスプリではなからうか。しかしヒリズムは克服されなければならない。僕はこのことを、山から学ぶことができた。「なぜ山に登るか」と、「なぜ人間は生き続けるのか」とが、同類と思われるからである。

「なぜ山にのぼるのですか?」の問いに、「It's there」とマリリーは答えたと言われるのは有名な話です。僕らにとつても自分なりの答えを持つと、小さな、そして大きな思索を繰り返しています。そこで得た現在の僕の答えは、「好きだから!」です。理屈ではな

く、何よりも山を登ることが好きだからなのです。そしてこの喜びを他の人にも教えてあげたい、愛する人とも登ってみたい、みんなと一緒に分かち合いたい、と思う。そこにヒューマニズムが芽生えるのではないのでしょうか。

このヒューマニズムこそが人類の存在に目的を与え、愛が育み、受胎が続けられるでしょう。

僕はそれを、山に知った。

四、解決点

前節までにおいて、アルピニズムが単なる遊びではなく、人格を鍛える人間行動の一つであることを、理解していただけたかと思う。自然という客体の中で、主体となつて自らを知り、自らを変革しようとする実存的実践行動であることを。

しかし実存の追求や芸術の追求をする場合でも、ただそれだけをしていれば良いというものではない。それに先立つ条件がある。精神的存在以前に、肉体的生存を維持できる最低限なエネルギー補給が不可欠である。空気と水と食料……。古代ギリシヤで栄えた文化も、「奴隷」という生存エネルギーの生産・補給者がいたからにはかならない。奴隷制は出自の差異により、奴隷は奴隷とされてしまう。一方で市民は市民とされる。生まれ出た当人の意思では全くないのに、血の階層によって定まってしまう。階級社会を否定する社会改革はプロレタリアートによってなされてきたが、血の継承、血の階層という文明の万代は、人類永遠なテーマでもある。それにともない、芸術や文化を享受できる階層も変化してくる。戦後社会の日本において、一般市民、サラリーマン階層が大挙して芸術や文化を享受できる時代を迎えた時代にあります。このように芸術やスポーツなどの文化に先立つて、衣食住を確保する手段が整わなければ、文化！文化！となりえない。衣食住を確保する文明問題は常に先行し、次に文化がやってくるのです。

僕がここで言いたいの、アルピニズムに熱中する前に、最低限度以上の生活を確保する社会性が先行していることなのだ。アルピニズムそれだけの観念論があっても良いが、実存的存在として文明条件が先行して存在することを理解しなければならぬ。

谷川岳遭難防止条例解決の基点は、このことの理解・承認から始まる。つまり、実存の自由は、社会的自由との相乗であり、社会的自由の範囲をはみ出す部分においては規制されても仕方ないことになる。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

相乗する二つの自由、「実存的自由」と「社会的自由」とを統一することはできない、と哲学者はいう。「生まれながらにしての自由」という観念上の自由は、基本的人権とされる。それに先立つ出自は社会構造に組み込まれ、その社会的自由制度の下で規定されてしまう。出自は実存的意思でなく、与えられたものという受動的形態として免れることができない。実存に先立ち、すでに社会構造に組み込まれ、歴史の中に組み込まれている。したがって出自において、主体的に実存的自由と社会的自由とを選択することはできない。人生を経た実存の成熟により、社会的自由を変革することはできるが、出生にともなう社会的自由制度の選択はできない。

人は生まれながらにして自由であるという基本的人権、実存的自由に対し、その全てを認めれば地球社会は成り立たなくなる。それゆえ社会を成り立たせるためには、基本的人権や実存的自由の範囲を社会的制度により制限せざるを得ないのです。

谷川岳での遭難事故が、地元社会へ過度の負担を強いたことにより、本来自由意思であるべき登山行為に制限が加わることは、当然な結果であるといえる。自由意思の尊重は、その行為への自己責任をとらざるに完結性が前提となる。しかし遭難、そして死亡の場合、死者は他者にたいする自己責任を果たすことはできないのです。

アルピニズムの代償は自己の死をもつて当てるとしても、他者への代償は果たせません。それゆえ過度な行為を規制する(予防原則)、遭難対策の充実は不可欠なのです。

一ノ倉



良きザイル・パートナー保坂氏は、青年海外協力隊（建築でラオスへ派遣された。「一ノ倉」は餞別の書として制作する。本書は神奈川県立秦野高校理科実習助手時代に20部制作。謄写版刷り（A5版 96P）。

（一九六七年）

- ◎ 職業免許制度
- ◎ 登山者の山岳遭難保険への加入
- ◎ 有料山岳遭難救助組織（職業）の編成
- ◎ 入山時に登山税を納付
- ◎ 山岳遭難救助法の制定



- ◎ 山岳文化の啓蒙普及
- ◎ 仲間づくり（山岳会、同好会、同人、クラブ）
- ◎ 学校体育に登山を入れる
- ◎ 登山学校・訓練施設の設置（職業）

（一九六七年記）

(保坂公人氏へ餞別の書「二ノ倉」より)

現代の最先端に行くクライマーを挙げよ、といわれたら、RCCIIの同名名簿を括れば、手取り早いでしょう。僕ら岩登りをする者にとって、RCCIIが果たすパイオニア・ワークは、一つの道標となっています。しかし盲目的に従っていた僕の時代は過ぎ、近頃はそのあまりにもスポーツ・アルピニズムとして割り切ろうとする主流に対して、いささか抵抗を感じるので。

『私達は、現在、行為される岩登りの現実を熟慮した結果——近代登山はスポーツ的要素をふくむ——という定説のもつ、あいまいな表現を拒否し、それが人と人との競技ではないにしても、さらに一步、スポーツそれ自体の本質に近づきつつあるのが現状であり、また、これとは全く別の次元で登山という感覚から離れて、岩自体を楽しむ、スポーツそのものの岩登りが、別の人達によって誕生しつつある事実をも知っている。

この二つの傾向の構成分子は、スポーツ以外のもの——古い装いであるところの情緒的要素を捨て去り、冷徹な岩そのものの上に、片方はアルピニズムをスポーツ的見地から解明しようとし、他は「新しき価値」として、その出発をスポーツから拡げたものである。RCCIIは、前者に属する。』 (日本の岩場「より」)

「日本の岩場」序章にて、上田哲農氏はこう書かれた。果たして現代登山には、情緒的要素が不要なのだろうか？冷徹な岩そのものの上にあるアルピニズムとは、果たしてどのようなものであろうか？「スポーツ要素をふくむ」という定説のあいまいな表現を、果たして拒否する必要がある現代の登山にあるのだろうか？

しかし僕は思う。彼らこそ、最も情熱的な人間ではないか……、と。

「情緒」という言葉の持つイメージ、何かジメジメして涙ぐみそうな、そしてほのぼのとした温かさを感じさせるような、日本古来の感情。仏教独特の無常観を携えた「はかなさ」とでもいいたい消極的なロマンティズム。実は彼ら自身、そんな人間性を心の中に秘めているからにほかならないのではないか。それらの感情を否定し、排除することにより、より一層それらの感情に浸ることができ、否定の否定論理（弁証法）ではないのか。アルピニズム登山という、人間の極限的实践、その強烈な行為の中に情緒を捨て去ることは、強いがゆえに無意識の中に感情を閉じ込めることにほかないのではないか。なにも表立ち、情緒的要素を捨て去ることもないのではないか。むしろ極限の登山により、それに向かう心を正面から問うことこそ、乗り越えた先では強くなれる。

「近代登山はスポーツ的要素を含む」——それで良いではないか。そして、「ならば、それ以外にどんな要素が含まれているのか。その間の関係は。それが僕らにとつてどれほど必要なことなのか。どうして山は、僕らを呼び続けているのだろうか……」と、アルピニズムの行為（実践）を通して思索し続けなければならないのだろうか。捨て去ることではなく、論証することこそ、現代登山家のなすべき道程ではなからうか。そして山は、そんな僕らに関係なく、いつも、そこに、存在しているのだ。

僕は山に登り、哲学へと導かれた。美と芸術へと導かれた。宗教を考えさせられ、心理学も教えられた。そして今、生活の主要な一部となっている。

山登りは文明でなく、文化の所産なのだ。そして文化は文明に支えられている。

(一九六七年記)

4・「星の王子さま」に親しんだ頃

(保坂公人氏へ餞別の書「一ノ倉」より)

『昭和二十二年十一月七日』

美とはなんだろう。それは捉えがたいもの。無理に捉えようとすれば、もうその姿は濁ってくるものだ。しかし無理に捉えたとき、それはまたこの上ない悦楽である。恋愛感情のうちに我々はこれを味わう。

美は最初どんなかたちで我々に知覚されるか。その始原の相というものを考えてみる。たとえば自然を眺めてそこに美を感じるのには、大人の感覚であつて、子供は必ずしも自然を眺めない。子供は直接自然に入り込む。つまり何らかの動作によって知覚しつつ美の認識をもつに至るといふことが肝要な点だ。この動作を、愛撫とよんでも良い。大人が自然を眺めるのも、眼による愛撫だが、子供は眼よりも手をもつて、直接肉体的な関係に入らなければ感銘を覚ええない。そして美の認識の相がここにあることはたしかで、大人もまたそうあるべきはずで、愛撫の根本的形態は肉体による愛撫以外にない。陶器の鑑賞とは、これを膝の上において撫で回すことだ。それは対象と自己の間に同質の体温を形成することだ。ここに生殖がある。受胎がある。

自分の幼少年時代をかえりみて、いつ頃いかにして美の意識に目覚めたかを考えてみる。自分は北方の海辺で育つたが、海がはじめて美の意識を興へてくれたやうに思はれる。しかし海を眺めることによつてでなく、泳ぐことによつてであることを思ひ出すのだ。泳ぐことによつて自分は海と肉体関係に入る。

津軽海峡に面した断崖の岩の間で、海藻のぬらぬらした感触を肌を感じながら、白く泡立つ怒濤にもまれた日を想ひ出す。あるひは身体を水平にして波の上に仰向けになりながら、流るるままに身を委ねる。自分の視界にあるもの、それは崖のなび空と海峡の潮流だけだ。それは永遠につながるやうでもあり、恍惚と恐怖の交つた感情であつた。大きなうねりがくると、自分の肉体を快く天

上へ運んで行ってくれる母性的優しさにみちてゐる。かうして泳ぎながら、私ははじめて愛撫という所作を知ったやうに思はれる。それは同時に、性の快感にも結びついてゐた。海辺子は、波にもまれつつ、死の恐怖のうちに性のめざめを促されるらしい。』

この文は「私の宗教観」という本に収められた、亀井勝一郎の日記の一節です。

亀井氏もそうであつたように、最近の僕は「親鸞」という過去の人物に、すごく惹かれている。小学生だつた頃、おそらく五年生の時だつたと思うのだが、社会科の授業の中で、仏教の大乗と小乗に混じつて「自力と他力」がでてきた。幼くて単純だつた僕は、一も二もなく、自力という言葉の積極性に憧れ、他力といえば「あなたまかせ」のような、非弱な印象をもつたものだ。この印象は、つい最近まで続いていた。いや、現在も続いている。しかし十八歳から山に登つて三年、今の僕には「自力のみ」と公言することが、もはやできなくなつている。もちろん、自らの能力を信じて努力することは尊い。だが、自然の一生物でしかない人間の「生命」には、自分ではどうしようもない「何か」が含まれていないだろうか。山というとすぐに「死」がでてくることは全く悲しいのだが、山に登り、親鸞を読み、僕もまた「他力」の道を探してみよう。他力が何であるか、今の僕には感覺的にしか分からない。ただ、分かつたような気がするだけです。

人間が科学の力を駆使して自然を変えてしまうことを、僕は知つている。そしてエンジニアの端くれとして、僕もその一人であることを自負している。しかし山登りで体感した「何か」が、それが何であるか今は述べられないが、科学の力をもつてもどうにもならない「何か」が、あるような気がするのです。

僕の山の経験は浅い。まだピンチに陥つたこともありません。しかし岩を登つてるとき、もしここで墜落したら……、この雪壁が崩れたら……、この氷が割れたら……、と思つたとき、例えその登攀に成功したとしても、僕は山を征服したとは思えないので

す。過去には何人かが、そのとき岩が欠け、腕力が尽き、雪崩に流され、アイゼンで踏んだ氷が割れてしまったかもしれない。僕はただ、運が良くて成功しただけなのかもしれません。

しかし盲目的に運命に委ねることが、他力のなす業ではないことを親鸞は教えてくれる。他力とはその何かを一つ一つ見つめながら、意識しながら、その実相を明らかにすることであり、そのときの僕の心が何よりも素直に、あるがままに、対処することではないだろうか。自分の意思に反した無理を強いてはいけない、ということでしょう。

アイガー北壁初登攀者の一人、H・ハラーの著書『白いクモ』にも、こんなことが記されている。

『ショーペンハウアーがいった、へ運命がトラップを切り、われわれがそれで遊ぶのだ』という言葉にも、無条件に同意するわけにはゆかない。……すでに二千年以上も前に、アレクサンドリアのメーナンドロスが書き残した、へ人間のやりかたが運命である。そして、人間が運命と呼んでいるもの、それはただ人間の性質であるにすぎない、という言葉にまさるものを見つけないことができないのだろう。へ白いクモンの岩壁が、はじめてこの言葉の真理を私にはつきりと教えてくれた』とあるように。

亀井氏の文章の主題から外れてしまったが、僕がなお一層言いたいことは、別にあるのです。

「無味乾燥な岩肌や氷壁を攀じ登って、どこが良いのだろうか？」と、登山に興味を持たない人たちは口にします。自然を、その一つでもある登山を、より一層理解したいのなら、「自然に還れ」とルソーが言ったように、レマン湖の畔に立つてモンブランを傍観し、瞳の愛撫にとどめずに、山に分け入り山と人間の直接的肉体関係を結ぶのに、何の不思議があるだろうか。

子供は高みを見つければ、すぐによじ登る。そして息をはずませ「お山の大将！」と、叫ぶでしょう。子供には引力の法則はどっちでもよいのだ。高みは子供の好奇心眼に、別な世界を広げ、それまでかくれて見えなかったものを、その高みは見せてくれる。木のてっぺ

んが子供に必要なだけの高みを与えてくれるなら、子供は木登りをやめたりしない。手のひらで交互に枝を掴み、足の裏と股を木にこすりつけ、身軽に大地から離れてゆく。手のひらや指先、足の裏や股の感触は、子供らを酔わせる。樹の年輪の波紋が、少年の心の中にまで拡がってくるのかもしれない。

四つん這いになって砂山を登る子供。ズボンの尻を泥だらけにして土手を滑り降りる子供。その子供たちが大きくなり、岩壁や氷壁にも攀じ登ることに、何の不思議があるだろうか。子供の頃、無意識に知ってしまった指先の感触、爪先の感覚、身体で感じる楽しさを、岩や氷は思い出させてくれる。

『かつて子供だったことを忘れずにいる大人はいくらもない』と、サンテグジュペリが言うように、かつて子供だったことを忘れずに、その子供心の上に立った大人こそ、本当の大人といえないでしょうか。

山は、山に対する人間が求めぬかぎり、人間へと何も与えてくれない。山は碧空のかなたに白い峰々をそそり立てるだけ。人間へと語りかけてはくれない。人の弱さ、他愛なさも教えてくれない。黒く光った岩肌も、青く澄んだ氷でさえ、そのまま人間の生活に役立ちほしくない。全て山に對した人間のみが、山の語らいを聞くことができる。風雪の奏でる幻想曲を聞き取るのも、カッテングの規則正しいタンゴのリズムも、ピトンの歌うヨーデルも、みんなそのとき、その場所を登るアルピニストだけが自分なりに理解するにすぎない。

(一九六七年二月三日)

5・社団法人 日本山岳協会への批判

(山岳展望の会 「山岳展望第十七号」一九七三年より)

はじめに

日山協(社団法人 日本山岳協会)批判は過去においても、現況においても様々ななされてきた。言語的問題ばかりでなく、意識的に非加盟の立場をとる山岳団体は多い。勤労者山岳連盟は独自の別組織をなし、山岳会単位においてもそれらの組織にかかわらぬ独立的立場をとっているものも少なくない。これらは主張なき批判として、やはり日山協批判の一存在として派生してきたことは否めなからう。

山岳展望の会同人でもある大内直樹氏も指摘(注1)されたように、すでに社会状況の中にあつて「未加盟者」という言葉が定着してしまつたようだ。大内氏が指摘されたよう、「未加盟」という言葉は「加盟」を必然条件とみなしうる前提の下に使われよう。つまり、「日山協に加盟することは必然的なことである」という状況が、「未加盟」という言葉を使用する以前に承認されていることとなる。問題は言葉の使用上からばかりでなく、安易に「未加盟者」などと使用されている現状、特に日山協運営側やマスコミ側という世論操作をなし得る機能を有する立場に対して、特に世論構成者(社会人)、一登山者としての立場から潜在する問題を指摘する点にある。

批判には各々の立場、視点によつて問題の捉え方、主張の目的等々が相違してこよう。そこで本論においては、問題の捉え方を、「一登山者の立場」から見つめることを明記しておこう。つまり原点からの告発であり、原点から遡つて組織論に言及してみたいと思う。

第一章 批判の構造 (七P～二十三P) 省略

- (1) 組織と個人の関係から
- (2) 批判の実効性
- (3) 批判の視点(立場)
- (4) 批判の方法と限界

第二章 現状批判

日山協の現状批判に入ろう。これは特に批判の中核をなすものであり、以下の批判を生み出す思想的背景は、次節において展開しよう。ここにおける批判は第一章第三節における「批判の視点」から、個別的観念による感覚的反発を主に生じ、その方法は第一章第四節①の「文字による批判」となります。

一、海外登山推薦状発行システムにおける違憲性

現在の日本国憲法において、基本的人権の享有は公共の福祉に反しない限りにおいて尊重されなければならない(憲法第一三条)。山登りが憲法に保障された基本的人権の享有(憲法第一一条)であることは、証明を待たない。そして山登りが公共の福祉に反する事実関係は、「遭難」という事態において発生する。さらに山登りの自由性とその濫用、さらに拘束の問題は、別な機会に展開しよう。(こ)では、次の二点を承認できなければならない。

① 山登りは基本的な人権の享有であり、憲法により、侵すことのできない永久の権利として尊重されなければならない。
② 山登りにおいて、①の権利の濫用と、公共の福祉に反する事実とは、「遭難」という事態において生ずる。
つまり、個人の山登りは尊重されなければならないのだが、海外登山においては登山界内部だけの事情により、自由の尊重がなされていく。

現在、日本からネパール、パキスタン、アフガニスタン、台湾の山へ登る場合、それらの国の登山規則（注3）に基づき、日本を代表する山岳団体、科学団体の推薦状を必要としている。日本の場合、その代表団体を日本山岳協会とすることで、外務省が認めてきた（注4）。そしてネパール、パキスタン、アフガニスタン、台湾登山における登山計画申請手続きは次となる。

- ① 登山を実施するグループの所属する都道府県山岳連盟へ所定の様式にて登山計画を申請する。
- ② 都道府県山岳連盟の推薦を得てから日山協へ提出し、日山協の推薦状を取得する。
- ③ 日山協の推薦状を添え、外務省を通じて所定様式の申請を、登山する国の政府へ申請し、許可を受ける。
という手順をとっている。

批判に価する問題点は、国際法に基づく外交手続きにあるのではない。さらに、日本の外務省と日山協の間の手続きにあるのでもない。あくまでも、内部の問題であり、日山協加盟者とは非加盟者との【差別】が問題なのである。その差別の思想が問題である。

現在、日山協は非加盟者に対し、ネパール等への海外登山における『推薦状』発行の対象としていない。そして推薦状発行が問題となった契機は、「アマ・プロ問題」からである。

先のIOC会長であったブランドー氏はオリンピックをアマチュアの祭典と位置づけ、その中へアマシューティングが侵入しないようアマチュアとプロフェッショナルとを区別し、プロをオリンピックから排除してきたことにある。企業宣伝と密着しているプロ選手を、オリンピ

ックから排除していた。日本体育協会(日体協)も「アマチュア規定」の順守を強く主張し、日体協傘下の競技団体に適用し、規定のない団体には作成・遵守を要請した。日体協加盟団体の一つである日本山岳協会(日山協)もその要請に基づき、昭和四十五年夏、松方三郎日山協会長の判断により、アマチュア規定作成に踏み切った。松方三郎会長から草案起草を指名されたのが、日山協副会長であった小島六郎氏である。

推薦状発行問題がアマチュア規定に照らされて問題になったのが、一九七二年のネパール登山計画であった。一つはRCC IIのエベレスト南壁計画、もう一つがJCCのP29西壁計画であり、さらに埼玉岳連のナンガルバット計画案もある。

これらはいずれも、一九七一年に発足した「社団法人・アルパインガイド協会」会員を、日体協規定の「アマチュア」に該当しないことを理由として、推薦状発行取消という問題を発生させたのである。このことは問題発生の契機であり、批判の対象は日山協が「日山協のアマチュア規定に適合していなければ推薦状を発行しない」、と判断したことにある。さらに問題なのは、日山協非加盟者がアマチュアにも、プロフェッショナルにも該当せず、「非加盟」を理由に「未組織登山者」として切り捨てることにもある。

小島六郎氏は『岳人二九五号』において、アマ・プロ問題での「日本山岳協会の立場」として、『もし登山人の間にアマチュアかどうかといった問題が起きたとすれば、日本山岳協会は、それが自分たちの組織と関係のない登山人の場合は問題ありませんが、組織内の登山人であるときは、日本体育協会加盟の団体としてとりあげないわけにはゆかないのです。』と記されている。

① 日山協非加盟者

② アルパインガイド協会員

- ・ この二者は日山協規定のアマチュアに該当せず、推薦状発行の対象とはならない。
- ・ アルパインガイドは、遠征隊の隊長や登攀隊長等の中枢任務に携わらず、コーチ、トレーナー、役員の存在ならばよい。

とした。

問題は、社団法人・日本山岳協会が、組織への「加盟」非加盟」を理由とし、また、「アマチュア規定に反する」が故に、「国際法に基づく外交案件に、その法施行の権力を行使できるか」、という点にある。

海外登山における推薦状添付は国際間の外交問題であり、その主たる目的は「遭難防止」にあると考えられる。しかるに、登山隊として「力量の問題」で審査されるなら、またしも、非加盟やアマチュア規定を問題として審査にも付さないということは、明らかに憲法で保障される基本的人権を侵すものとならう。

まず第一に憲法十四条では、「法の下の平等」を定めている。すべての国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分または門地により、政治的、経済的または社会的關係において、差別されない」としている。社団法人としての定款は、その法人内部において法に準ずる命令や制裁をとらぬ。しかし法人の定款よりも憲法が優先し、憲法の精神に反する定款は違法となる。つまり法人の規定（日山協・海外登山推薦状発行基準）に法人構成者が満たず、推薦状を発行してもらえないなら、かく、法人とは関わりなき者、また、法律の下で法人と同等の権利を有する個人（自然人）が、法人に加盟しないことによつて外交手続きを進められないことは、「法の下の平等」を侵すことになる。（逆に法人は、法の下で個人と同等に認められる抽象的概念）

外国の登山規則により、日本の外務省が登山隊への推薦状発行機関を法人（日山協）に委託することは合法であるとしても、外務省の委託事業として「法の下の平等」は維持しなければならない。また、アルパインガイドを理由に、遠征隊の隊長や主要任務を果たす地位に立つことを拒否することは、社会的身分の差別に当たる。

このように、外交問題にからみ、社団法人としてのアマチュア規定を適用させる日山協の対処は、憲法違反であろうことを指摘するものである。

日山協が外務省の委託機関であるためには、

第一、差別の思想をなくし、心情が反するとしても、海外登山推薦状発行基準は「法の下の平等」により手続きが確保されなければならぬ。

第二、憲法第三十一条に定める「法定の保障」により、「何人も、法律の定める手続きによらなければ、その生命若しくは自由を奪われ、またはその他の刑罰を科せられない」というように、国民全てに窓口を開放すべきである。

海外登山は基本的人權の行使であり、憲法十三条に定めた「個人の尊重と公共の福祉」において、「個人の自由、および幸福の追求」は、「公共の福祉に反しない限りにおいて」、尊重されなければならない。「公共の福祉に反する事実」とは、先にも記した「遭難を生じた場合」であり、海外登山ではその影響が広く大きくなるからである。日山協への非加盟やプロガイドを理由とする排除は、自由であるべく山登りの否定であり、思想的差別であることを指摘しよう。

日山協が非加盟者を「未組織登山者」と呼び、アルパインガイドを「アマチュア規定違反」という時、その言葉の裏には「登山者は日山協にはいられなければならない」、「登山者はアマチュア規定に拘束されねばならない」という、「日山協の思想」が介入している。この思想と外務省委任の行政権力とが結びついたところに、日山協思想に反する者の排除をおこなう。しかしそれは海外登山に関する団法人の限界を逸脱し、憲法に定められる一人一人の登山者の権利を侵すものとなっている。そこで日山協組織の必然性、外務省委託事業にもなう海外登山計画審査の必然性を軸に、日山協の存在そのものを問い直さなければならない。

登山者は過去において、山登りの個人的自由性なるがゆえ、登山者組織の理論構成、必然性の模索、組織思想などを問わなかった。しかし今、登山者個人の自由性、独立性が阻害されようとしている。登山者にとって、登山者組織はいかにあるかを今すぐ、問うべき時である。

社団法人として日山協の定款は、日山協内部においては法に準ずる働きをもち、定款に基づいて定められた細則も、定款に準じて法人内部での拘束力をもつ。その一つである「日山協アマチュア規定」は法人内部での拘束と制限をとまなうとしても、法体系の最上位に位置する「憲法」に優越するものではない。法の形式的効力の問題として、「上位の法規は下位の法規に優越し、上位の法規に抵触する下位の法規は効力をもたない」とされている。法人における権利と義務は私人が主体的になす「契約」によつて生じる。一般的には法人側において、すでに定款や規則が作られており、私人がその定款や規則を承認するか否かによつて契約の成立、不成立をみる。これを「附合契約」とよんで、すでに決められている定款や規則の内容を変更するような一対一での個々の契約は事実上存在しない。日山協加盟にしても、すでに定められている定款、規則等に対する諾否の自由しかない。その定款、規則等に「否」の立場をとつたことにより、海外登山が不可能となる事實は、日山協定款、規則の拡大解釈であり、法人の拘束力が及ばない自然人として憲法に保障される基本的人権を侵すものとなる。

ネパール、パキスタン、アフガニスタン、台湾における当国の登山規則により、「推薦状」を必要とすることは、条約承認に基づく法の拘束力をもち、各国国民の主権行使に制限を与えるものとなる。そして外務省を窓口として実施されるが、政府内部にその内容を判断できる部署がなければ、「法律の委任」による外部委託もありえる。海外登山においては日山協へ技術的適否の判断を委任することになるが、「推薦状発行基準」に基づく「推薦状発行業務」の委託をすることも、憲法に反することではなからう。問題は、委託業務を受諾した、日山協の業務遂行上の問題である。繰り返すが、法人規定という法体系の最下位規定により、国民の権利・義務・基本的人権の保障、法の下の平等(差別)という最上位の憲法を制限することにある。またそれを黙認する外務省も問題だ。

日山協が外務省に代わつて行政権限行使の委任を受けるならば、ただちに無差別に海外登山計画申請書を受理することである。そして審査基準に適合する計画であれば、推薦状を発行しなければならぬ。本論の指摘とともに日山協は討議し、無差別に受理

する必要がある。審議、運用経費は外務省へ請求すべきである。日体協が文部省傘下にあり、日体協の下に日山協があるから、外務省から経費支給ができないとすれば、日山協は日体協から脱退するか、あるいは外務省委託事業を受けるべきでない。

次に「審査基準」についてである。

現在すでに作成されており、本年（一九七三）一月二十二日～二十三日にわたって開かれた第十回海外登山技術研究会で原則的に承認された、とされる。これは「岳人第三〇六号」に、日山協海外登山委員会・常任委員長の丹部節雄氏が記している。その審議に対する批判は「岩と雪第二四号」において、ヒマラヤ経験者によってなされている。その批判に対し「いい勉強になった」と、日山協副会長の小島六郎氏は「岩と雪第二五号」で弁解している。

日山協「海外登山に対する推薦状発行規則」第三条において「審議」という使われ方をしていた言葉が、「海外登山推薦状発行審査基準」では「審査」という言葉に変質している。審査することへの批判は次章とするが、法手続きとしては「審査」そのものが違法性をもつものではないだろう。問題が残るのは、審査する基準の内容と審査の仕方にある。総ての登山者を一元管理、支配すべく押し付けの論理である。上位下達の押し付けではなく、多くの登山者から支持・承認されるべく説明と、実態に即し修正すべきである。

昭和四十四（一九六九）年三月十四日付をもって実施された「海外登山に対する推薦状発行規則」をもう少し見てみよう。

第三条 協会は、常務理事会において申請書の内容を審議し、推薦を受けようとする隊が、海外登山を行いうる一応の技術的水準にあり、かつ安全に目的を遂し得る能力があると認められた場合に限り、推薦状を発行する。ただし日本体育協会アマチュア規定に抵触する隊に対してはこれを行わない。—— 略 ——

第九条 協会は、海外登山に関する諸規定等（日本、相手国の何れを問わない）に違反した海外登山を行った隊およびその隊員の参加する隊に対しは、当該登山隊の本隊の日本出発の日より向こう三年間、推薦状を発行しない。

個人の尊重や私権の享有は民法によっても保障されている。第一条の「基本原則」内であれば何人にもさまたげられるものではない。また法人は民法第二章により、特に第四十四条では「法人の不法行為能力」の規定もある。

日山協の「海外登山に対する推薦状発行規則」の、先にあげた第三条、第九条の自主改訂を願うものである。そのことは「日山協組織への批判」をなす視点でもあり、登山者どうし、登山界内部の問題を、民事訴訟の裁判としたいくない意志を含むからである。以上の指摘は一登山者をもつて、社団法人・日本山岳協会を相手に、憲法違反、民法違反として告訴できることを指摘しておく。

二、組織批判

① その思想的背景への批判 — 支配感覚への批判 —

未組織登山者 — という言葉がある。第一節でも指摘したように、「登山者は組織されなければならない」という論理を、必然的に含んでいる。この論理は登山者として組織を考えるに当たり、常識的に演繹される。登山社会ばかりでなく、それぞれで社会を語る学問、形而上学、形式論理学等による言語問題がある。現象を抽象化し言語によって伝達するとき、抽象化(エンコード)した時点において現象との同一性を離れてしまう。言語は伝達されることにより、受け手側の許容する範囲内で抽象化が復元(デコード)される。言語化するとは現象を言葉へと翻訳する機能(エンコード)であり、伝達された受け手側の理解は再度翻訳(デコード)されるという、二度の概念変換がおこなわれる。つまり現象の真実とは別に、言葉だけが一人歩きをはじめてしまうのである。言語による意図伝達は発信者と受信者の意識中枢により、二度の意識変換(エンコード/デコード)を経ることにより、真実を正確に反映しなくなる。抽象化により、真実は常に歪むのである。このことを押さえた上で、論考を進めることとなる。

未組織登山者 — という言葉の使い方の裏には、このような組織運営者側の組織論理が組み込まれており、その論理で扱われ

る私人(単位者≡細胞)の概念を反映するのである。一般的な日本社会の組織概念は「支配と被支配」が定着しており、「上位下達」によつて意図伝達がなされる。日山協組織論理というものは言語によつて明示されていないが、組織運営者の思考論理構造はあらゆる判断の中にじみ出ているのである。日本社会は過半数以上の従順な私人からなり、支配と被支配の構造を見破る者は少数だった。支配の論理に抵抗する者は生存を抹殺される力を受ける。「少数意見の尊重」という欧米型民主主義の論理は、多数派による社会支配の中で、少数者を犠牲として安定性を保ってきた。

論理が飛躍しすぎているが、日山協非加盟の立場をとる登山者を排除する論理は、戦後の日本国憲法に明記された「平和を志し、自由で平等な基本的人権の尊重」を顧みず、戦中、戦前の内務省的国民統治意識の延長による、日本人社会感覚を抜け出していない。日山協だけでなく、すべからず日本社会の組織感覚は、同類にある。(後日追記≡原真氏は「日本人の本質」として、登山論とは無関係に近い、と手紙をいただいた)。

登山者組織の意味と機能を真面目に考えるにおいて、組織の意味付が強いほどに、そのような「未組織」という言葉が発想されるのだろう。登山を個人のものと考えた視点からは、組織への意味付は不要であり、組織の果たす役割、つまり機能だけが意味をもつことになる。そして登山者個々にとつての組織的機能とは、次なる点があげられる。

① よりよい登山への契機を見つげられる場であること。(自己愛)

② よりよい登山(の同行者(パートナー)が見つげられる場であること。(愛の一般性)

③ よりよい登山において失敗してしまった時(遭難)、ふたたびよりよい登山へ出かけられるように助け合えること。(相互扶助)

登山の目的や組織に意味付を与えたとき、そこには行為することの喜びとは別な、その言語に変換された抽象概念によつて意味付され、思考的価値を与えようとする。初登頂、初登攀、日本人として初○○、単独○○、女性として初○○……といったように、

様々な価値観を創作する。その評価にもなつて社会性が生まれ、組織体、業界、世論等々が発生するのである。登山を始原の行為とする個体的性質（二次元）は、価値評価という社会性の中へ変換され、二次元化されるのである。そこに組織や業界、世論、アマ（プロ問題といった）、登山行為そのものとは別な次元で諸問題が発生してくる。一人一人登山者の感性——自由で、法の下で平等に、基本的人権が尊重される——を基準とすれば、登山者総合組織は意味付をしないで、登山者間の潤滑油となるべく機能的役割を付与するだけが望ましいと考えるのである。

地球上という有限の場において、登山における個体的喜びは変質する。同様に社会的価値（意味付）や評価も変質する。たとえば「初登頂」の意味は、人類初という純粹に個の内面的心性から、世界の初、国家の初へと、さらに帰属集団という意識の中へ段階的に細分化されてゆく。それぞれの段階における価値観によつて評価も異なる。『山は死んだ』とする本多勝一氏（注5）の主張は、原真氏が付属解釈を与えた（注6）ように、登山の意味付は変質してゆくことを指摘されている。

日本山岳協会が意識する国家レベルにおける山登りの意味付と、国民一人一人が楽しむ山登りの意味付は異なり、塚本珪一氏が指摘された（注7）ように、登山は個人の喜びに属するようになった。日山協という組織の意味付、日山協としての社会（国家的価値付のために個人が山へ登る概念は失われている。日山協は組織としての意味をもつ必要がなくなり、登山者一人ひとりが機能しあえる「場と機会」の提供が役割となつてくる。その機能は先の①②③で示した。支配く被支配という関係と、その中で支配しようとする側から意味付ける登山は終わった。パーソナリティの満足を求める登山へと、変質したのである。パーソナリティのレベルにおいて、いかに機能し合えるかが日山協組織の課題となつている。

日山協批判の現実的軌轍は内部から生じるのではなく、外部（一般社会）の変質によるものである。日山協が現実的適合性を得ようとするならば、その運営思想、運営視点を変えることにつきる。古い体質のまま法規範の委託業務をおこなうならば、やがて現在

の日山協を否定する勢力にとって代わられるであろう。社団法人としての限界は、革命論理からは明確である。社団法人内部の規範を越えて国民の権利にまで行政力を行使するとき、その越権行為は否定される。

三、新たな哲学の要求

日山協の支配感覚への批判を現代的意味から指摘してみた。法人規範により、法人外の登山者たちを切り捨てる外交業務委任、委託の違憲性を指摘してきた。そして日山協が社団法人の枠内だけでなく、総ての登山者社会を総括したいのならば、「新たな哲学」を創り出さなければならぬ。現在の組織理念の延長からでなく、山登りの総合を根本的に考え直さなければならぬ。歴史的意味合いを失った登山（山は死んだ）は、これからは「遊び」の概念を中心に据えなければならぬと考えられる。

山登りは、遊びである。以後の命題として、承認されるであろう。

遊びにおける組織とは、その遊びへの意味を与えるものではなく、いかに遊び合えるかという、機能の場の提供となる。その中で遊びの組織機能が求められることは、「遭難」という事態への対応となる。

遊び　↳　遭難

この事象を根底に据えた新たな哲学の確認、そして日山協定款第四条に示される、次なる事業の見直しを図ることにある。

- ① 登山技術の指導
- ② 登山道徳の啓蒙普及
- ③ 山岳遭難の予防と遭難対策に関する企画および指導
- ④ 山岳自然保護運動の推進

- ⑤ 国民体育大会山岳部門の運営
 - ⑥ 海外登山に関する計画の審議と指導
 - ⑦ 機関紙その他出版物の刊行
 - ⑧ その他目的を達成するために必要な事項
- 洗い直す根底として、次なる事項を提言する。

- ① 主体的、任意な遊びへの参加ができること。
 - ② 遊びは教育するものではなく、主体的に創り出される。
 - ③ 遊びの感覚は個々によって相違する。
 - ④ 遊びの限界は「遭難」によって生じ、それにより、遊ぶ者に負わされる社会的責任が生じる。
- この四項目から日山協事業を見直してみよう。

(1) 登山技術の指導や道徳の啓蒙普及は教育するのではなく、登山者の自覚と創造性において自由であるべきである。

自覚の段階的發展性の中に、登山学校や登山学等による啓蒙があり、教育ではない自発学習となる。学ぶことを可能とする体系の中に、登山学校や登山学による知識の取得があるが、登山そのものの喜びではなく、登山をより良くおこなうための二次的支援となる。知識は現象(山)を理解し、存在へ働きかける現象(登山行為)に方法を与える。登山行為の方法は同類性に分けて、パターン認識することができる。人間感覚の「自由性」は、他者と「ちよつとだけ異なる」ところにある。大きな差異は不安となり、全く同じは自己認識に欠ける。「ちよつとだけ異なる」領域でこそ、不安のない自由性を感じるのである。同類性のパターン認識において、「登山」と規

「定すべく最大公約数としての」登山概念が規定できよう。行為の技術、技術の知識を提示することができるとしても、それをもって遊びを同一化、同質化してしまうのではなく、あくまでも遊びは遊ぶ人の主体性を根底に据えなければならない。

指導員検定により、山登りを正規分布の枠組みの中に押し込むことではない。検定による登山者のランキングは、登山の本質とは無関係なことである。アルゴリズムのある世界（現在おかれている状態が、その集合に属するか否かを、手続きを経て必ず決定できる世界）として登山者社会を規定することは可能かもしれない。しかしその社会は登山の本質にとつて、無意味なことだ。登山者をアルゴリズムのある社会の中で捉えるには、「遭難による個の限界とその責任」の関係性においてである。

(2) 山岳遭難の予防と遭難対策を、登山者個人の本質的責任において問わなければならない。

この視点のみがアルゴリズムのある概念として、登山者—登山社会—一般社会を結ぶ接点となるのである。

「山岳遭難は自己の山行にも生じ得る可能性をもっている」ということを認める者どうしによって組織構成をおこなうのである。アルピニズムと散歩を同一視するところに、アルピニズムの低迷がある。形而上的にも「山岳遭難を肯定する者」により、組織を構成するのである。組織におけるギブ・アンド・テイクは、「自分も山岳遭難するかもしれない——その時救助してもらえる（テイク）ことは生命の本質的喜びである。だから他者が山岳遭難した時には、何らかの力で助けなければならぬ（ギブ）」、というギブ・アンド・テイクの概念である。契約的關係の中にある法的な権利や義務概念ではなく、現実的關係性において個の限界から生ずる倫理的概念である。技術や知識の習得、向上は、倫理、道徳感をうながすものではない。契約的關係における権利と義務は「金銭」を媒介させて解決できる。山岳遭難への対応は金銭消費を媒介しつつも、金銭で総ての解決を図ることができない人間の問題がある。登山行為へ駆り立てる背面の思想、かの生き様を理解するならば「規制と指導的排除」による山岳遭難防止策は、人間の本質への放棄と連な

ることを指摘する。

集合論のパラドックとして有名な、『クレタ人が「クレタ人は嘘つきである」と言った』という命題は、部分（一人）が全体（クレタ人）を語る視点において、論理的矛盾をなしている。同様に、社団法人としての日山協運営の論理をもって登山の全てを代弁することには、部分が全体を語る論理的矛盾にある。日山協が切り捨てる他の登山者を含み得なければ、登山界を代表した論理ではあり得ない。日山協会長が登山界を語る時、大多数を代弁する言葉であつたとしても、構成員切り捨て、排除を含む限り、総体ではあり得ない。人の視点には、組織（法人）の立場と個の立場とする、二つの矛盾する立場が同時に存在するのであり、組織の代表者が総ての個の代表者では決してない。組織という枠、境界内の代表者でしかありえない。そして世界には無数の境界、つまり境界線はなきに等しいほど無限となる。

組織内という部分から全体を視野に入れた発想は、遭難を未然に防ごうと、とかく原因を取り除くことに方向付けられる。組織内で遭難を認め、その上に立った互助的組織化の発想はおこらない。大多数の日本人体質が、そうさせるのだろう。登山の本質を掘り下げ、個からの発想は起こりにくい。しかし繰り返し指摘しているように、時代の変遷はすでに組織的登山の意味は失い、多様化した個の登山の時代にある。個を原点とした組織論は、日本社会において説得性が乏しいのも現実である。ましてや「死」を前提とした組織論は、より一層説得力を失う。現代の日本社会では、個が実存の哲学的な死に向かいあう文化、風潮が大きく欠落している。高度経済成長社会の中で、実存的な死に向き合うなど、何の社会的、経済的利得を生まないからだ。むしろ成長ムードにとつては、マイナスイメージに映る。その結果、自律的精神の未鍛錬はやがて文化の力を衰退させ、多数迎合的社会到来への主因となることを知りえていないのだから。

「遭難救助は登山者組織の総てである」

(3) 自然と登山者

登山の本質を「遊び」とするならば、それは「生産行為」ではなく、「消費行為」となる。消費行為は主体の欲望を満たすものとして、主観的、精神的欲望を充足させる形として立ち現れる。遊びと人間との関係を考察したR・カイヨワの『遊びと人間』は示唆に富むが、ここではその分析を問うものではない。遊び場としての自然(山)の中で、遊ぶ人(登山者)がどのように在るかを考えてみる。

登山者の大まかな分類は、これまで精神分析的視点からなされている(注10)。

しかしここでは別な、存在論的視点から考えてみた。

- ① 認識的登山者
- ② スポーツ的登山者
- ③ 思索的登山者
- ④ 審美的登山者

存在論を視点とする分類が必要なのは、登山行為にとって「山」はすでに存在そのものであり、その存在への働きかけが登山行為をなすからである。働きかける側の人間(登山者)が、いかに存在(山)を見、その存在(働きかける登山)主体であるかが、自然と登山者との関係を明かす視点となるからである。存在(働きかける側の人間の捉え方として、精神分析的には「欲望」、宗教的には「魂」、文学的には「心」、哲学的には「主体」、科学的には「脳波」等が対応しよう。これらの因子から、人間(登山者)は自然(山)へいかに作用することを見出しているのだろうか。人間は自然を保護するものか……、破壊するものか……、自然が破壊されるのであれば登山者は自然を守らなければならないのか……、観光開発、資源開発と登山者との人間社会関係は……。

遊びが本質であるはずの山登りにとって、存在論的視点から捉えた登山者の分類は、登山者と山、登山者と登山者の間における

閉鎖社会性を本質としよう。観光開発や資源開発における自然の破壊(利用)は、登山者の閉鎖社会とは対立関係となる。つまり、遊びの場を奪われるからである。公共の福祉という観光開発の大義名分から、登山者だけを別枠として保護することはできない。大衆の審美性(観光)も共存するからである。

他方、大衆の審美性を経済操作しようとする企業の実態が、観光開発による自然破壊として示されている今、登山者は自然保護に対して無関心であつてはならない。この点、日山協組織としての思想を目にしたことはない。問題は、登山者と大衆観光との調和であり、人と人が織り成す社会の問題となる。

この調和への解決点は、今西錦司博士が「かげろう」の研究において見出された「棲み分けの理論」が適していないだろうか。まずは登山と大衆観光を区別する。さらに登山者内部において、死を自覚する登山とハイキングとを区別する。それらお互いが、自然の中でどのように棲み分けられるかを考えるのである。さらに山地生活者に加え、観光開発はどこまで許容できるか、登山者は山地生活者のどこまで踏み込めるか、ハイカーが登山をする場合にはいかなる責任と義務を負うか、等々、話し合う必要がある。

例えば、登山する者は総合組織「日山協」へ加入しなければならない。総合組織は遭難救助を主目的とし、登山者は救助の権利を受けられるとともに、救助機能を維持できるだけの経済的負担を負う。加入制度としないならば、「登山税」を設けてもよい。登山者数が多くなれば、職業人の存在が可能となる。アルパインガイドの現代的意味は、登山学校と遭難救助、さらに登山ガイド業に求められよう。

ハイカーも登山者も、「登山」をするときは同一責務を負わなければならない。そして観光開発は、登山の領域を侵すまでおこなわないことで提携できないだろうか。登山者総合組織をめざすならば、登山界への説得ではなく、一般大衆社会を説得して遊びの場を守ることに、そのことが登山の文化を持続させることになろう。また、登山者総合組織の機能である。

文化史において、「遊び」が極めて重要な要素であることを指摘したが、シラーの『人間の美的教育に関する書簡』であるという。その中で、『人間はその完全な意味において人間である限りにおいてのみ遊び、また、遊ぶ限りにおいてのみ完全な人間である』という。さらにスペンサー・ヴントを経、カール・グロースは『動物の遊び』の中で、遊びの無償性、自由性という観念を継いだ。そしてジャン・ピアジェからヨハン・ホイジンガへと至るのである。

一九三八年出されたホイジンガの主著『ホモ・ルーデンス』は、遊びを文化の根底にすえようとしたのである。ホイジンガは文明の全体をルールの発明と尊重、フェアな競争から解こうとした。ジャン・シャトーも、ルールのある闘争の倫理的創造性と、幻想の遊びの文化的創造性を指摘している。

数学史においては、ギリシャの古くから数の遊びや謎解き遊びなどをしてきている。十九世紀末にはジャンゼフスキーによってトポロジー（位相構造）の概念が出され、それを確率計算と結びつけることにより、戦略ゲームの理論が考え出された。これらを集大成したのがフォン・ノイマンである。ラプラスは現象から法則を見出し、それを微分方程式示すことにより多くの説明を加えることができた。それが行き詰ったとき、形骸だけでも何とか説明できないかと確率論を導入し、アルゴリズム（問題の解き方）のある世界とした統計学へと進化した。その代表的操作装置がコンピュータである。

しかし今、トポロジーの概念からアルゴリズムの無い世界までも説明しようとする登場してきたのが、フランスのトポロジスト、R・トムによる「カタストロフィの理論」である。これにより物理学のみでなく、社会科学や生物科学の現象にも適用できる力学系を大成しようとしている現在である。「カスプ型のカタストロフィ」により、アルビニズムの本質でもある生（登攀）と死（遭難）の説明も可能な現代にある。

回り道が長くなった。このように社会では、「遊びの研究」が真摯におこなわれている。だから登山者も遊びの研究をしなければな

らないというものではない。なぜなら、「遊びを理解すること」と、「遊ぶこと」とは、異なるからである。遊びを理解し、そのことを社会的に説明することは登山でなく、むしろ学問分野に属するからである。そして今、ここで強く主張すべきことは、一部登山者でそれらの知見と能力を持つ者が、社会の中に登山を位置づけ、文化としての価値を証明することにある。大衆ジャーナリズムに操作された登山ブームではなく、登山を通して創り上げる登山文化を社会の中に定着させることにある。

日山協も含めた登山界の学際的研究欠除の体質こそが、登山と自然破壊に何ら抗するもできない無能な集団を招くのである。自然と登山がいかに関わるか、登山者相互はいかにあるか、それが今、「登山学」のテーマでもある。

四、アマチュアリズムとアマチュア規定批判（アマチュアリズムの意味）

登山者にとって、アマチュアリズムは必要な思想であろうか。結論からいえば、登山者にとってアマチュアやプロフェッショナルの区別は、何ら登山の本質に関わるものではない、と思われる。しかるに、アマチュア規定のみによって登山行為の規制や制裁をなすことは、登山の本質と関係なきところの問題である。

アマチュアリズムの概要は、「岳人第二九五号」においてスポーツ評論家・川本信正氏によって提示された。アマチュア規定の発生と、その過程から現在におけるまで、その根底にあるのは「縄張りの概念」であり、「疎外の概念」である。「縄張りの概念」とは、同じくして遊び合える仲間の資質を決めることであり、発生地イギリスにおける上流階級アマチュアが、その遊びに近似する専門労働者（プロフェッショナル）を仲間外れとしたような、「疎外の概念」から出発している。「競争原理」からなるスポーツ競技の本質にとって、その競技と近似する専門労働者を入れることは、「努力による段階的向上過程の比較」つまり競技「にあつて、近似する専門労働者は初期条件が圧倒的な優位にあるからである。初期条件におけるアマチュア（上流階級）のハンディキャップと、専門労働者（プロ）が上流階級者

を上回ることへの不満が募り、専門労働者（プロ）を排除する。

スポーツは生体維持のために必然な「労働」と対峙する、消費行為としての「文化」に含まれる。労働で鍛えた肉体と、遊びで鍛えた肉体とは、自ずからその強弱が決まる。スポーツ競技における価値は、その競技だけのためにいかに努力したか、その結果の比較にある。生活のため、生存のための努力ではないとしたのが、アマチュアリズム発祥の思想である。生存のためという必然性（文明）ではなく、遊び（無駄）による消費行為からなる文化の概念こそが、競技する肉体を支える競技者の資質、スポーツの価値を支える。

スポーツは人と人との競技であることが、スポーツの形式をなしている。そして文化の枠内において、専門労働者を除外することに より、市民の努力結果の比較（競争）を可能としてきたのである。文化にとつてのスポーツ競技は、空間（距離・速度・時間）と質量からなる物理的測定可能技術を、常に媒介させている。定性的な同一要素（ルール）を種目とし、異なる性質（こと）に分離独立させた種目別を構成する。同一種目内で努力の結果を競い、定量的に計測して順位付けする。それゆえに計測可能な技術に支えられ、比較・序列化の客観性を獲得するのである。

① スポーツは、人と人との身体運動をともなった競技である。

② スポーツは、計測技術によって比較を可能とし、その結果を序列化する。

③ スポーツは遊びとして、その価値は努力の過程と結果において生ずる。

スポーツの共通要素を右のように分けてみた。そしてアマチュアリズムが介入するのは、③の要素にある。アマチュアとプロの差異は、「努力」の概念が異なるのである。アマチュアの努力は、生活に直結しない遊びの範疇における努力であり、プロの努力は生活に直結した職業の範疇に含まれる努力となる。遊び≡文化とするならば、職業≡文明と表現できる。両者を同一と認めて前項①②を競っても、プロが優位な初期条件となってしまう。それゆえ、遊びにあつてのスポーツは、職業的努力の優位を排除しなければならなかった。

しかし山登りは遊びであっても、スポーツそのものなのか……？アマチュアとプロフェッショナルとを分ける必要があるのか……？次に考えてみよう。

第一に、「登山はスポーツである」という説と、「登山にはスポーツ性が含まれる」という説とである。

現在は前者の考えが支配的であり、日山協が日体協に加盟することはこの理念に支配されている。日山協と組織を分かち勤労者山岳連盟においても、登山の理念をスポーツとして位置づけている。しかしいずれもスポーツの定義から起草した理念ではなく、社会通念から提起したものに過ぎないと思われる。登山を真摯におこなっているもの大多数は、登山をスポーツのみで割り切れない「心」の要素を感じている。そのことは「生と死」の問題である。しかし登山者はその問題を自らの心の中にしまい込み、他者へと伝える文化を育まなかった。小集団として山岳会内部や、身の回りの人間関係という狭い範囲での伝達であり、文化のレベルへと発達しなかった。登山には、生と死の弁証法的理解と伝達が可能であるのだが、マス・コミュニケーションの段階で留まり、文化レベルの理解へと至っていない。「登山の本質は何か……」、「人間にとって登山とは……」、という視点から登山の文化的発展が開花されるのだろうか、前節で述べたように、登山そのものではない学問領域となるため、それを心がける登山者が不在なのである。人間のための学問にとり、登山は格好の一分野(登山学)であるのだが、研究者不在である。「登山学」は一つの独立総合的視野から人間を捉え直すことが可能であり、「遊び」を社会的、人間的に位置づける方法論となり得よう。学問的視野から登山を捉え直したとき、「登山はスポーツの域を脱している」ことが理解される。つまり、「登山にはスポーツ性が含まれる」という考えに、論理的根拠を与えるのである。実証科学とは異なり、人間社会学として総合的な人間の把握と理解となる。実証科学に欠落している人間総合の学問は、今が流行と呼ばれるか、前衛と呼ばれるのか、歴史的判断を待つことになる。

「登山はスポーツである」とするなら、不適合な要素がある。つまり「登山の計量計測」の問題である。登山における計量計測は、

被対象となる自然条件があまりにも不確定にあり、行為の中でも変化する。山が高くなるにつれ、その変化は大きくなる。そして何よりも、競う者が同一時刻に同一条件の中に存在できないことにある。実験に例えるなら、実験・ラメーター（要素）が異なる実験結果をどのように比較しようとしても、比較の根拠を失ってしまうのである。アマチュアとプロフェッショナルとを区別するがごとき、登山における自然条件の差異は、比較・序列化の基準をなさない。しかし以上のことは登山一般論においてであり、山岳自然を切り取った限定の場面においては、競技化が可能な分野もある。その領域において、スポーツ競技は成立しよう。縦走やクライミングの中で、可能な分野は考えられる。その要素として第一に同一・負荷における所要時間の比較（同一距離における速度差）であり、第二に負荷質量（荷の重さ）の差による所要時間の比較である。十^{キロ}級、二十^{キロ}級、等々に分け、縦走やクライミングの速度競技は可能となろう。例えば穂高の屏風岩に安全な支点を埋め込み、登攀開始から終了までの所要時間を計測、序列化すれば順位が決まる。観られるスポーツとするならば、横尾尾根末端にスタンドを作り、双眼鏡を手に観戦する。さらに山岳自然の中だけでなく、人工造物（入工岩場）を低地や屋内に作れば、もつと公平な登攀条件が確保でき、より平等な競技登攀となる。しかしそこまでいってしまうと、もはや登山とは呼べない「スポーツ・クライミング」として、別物となる。自然造物物（山岳）に登るのが登山であり、人工造物物に登ることはもはや登山と別な、スポーツ・クライミングの分野となる。登山は極めてスポーツ競技に類似しているが、スポーツ競技そのものではないという結論に達するのである。

第二、スポーツ競技そのものとならない登山において、アマチュアとプロフェッショナルを区別し、アマチュアリズムの思想からプロフェッショナルを排除する論理は、低次元な観念的差別思想と理解される。プロフェッショナルな登山家がまだ社会的地位を確保できない段階において発生する事態でもある。登山の意味や価値の問題からでなく、登山者の属する社会構造と権力構造圧力により、プロと未組織登山者が排除されるのである。逆にプロが権力と結びつけば、逆の事態も想起される。このことは、時の流れと政治権力がとが

どのような結び付きとなるのか結節点の違いであり、一登山者の本質に関わるものではない。従ってアマチュアとプロフェッショナルとの対立は権力抗争に過ぎない。自然に対峙する登山者ならば、皆等しくプロフェッショナルな「生死の自覚」をもった登山者であることが好ましいのは、いうまでもなからう。

第三として、登山の評価価値と享受価値とを考えることにおいて、アマ・プロの区別を問題とするのは評価価値を考える面においてであり、享受価値を考える上からはアマ・プロという登山者の区別は何ら意味をもたない。

登山の評価価値とは、登山者社会において意味あるものであり、登山の歴史の中に位置づけられ、登山者全体へと影響を与えるものとなる。登山者の享受価値とは、その登山者個人の喜びであり、それを評価し、感知できるのは当人のみとなる。享受価値の尊重は、遊びにとつて本質をなす。芸術や学問の探求心と同様、「一すること」そのもののプロセスを楽しむ、生きてゆく心の支えとなる本質的心情のあり方である。科学万能、実証主義中心の世にあり、自然破壊や公害が問われている昨今の中で、享受価値の見直しが求められている。つまり、心への問題である。享受価値は生きる上での基本的心情であり、この自己愛だけでは社会の存続を果たし得ないことも、同時に考慮しなければならない。人類の社会は一人だけでは存続しないからである。また享受価値においてはアマチュアやプロフェッショナルの区別はなく、人間の心の問題として皆に等しく存在する。しかしその心に占める意味や深さにおいては、アマチュアとプロでは格段の差異があろうが、そのことが表象化されることはなく、他者からは見えない。人生を生きる上において、一人ひとり皆、プロフェッショナルである。

登山の評価価値ではとかく、その登山のスケールが目安とされた。享受価値にとつては、登山の質が問われた。日本の登山界にあつて、ヒマラヤ遠征等のスケールに重きをおいてきたのは日本山岳会が主流となり、質の向上という面ではアルピニズムをかかげた社会人山岳団体が主流となつていた。量スケールと質アルピニズムという、同一に比較できない要素によつて競合してきた日本の登山界

の中で、質を求めるミクロ的性格は、量を求めるマクロ的性格の前で抑圧され、ミクロ(個別性)をミクロ(局面)として位置づけることができなかつた。ミクロ的性格の強い社会人山岳団体(全日本山岳連盟)と、マクロ的性格が強い日本山岳会とが合流してできた日本山岳協会にあつて、ミクロ的性格の指導者がマクロ的権威を与えられたとき、マクロ(の劣等意識からミクロの個別的価値意識を疎外させる力となつて作用したのがアマ・プロ問題の発端ではなかつたらうか。量と質という異なつた要素を混同させ、質の差異を量的形式によつて同一視してしまう。プロを排除した近代オリンピックのアマチュア精神とは、そのような専門的高品質な力と精神を排除したアマチュア(素人)の遊びから発したものであり、その背景には貴族の遊び文化のアマチュアリズムと、奴隷労働者の専門化された技と力のプロフェッショナル意識を含めた階層的差別の思想が初めにあつた。日本山岳協会というオリンピック傘下の一組織にあつてもなお、その差別思想を引きずつてしまふのであろう。

アマ・プロの区別によりプロを排除する考えは、近代オリンピック思想に準拠する体育の延長であり、登山の本質とその価値の位置づけとは無関係な行政権力の行使をともなつたところに、憲法で保障する基本的人権を侵すまでに拡大解釈を許す、理論性の欠除がもたらせたものであろう。

第四に、これまでの登山者概念、つまり山登りにとつて「アマチュア」とは、いかなる意味を持つのであろうか。アマチュアとプロの区別は人間側の分類であり、自然の側(山)から見ればアマ・プロもない、皆等しく「人間」としてしか存在しない。自然論として登山者はアマ・プロなど存在せず、皆等しく「登山者」である。「人間が山を登る」、それが「登山」であり、その登る人が「登山者」なのである。

アマ・プロの区別は人間社会の問題であり、その文化的意味しか持たない。山に登る過程に「死」の可能性を有するような登山であるならば、その登山者は皆等しくプロフェッショナルでなければならない。アマチュアとしての「甘さ」は、自然と対峙する登山には通用しない。「生と死」に媒介される登山にあつては、人生をプロフェッショナルに生きる覚悟こそが不可欠となるのである。窮地に陥つた時

アマチュアだと言って、その状況を放棄することはできない。スポーツ競技の中での途中リタイアは、敗者となつて評価されるだけで、切迫な危機から安全地帯への避難が確保されている。遊びでの放棄は、せいぜい仲間はずれになる程度である。しかし登山の多くは、途中放棄は「死」につながり、仲間の脱落者を放置して登山を続行することはできない。自らの危機を承知しながらも、仲間を助けて共に危機からの脱出を図ろうとする。登山は遊びでありながら、途中放棄で仲間はずれにはできない自己犠牲の倫理性さえある。登山における自己犠牲の究極は「死」であり、スポーツ競技のトリックプレイや機打(バンド・機飛球)のような自己犠牲とは異なる。

「より安全な登山」をおこなうには、「より完全な登山者」でなければならず、スポーツ競技が定めるアマチュア規定は何ら意味がない。むしろ完全な登山者とは、よりプロフェッショナルな人間でなければならぬ。地球の最高峰、エベレストの初登頂者ヒラリー卿は、『技術はプロ、精神はアマチュア』、といったというが、それは登山者として動機や感性の問題であり、自然に対峙する人間の特性としてはよりプロフェッショナルな覚悟(精神)と技術を備えることが、成功と安全の確率を高めることになる。「プロフェッショナルな精神」とは、総ての存在や思考を山登りのために向け、終局的価値を登山に求めることにより可能となり、より完全を目指す登山者ならば、そうあるべきなのである。自然論から主張するならば、死を媒介とする登山者がより完全であるためには、無限な技術の開発とともに、プロフェッショナルな精神の持ち主であるべきである。

終局的価値を登山に求めた時、それが死をもいとわぬ集中に陥ると、人はそれを「発狂」と呼ぶ。上田哲農氏の『登山者発狂説』というのがある。なにも登山者ばかりではなく、芸術家、文芸家、哲学者、宗教家等々、精神へ帰納する心の問題を扱う分野にあつては、同様な現象を招きやすい。発狂は死を肯定するのではなく、死をも無視できる精神の高揚状態といえよう。まさに登山の最前衛は芸術と同じく、精神の集中的高揚は死をも無視する。合理性では捉えきれないアルゴリズムの無い世界である。そして精神の自由とは、発狂の自由でもあるはずだ。それが「愛」で包み込める範囲ならば、発狂者を含む集団は最も高い「質」を有する。

登狂は死をも無視する。そしてプロフェッショナルな登山とは、死を肯定することではない。そしてまた、死を否定することでもない。死を否定できないから肯定するのではなく、登山行為に集中する中で人間の必然的な死の運命に逆らうことによつて生の実感を得る、究極な「遊び文化」の一つなのである。自然の摂理の中で、存在者として死の宿命と対峙し、死をも無視しえる人間の精神の、生の喜びを知り得ている登山者のことである。プロフェッショナルな登山には、生と死の究極な弁証法が含まれており、その思考と実践はより集中した精神と、より高度な技術とを要するのである。アマチュアの行政権力行使の下で、このようなプロフェッショナルな登山を切り捨てるのが登山の本質と無関係な構造であることが、理解できよう。一方で、プロフェッショナルな登山を目指す登山家は、単なる登山行為だけでなく、そのことを社会の中に周知させる登山学の確立にも尽力すべきであろう。

五、国体登山と、日本体育協会参加への批判

国体(国民体育大会)への参加は、社団法人としての日山協だけの範囲なら批判する対象ではない。さらに、国体へ参加するために、日山協内部でアマチュア規定を準用することも、外部から批判する対象ではない。

元来アマチュア規定はIOC(国際オリンピック委員会)内部の問題であり、オリンピック参加資格という、登山と無関係な事項である。事業種別を民間事業と公共事業とに分けて考えると、オリンピックは公共事業を上回る一大民間事業となる。世界規模での公共事業はなく、世界大戦は事業と呼べない。なぜなら事業には政治権力が付随し、国連主体事業は限定的な部分でしかおこない得ないからである。他方、政治権力と切り離されたスポーツにおいては、オリンピックやワールドカップ等による、世界規模でのイベントが永らく実施されている。

では日本における国民体育大会(国体)は文部省主幹により各地方自治体が主催する、公共事業の性格をもっている。第二次大戦

で疲弊した「国民の体育向上と健康増進」を掲げている。しかる意味から、「登山の国体参加」が、山登りの本質から逸脱するものではない。国体の目的からすれば、全種目を得点競技化する必要はなく、順位、序列化のない体育を基本としていよう。しかしそれでは盛り上がりず持続させる意欲に欠けるため、すべからず競技種目に得点を付与し、採点種目として順位、序列化を競うスポーツ競技としてしまった。そのことはまた、オリンピック競技種目とも合致し、国体はオリンピックと類似した性質を帯びるようになった。そこから派生してくるのが、アマチュアリズムによるプロフェッショナルの排除思想である。民間事業とするオリンピック参加資格のアマチュア規定が、公共事業たる国民体育大会参加資格に準用され、その構成員の一つ、日本山岳協会の海外登山審査規定へと再準用され、その結果、法の下に平等でなければならぬ国民の基本的な人権を排除（プロおよび未組織者の差別化）してしまう。このことが日本国憲法違反となることは自明であろう。

（こ）では国体の批判が目的でない。オリンピック参加資格アマチュア規定↓文部省↓日本体育協会・国民体育大会参加アマチュア規定↓日本山岳協会アマチュア規定↓海外登山審査におけるアマチュア規定の適用、とする一連の流れの中で、海外登山審査の段階で法の施行に準拠した行政権力行使たるアマチュア規定適用が、憲法違反ではないかという指摘なのである。その原因が先の一連の流れに見る、民間事業と公共事業の混同による、適用範囲を逸脱する規定の適用にある。さらに日本的「お上意識」の現れでもある。ましてや「未組織登山者」は登山者でないような意識こそが、アマ・プロ問題以前に、基本的な人権を無視していると言わざるを得ないのである。

『山と溪谷・第四一―二号（一九七三年一月号）』において、日山協国体担当主務である羽賀正太郎氏は、『岐路に立つ国体登山の運営』と題して、一九七三年の国体登山を展望されている。その内容を以下に要約してみた。

（Ⅰ）羽賀氏自らの、登山の本質の認識

- ① 現時点では競技的な要素は登山思想や登山行為からは見つけ出せない。
- ② ゲームとは思わない

- ③ スポーツ性が含まれていることを否定はできない。

- ④ ゲームとして順位決めは不可能 — しかし、いかにしたら採点種目となり得るか。

(Ⅱ) 国体登山の意味

- ① スポーツの普及とアマチュアリズムとスポーツ精神の高揚と国民の健康増進と体力の向上。

- ② 一般の登山観念とは全く異なる競技会 — 一般登山と区別。

(Ⅲ) 羽賀氏の将来への展望

- ① 対象が自然であつても、人と人とが技を競つて争い、勝敗を決めるゲームとなるかもしれない。

- ② 日山協く国体批判 — 本質論からでなく、国体登山を理解し、その上に立つての考え方を日山協は望んでいる。

- ③ いかにしたら国体登山を採点種目として日体協に承認させるかを解決したい。

- ④ 前記③が不可能なら、どのように国体運営をするかを考えねばならない。

- ⑤ 国体登山が、登山界最大の行事としたい。

(Ⅳ) 日山協の自認(羽賀氏の言を借りて)

- ① 登山団体を統括している最高機関。

(Ⅴ) 日体協加盟意識(羽賀氏を含めた日山協運営者の意識)

- ① 日体協よりスポーツ団体として認められている。

② 日体協加盟のスポーツ団体としての立場から、山岳競技を主管、運営する。

③ 日体協加盟が認められているのは―登山はスポーツであり、日山協は登山団体を統括している最高機関という認識が得られているためであろう。

④ 登山はスポーツである。

以上はほとんど原文を抜粋するようにした。すでにいたるところで指摘したが、「日山協は登山団体を統括している最高機関」という自認は、極めて多くの誤謬と弊害を生ずる原因となっている。遊びにおける組織とは、組織が遊びを意味づけて価値を与えるのではなく、遊びのより良い状況を創り出すことにあることは、すでに述べてきたことである。組織が内部に向かって意味を創り出すことではなく、構成員（登山者）が機能しやうい状況を創り出す役割も先に述べた。遊ぶ人を統括する行政機関とするならば、社団法人を脱ぎ捨て、国民一人ひとりを法の下に平等な対象として向き合うことが出発点とならう。繰り返しすが、法人（日山協）内部だけならば、この批判を展開することはない。「登山者を統括する最高機関」という意識こそが、法人の限界を逸脱する行政意識と重なり、行政の業務委託領域をはみ出した国民の基本的な人権侵害領域に及ぶのであらう。登山をスポーツと捉えてアマ・プロ問題を派生させることも勿論であるが、それ以上に重大なのは「未組織登山者の切り捨て意識」である。自然人たる一人の登山者は国民として、憲法に示される「主権在民」の「民」であり、国家を構成する基本単位である。「法人」は民法第一編第二章において、法の下では自然人と等しく権利を持つことが許された「概念的（架空）存在」である。社団法人日本山岳協会は人格を持った一団体ではなく、自然人を構成員として、特定な目的のために組織した集合体である。その集合体が法律の下では、自然人と等しく権利をもつことが許されるのであり、法人と関わらぬ自然人までも法人の規律で統括することではない。このことの自覚が、すべからず日本の法人組織に欠けていよう。先にも記した「お上意識」は、今なお国民意識に浸透している。「日山協は登山者を統括する最高機関」というが、どのよ

うな手続きを経ているのか。憲法では第三十一条で「法定の手続きの保障」を定めている。総ての登山者が納得できる法の手続きは、どのようになされたのか論者は知らない。

登山を「遊びの広義な枠」で捉えるか、「スポーツの狭義な枠」に押し込めるか、これらの議論の出発点において、すでに概念の枠組みが先行している。本論は前者の枠組み、つまり「遊びの広義な枠組み」により批判を展開し、広義な枠組みを「登山学」として集大成できないものかと思案するのである。そして日山協は後者、「スポーツの狭義な枠」に基づき行政機関の委託代行をし、登山者を統括する最高機関という意識をもって、海外登山計画審査や国民体育大会運営をおこなう。本論は前者の立場から、後者の法的違憲性を批判してみた。



注1 山岳展望の会 会報第十一号 大内尚樹

注2 憲法第三章 「国民の権利及び義務」

注3 日山協発行 「山岳手帳」 参照

一、中華民国(台湾省)への登山手続きについて

二、わが国登山隊の پاکستان 派遣に関する注意事項

三、アフガニスタン国内の登山規則

四、ヒマラヤ登山遠征隊規制に関する規則 一九六九(ネパール)

原真氏からの葉書
1973.11.01



山岳展望の発行。編集作業
同様、本文の校正も大変
です。
あなたの長文の山岳批評には
感心しました。多分あなたは将来
期待出来る登山界の論客になり
うでしょう。あなたの長文は私の
意見を申しあげれば、文章が
手にし、複雑でやや抽象的
にすぎると感じます。
山岳批評は、論点と切り離し
て論じた方が、登山の魅力を
持つのではないかと私は思います。
なぜならば日本は本気で山を
登山と無関係にしているからです。

「日山協批判」は山岳展望第十七号の主題として、時の論客、原真氏と湯浅道男氏に原稿依頼をおこないました。編集担当の私(田中文夫)が趣意を書き、趣意書とともに古川純一氏の協力要請状を添え、手紙にて依頼しました。原真氏からは受諾できない旨の手紙と、代わりの原稿『奥山章と私』を送っていただきました。湯浅道男氏からの返信はなく、結局のところ、書き手不在となりました。依頼の趣意書は詳細にも踏み込んでいたため、その延長で私が論考を書く事となります。約一ヶ月間仕事の合間、お昼の喫茶店で原稿用紙約百枚を書きました。その原稿を和文タイプで版を起したのが、岩峰社に勤務していた岩崎元郎氏です。また、第二次山岳展望編集メンバーの中心が、岩崎氏でもありました。

さらに三十年後の二〇〇三年三月、日本山岳化学会設立総会の中、斎藤一男初代会長から、「またあのような論文を書いて下さい」と声をかけられます。「反響のなかった本論は、「読む人には読まれていた」ことを実感したひとときでした。しかも斎藤会長は、日本山岳協会会長も歴任された後でのことです。

真面目な論考は、いつか、どこかで、だれか心ある方が、読んでいて下さるから、決して無駄ではなかった思いを強くしました。

6・登山の社会的背景 — 登山学確立へのアプローチ

(山岳展望の会 「山岳展望第十四号」 一九七〇年より)

今回の調査(登山に関する実態調査—山岳展望第十四号)を総括して言えば、「登山とその社会性」がテーマであった。これを細目かつ純粹に追求してゆくと、現実の登山行為、登山者意識とは少々かけ離れた「哲学」を中心とした学問に陥るであろう。これまで数多くの山岳文献も、この域になるとボカされてしまっている。たとえあつたとしても、随筆家や人類学者、文学者などのように、既存の学問サイドから述べられている。

「登山学」というと、とてつもない深淵に落ち込んでしまうが、法で規制される昨今の登山現象にあつて、山登りを理論づけるのも必要ではなからうか。それが山登りの自由を確立する上で、大きな起点となるのではなからうか。登山者からの理論づけこそが、正統に社会認知される大きな手段であろう。

ここに手段という言葉を使ったが、山登りそのものには、学問の理論づけなど不要である。なぜならば、山登りを正確に認識させるためには、相手にも山を登らせることしかなく、自らの行為を理論付ける必要は、何もないからである。山登りの学問的理論付は、第一に社会の中で山登りを価値付ける手段であり、第二に個人的な「私自身への探求」となる。前者は他人を納得させて登山を権威づける学問であり、後者は全くの遊び要素となる。つまり、山登りへの直接的実用性はないが、登山欲求を他の欲求から守る垣根となる。

山登りを学問らしく捉える努力は、一つには知的遊びとして、もう一つには活字文化人の大脳に、少しでも山登りを理解してほしいという願いを込めている。そうすることが、映像文化の曙である現代社会の背景にあつて、活字文化人による法の乱用と権威の傘から、少しは守られるのではなからうか。しかし登山は、活字文明から生まれたものではなかったか。

一、登山の史的背景（社会と個人の問題）

発生へのアプローチ ― 表音文字

登山と mountaining とを並べると、我々は同じような意味で、「山へ登る」と理解している。しかし各々の言葉をバラしてみると、「登る」は何かに向かって「のぼる」様式を表す。一方で「山」は、何の意味も示していない。前者を表意文字といい、後者を表音文字と呼んでいる。日本にもカナ文字のような表音文字があるにしても、カナ文字よりも漢字のほうが古く、いまだ文章の中核は漢字である。

近代文明をリードしていたヨーロッパにあつては、アルファベットを主体とした表音文字である。この表音文字こそが、人間の意識を分離させたのではなからうか。いわゆる即時存在としてあるがままの「私」と、「私」自身も「私」の意識の対象になってしまう対自存在としての「私」である。いわゆる【I, my, me】を区別して用いる意識である。一方で漢字は、一字の中に微妙な意味を含め、人間の複雑な意識をその一字の中に込めることができた。

「山」という一文字の要素は、やまがもつあらゆるものを含んでいる。ましてや一つの山に限らず、二つとも、無数とも解釈できる。しかし英語などの表音文字にあつて、「山」という文字は単なる記号にすぎず、何の意味も形象も含んでいない。であるから、「mount」と記号を連ねた構造化することにより、「山」という意味を与える（定義する）言語となる。意識することにより言語として構造化する（定義しプロトコル）、つまり「見る私」という主体意識が、「見られる私」という客体化を言語構造として認識する。デカルト（一五九六―一六五〇）の有名なことば、『ゴギト・エルゴ・スム（我思う、ゆえに我あり）』はそのことを良く表象する。

山のみもとに立つてみよう。「見る私」は、「私」の感覚の色眼鏡を通して山を分析する。そして大脳に五感を通じた情報を刻み込む。入力情報そのものには具体的行動を指示する意味はなく、大脳にセットされた論理思考を経て、行為への指令となる。脳におけ

る論理思考が私自身であり、知・情・意の「意識と意思」論理思考」の部分となってくる。人間も自然もその要素を知識の断片化、細分化、局所単位化によつて認識し、それを論理的構造化へと組み直して世界の再認識をおこなう。この西欧型（表音文字社会）意識構造は、人間の身体同様自然をも、意識と意思の客体として、それらを論理的思考（定義づけ）によつて制御しようとする。

「初登頂」という概念は、歴史の流れの中における一つの定義づけとして、そのこの意味は「初めて」という価値の付与にあり、そのことを成し遂げた力への賞賛ともなる。一七八七年、ド・ソシュールによるモンブラン初登頂は、華々しい山頂への幕開けとなった。

グーテンベルクの発明した印刷機は活字の表音文字を量産することにより、知識の普及蓄積が容易になった。その結果実存の意識を拡大させ、知識の力による社会統治を展開させてゆくこととなる。そのような状況の下、初登頂の成果はまた「対自然」における「征服」の概念をも形成することとなる。

一方で東洋においては、また「登山概念」は発生していない。西欧型意識構造と異なり、表意文字による東洋型意識構造は、「私」そのものも自然の内に含まれる一元論に帰着して、「空」という言葉の中にそれら全てを含むものとした。仏教を中心とする東洋思想からは、矛盾（パラドックス）という概念が生じない。したがつて矛盾そのものを考察する弁証法など生まれようもない。そして山を自然に存在する客体として観測や、征服といった感覚すら持ち得なかつたのである。

二、登山の展開（遊びの文化）

（一）山頂の時代——力の誇示

ド・ソシュールによるモンブラン初登頂から、ウインパーによるマッターホルン初登頂までを「アルプスの黄金時代」と呼ばれている。初登頂に成功した瞬間、こんなに我々が味わう山頂の感覚とは、異なるものがあつただろう。それは先にも記した「征服」の心理であつ

たと思われる。

ヨーロッパ中に広がった百年戦争は、ナポレオンが討たれて終結となる（一八一五年）。戦争という力の拡大を背景に、モンブランは登られた。啓蒙思想によるフランス革命は、市民の実行力の誇示とともに、権威という架空な概念の圧力を切り刻んだ実存意識の高揚が、知識の力を拡大させた。

この時代には梯子あり、縄や斧を使用する人工登攀の原型があった。しかも彼らは、それが良いとも悪いとも考えず、登るためには当然使わざるを得なかった道具なのである。自然の征服や科学的探求のために、最善の道具の使用は目的達成のアイデアであった。あるときは手となり、あるときは足の代用となる道具の使用に、善悪の判断はともなわない。人工登攀における道具の使用の善悪は、後の時代の遊びのルールに由来する。登山における探検要素は、知識を活用した最善の道具立てにより、自然に対する人間の力をもつて未知な領域を解明し、その要素により自然を再構成し直して理解・説明することとなる。表音文字による西欧文明の知の特徴である。

ヨーロッパ文化圏にあるアルプスの初登頂は、個人レベルにおける探検、探査、力の誇示の範囲にあった。しかしヒマラヤ初登頂の場合にはその規模の大きさから、イギリスがエベレストを、フランスがアンナプルナを、ドイツがナンガルバルツトを、日本がマナスルをというように、およそ国と国との力の誇示競争となった。このことは登山を楽しむ遊びからの発想ではなく、「人類初」を獲得し合う「パイオニアワーク」として、文明の覇権争い同様な、世界、国家レベルの競い合いとなった。

山頂の時代には、パイオニアワークの初登頂が登山の主要価値であったが、有限な地上の山岳にあつて、この価値観は時代とともに変わってゆく流れの中にある。登山の黄金期も後半を過ぎると、世の思想はヘーゲルからニーチェへと移り、個の意識はますます研ぎ澄まされてゆく。征服して頂きに立った人間は、果たして何を見たのだろうか……。「虚無」という、やりようもなく深く暗い谷間では

なかつたらうか。

だが、困難なときほど、「私」は無心となり、その集中が逆に「私」の心を充実させる。「否定の否定は肯定」という、ヘーゲルの弁証法は次なる世代へと受け継がれることになる。登山は山頂の理念に取って代わり、登路と高峻さの中に「より高く、より困難を目指す（マンメリーイズム＝アルピニズム）」という、次なる時代を迎えることになるのである。それはまた、バイオノアワークの文明競争から、遊びとして楽しむ文化の時代への変遷でもある。

② 登路、高峻さの時代 ―遊び

マンメリーによって打ち立てられた登路の概念と高峻さこそ、現在日本で主流をなす「アルピニズム」の柱である。バリエーション。ルートから、より困難な登攀を求めていった。登頂の時代は登山者の主体と、それをサポートする従者によって組織化され、主体たる登山者は社会においてもエリートであった。庶民意識には、山と私を対峙させ、組織だって立ち向かう力がもてなかつた時代にある。初登頂されてしまった後、マンメリーはより困難なバリエーション・ルートをよじ登って山頂に達した。コーカサスからヒマラヤのより高峻さに挑み、ついにはヒマラヤのナンガ・バルバットで帰らぬ人となる。

山頂の時代、力の誇示が「対社会」であつたのに対し、アルピニズムのより高く、より困難なルートから山頂へ至る考えは、「私」が「私」に対して力の拡大を認めることとなる。いわば「対自意識」の問題として、実存の中へと潜入してゆくのである。そのような困難な岩壁を攀じ登ることが、「私」として生きる実存の確認となり、ニヒリズムの虚無を否定する弁証法的「生」の実感と確認となった。虚無の意識に切りさいなまれた身と心が、困難な登山を克服することにより、全人格一体となった「私」でありえるのであつた。それゆえに個の時代にあつては、「なぜ山に登るのか」という問に対し、哲学的回答を得ることができた時代となつたのである。

アンケート表1(山岳展望第十四号・「登山に関する実態調査」一九七〇年)に見られるように、「なぜ山に登るのか?」の回答の中で、自

然鑑賞・自然との融合が54.5%と過半数以上を占めるように、東洋的登山観は「自然即私」といった主体・客体を一体的に自然と捉える思考が定着している。より高く、より困難を求める登山者は20.4%と、五分の一に過ぎない。しかしアンケート表10の回答では、より高く、より困難を求める登山を積極的に希望する登山者は46.5%と半数に迫っている。ということとは、近代登山のはじめの頃の登山者層は知的レベルが高く、登山はインテリ層や支配階級に普及した。それが「山頂の時代」であったのだが、次のアルピニズム時代に入ると登山は一般庶民へと普及をはじめ、誰でもが比較的容易に困難な登山形態へ取り組めるようになったからであろう。

登山用具においても、「山頂の時代」にあつては積極的に道具を使用したことは先に述べた。しかし登路が問題になると、用具使用への規制意識、つまり遊びのルール化が問題となる。そのことは困難度にも関係し、「より困難」を求める思想の中では安易に道具を用いてはならない、共通ルールが成立してくる。より困難に立ち向かう「私」と、安易な解決に頼つてしまう「私」との相克が生じる。この相克の矛盾を理性的な「私」によつて乗り越えるところに、ニーチェのいう「力への意思」や、「超人」の思想を乗り越える、実践的解決が図れるのである。アンケート表8の人工的手段の使用についての回答において、「使用制限のルールが確立されるべきだ」の回答が39.5%と一番多いのも、いまだ「登路、高峻さの時代」にあるといえよう。「積極的に使用すべき」が23.2%と次に多いのも、「山頂の時代」がいまだ影響を残していると理解できよう。

いつの時代にあつても、登山行為は交換による「商品」となりえない。行為そのものである登山は唯物的交換価値ではなく、衣・食・住・道具・エネルギーを知恵と技術を用いて消費を享受する中で、文化的交換価値を見出してきた。山岳写真、山岳文学、山岳雑誌等々である。しかし現在、社会的労働価値を持ち得なく、山岳プロガイドの成立をもつてようやく、登山の労働対価をお金と交換する職業（プロガイド）が芽生えてきた時にある。そしてガイドされる登山者は、これまでの自主・自立的登山意識とは異なり、契約的

金銭対価をもって山岳自然に向き合う、他力依存契約の登山者が増加してきたことは、さらなる時代の変遷となるのである。観光登山、鑑賞登山、巡礼登山等々、次なる「分化の時代」の序章にある。

(3) 分化の時代——パースナリティ

世界大戦という文明圏の拡大闘争は流通の市場も拡張、いまや一国、一大陸にとどまらない世界市場へと発展していった。それは主に欧米意識の分化による他者への支配欲求拡大であり、自己(国家・世界)統合の欲求であろう。しかしそれができないのは、パースナリティの持つ、バクテリアのような強さがあるからだ。

ニュートンの古典力学から量子力学へ、アインシュタインの相対性理論、ルイセンコの遺伝における環境条件説、フロイドの精神分析、エレクトロニクスの急速な発展……等々、科学の分析を再構成した、高度な物質文明がいま展開されている。「私」を取り除いた「存在」そのものと分析し、再構成し直す客観的手法は、表音文字文化ならのものである。登山においても同様に、要素に向かつて分化する必然があるのだろうか。その要素は大きく分けて、次の三つが考えられる。

I 對他への力の誇示 (社会型)

II 対自への力の誇示 (実存型)

III 遊び型

一人の登山者が右のどしに所属するのではなく、各々人間が備えている人間の欲求を構造的に考えたものである。それらのうちのどの部分が強いかにより、その時々その登山者の登山行為が決められる。それゆえ、歴史という文化変遷の過程の中で、その時、その人の環境により、どれを選択するかの判断意思となる。

I は主に探検的で、初登頂を目指す。あるいは、パイオニアワークと呼んで、他者からの優越性を確認する。

池上通信機山岳部											所 属	
65	1964										年	
2	12 ~ 4										月	
?	?										日	
丹沢	丹沢										山名・山域	
円山木沢	小川谷廊下	同角沢	地獄ザリ	モミソ沢	セドノ沢	冲源次郎沢	源次郎沢	水無川本谷	新茅ノ沢	勤七ノ沢	滝郷沢	ル ー ト
杉山	八木	八木	杉山	八木	八木	八木	八木	八木	八木	八木	八木	パ ー ト ナ ー
アイスクライミング			ザイルワーク									備 考

【山行記録】
—わかるものだけを整理—

コンテニユアスクラブ												所属		
1966						1965						年		
5			4	3	2	1	11	10	9		6	5	4	月
29	15	4/29-5/3	13 ~ 15	20 ~ 23	27	15 ~ 16	21 ~ 23	17	26	5	27	23	11	日
三ツ峠	鷹取山	谷川岳合宿	八ヶ岳	八ヶ岳	那須	八ヶ岳	富士山	谷川岳	丹沢	谷川岳	丹沢	谷川岳	御前山	山名・山域
岩登り訓練	岩登り訓練	芝倉沢、一ノ倉沢南陵	阿弥陀南稜、小同心、阿弥陀北稜	小同心クラック	朝日岳	赤岳 主稜	雪上訓練	一ノ倉沢 南陵	地獄ザリ	一ノ倉沢 2ルンゼ、Aルンゼ	滝郷沢	マチガ沢	新人歓迎山行	ルート
?	18名	21名、南陵、高橋和、小倉	杉山	鈴木、田村、佐藤芳、小倉	島貫、平栗	櫻村、小倉	15名	佐藤功	単独	?	?	佐賀、高橋福、平栗、小倉、保坂	21名	パートナー
												雪渓訓練	コンテ入会	備考

コンテニユアスクラブ											所属
1966											年
9	8					7	6				月
3~4	28	8/8 ~ 7/31				21 ~ 22	19	12			日
ハケ岳		谷川岳	穂高岳合宿				丹沢	谷川岳	丹沢		山名・山域
阿弥陀岳北稜	横岳西壁小同心クラック	一ノ倉沢烏帽子奥壁中央カンテ	前穂 3峰リッジ	前穂 4峰正明大	北穂 滝谷第一尾根	北穂 滝谷クラック尾根	北穂 滝谷第4尾根	新茅ノ沢、源次郎沢	一ノ倉沢6ルンゼ右俣	滝郷沢	ルート
中村	中村	保坂	古井	古井	保坂	高橋和	鈴木、田村、杉崎、高橋和	天野	保坂	保坂	パートナー
		2時間で登攀									備考

コンテニューアスクラブ											所属			
1967						1966					年			
4	3	2		1		12	11		10		月			
2	19~21		26	11 ~ 13	28 ~ 29	15	12/29 ~ 1/5		26 ~ 27	20	16	9~10	日	
丹沢	八ヶ岳		丹沢	八ヶ岳	八ヶ岳	鷹取山	穂高岳合宿		富士山	鷹取山	谷川岳	八ヶ岳	山名・山域	
滝郷沢	~中山尾根~大同心稜下降		地獄ザリ	横岳西壁 中山尾根	大同心正面壁	岩登り訓練	前穂高岳 北尾根		雪上訓練	岩登り訓練	一ノ倉沢 烏帽子南稜	赤岳西壁シヨルダー	広河原沢奥壁3ルンゼ	ルート
8名	保坂	佐藤功、保坂	天野、佐々木	保坂	佐藤功	高橋福、保坂、佐藤芳	12名		13名	田村、小倉、保坂	杉山	大杉	保坂	パートナー
	連続登攀				悪天、基部にて敗退									備考

コンテニューアスクラブ										所属		
1967										年		
8			7		6		5		4	月		
30	19	8/6 ~ 7/30			21 ~ 25	25	4	28	3 ~ 7	16	日	
谷川岳	谷川岳	合 剣 宿 岳			朝日連邦	三ツ峠	越沢	丹沢	谷川岳	鷹取山	山名・山域	
一ノ倉沢滝沢第一スラブ	一ノ倉沢衝立岩中央稜	八峰6峰Cフェイス	本峰南壁A1	チンネ左方ルンゼ〜右カンテ	本峰北壁L1	縦走	岩登り訓練	岩登り訓練	滝郷沢	春山合宿	コンテ祭	ルート
古井	上村	佐々木	小池	今村	松崎	神奈川県立秦野高校山岳部	14名	7名	11名	22名	26名	パートナー
新潟の集中豪雨後						顧問随行						備考

コンテニューアスクラブ											所属			
1968					1967					年				
4	3	2		1	12	11	10	9			月			
21	19 〜 20	25 〜 26	18 〜 19	1/14~12/29		3 5	8 〜 10	24	17~15		3	日		
鷹取山	八ヶ岳	谷川岳	八ヶ岳	韓国遠征		八ヶ岳	谷川岳	丹沢	北岳バットレス		三ツ峠	山名・山域		
岩登り訓練	広河原沢奥壁3ルンゼ	一ノ倉沢	広河原沢	インスポン	Aコース	ウルサンバイ初登攀	日韓親善東京登山隊	大同心正面壁〜稲子湯	一ノ倉沢衝立岩正面岳人	地獄ザリ〜モミノ沢下降	第4尾根	第2尾根Cガリー〜R2	岩登り訓練	ルート
24名	上村	佐藤功	上村	岩崎、古井、佐藤功、末吉	森谷	隊長・遠藤登、11名	上村	佐藤功	上村	古井	今村、上村	上村	パートナー	
					日韓親善東京登山隊ルート								備考	

山岳同人・風				コンテニューアスクラブ								所属
1969				1968								年
不明	不明	不明	不明	2	1	12		11	10	9	8	月
				9	12/30 ~ 1/3		15	4	13	29	18	日
				谷川岳	谷川岳	谷川連峰	丹沢	丹沢	丹沢	三ツ峠	山名・山域	
				一ノ倉沢	西黒尾根	一ノ倉沢 衝立岩 基部	白毛門	?	滝郷沢	?	岩登り訓練	ルート
				古井	小林	高橋福	8名	6名	田中英	田中英	小林	パートナー
				悪天候、 出合まで								備考

山岳同人・風													所属
1971										1970			年
5			4		3		2	1		12	8	2	月
30	16	4/29 ～ 5/5		11	28	21	14	15 ～ 18	12/30 ～ 1/3		?	8 ～ 10	日
谷川岳	伊豆城山	穂高岳合宿		谷川岳	丹沢	三ツ峠	丹沢	八ヶ岳	甲斐駒ヶ岳		穂高岳合宿	谷川岳	山名・山域
一ノ倉沢烏帽子奥壁凹状	南壁 三日月、鎌形ハング	滝谷登れず 北穂高山頂BC		蓬峠	水無川周辺	岩登り訓練	ザンザ洞	小同心ルンゼ	黄蓮谷 右俣	黄蓮谷 左俣	畳岩 ルート開拓	一ノ倉沢滝沢リッジ	ルート
田中英、佐藤功	佐藤功、善冢、新井、田中英、堀井	田中英、新井、加茂、鈴木		土田、他2名	10名	加茂、新井、堀井	田中英、堀井、土田、新井	田中英、保川	田中英、高橋福、堀井	堀井	?	杉山	パートナー
		連日吹雪						小雪崩に流される			「岩と雪」発表		備考

山岳同人・風											所屬	
1971											年	
10		9	8			7			6		月	
17	10	15	22	15	4 ~ 1		18	11	4	20	13	日
丹沢	谷川岳	谷川岳	鷹取山	秩父 叶山	合宿	穂高岳	谷川岳	三ツ峠	谷川岳	秩父 叶山	丹沢	山名・山域
?	一ノ倉沢2ルンゼくAルンゼ	一ノ倉沢滝沢第3スラブ	岩登り訓練	東壁 人工登攀	北尾根4峰正面北条新村	屏風岩中央カンテく登らず	一ノ倉沢	岩登り訓練	一ノ倉沢	東壁 人工登攀	水無川周辺	ルート
坂本、荻原	田中英、加茂、新井	堀井	田中英、荻原、新井、堀井	加茂	坂本、荻原	堀井、加茂	田中英、堀井、土田	6名	堀井、善家	高橋福、田中英、堀井、土田	田中英、堀井	パートナー
				ルート開拓	(⇒愛知学院大学)	先行P事故に協力	悪天候、出合まで		悪天候、出合まで	ルート開拓		備考

山岳同人・風													所属	
1972						1971						年		
9	7	4	3	2		1	12		11			10	月	
?	?	15 ~ 16	19 ~ 20	19 ~ 20	13	23	12/29 ~ 1/3		5	28	21 ~ 23	17	24	日
前穂高岳	北岳	丹沢	谷川岳	谷川岳	三ツ峠	富士山	合宿 穂高岳	谷川岳	丹沢	穂高岳	丹沢	谷川岳	山名・山域	
右岩稜くAフェイス	バットレス?	水無川本谷	一ノ倉沢烏帽子奥壁中央カンテ	一ノ倉沢烏帽子奥壁	岩登り訓練	雪上訓練	屏風岩中央カンテ岩溝	西黒尾根	水無川モミソ岩	屏風岩下部偵察	寄	一ノ倉沢	ルート	
久保田	田中英	11名	堀井	富田、堀井	田中英、荻原、堀井	6名	佐藤功	?	田中英、堀井	佐藤功、善家、坂本、荻原	17名	田中英	パートナー	
			完登	悪天候、出合まで	アイゼン訓練		完登		アイゼン訓練	正月合宿偵察	同人祭	悪天候、出合まで	備考	

山岳同人・風								所屬	
75		1974				1973		年	
1	12	不明	6 ← 2		不明			月	
23	12/29 ~ 1/2	?	6/13 ~ 2/13		?	?	?	?	日
伊豆城山	槍ヶ岳		ヒマラヤ	ネパール	富士山	富士山	富士山	谷川岳	山名・山域
	北鎌尾根く槍沢下降		P29 南西壁		高所順応	高所順応	高所順応	幽ノ沢	ルート
?	藤松		(日山協アマ・プロ問題)						パートナー
			南西壁基部まで 公式申請上の隊長で 実際は登攀リーダー					人エテント台設営	備考

山岳同人・風												所属	
1975												年	
10	9	8				7		5		4		2	月
22	21 ～ 24	31	24	16 ～ 17	10	27	13	11	4/29 ～ 5/5		20	10	日
伊豆城山	穂高岳合宿	谷川岳	丹沢	北岳	谷川岳	丹沢	丹沢	丹沢	黒部別山		三ツ峠	ハケ岳	山名・山域
岩登り訓練	滝谷	幽ノ沢V字状右岩壁	小草平	バットレス	二ノ沢右俣右壁	モミソ沢	滝郷沢	同角沢	大タテガビン 中央ルンゼ左俣	大タテガビン スラブ状ルンゼ	岩登り訓練	広河原奥壁3ルンゼ右俣	ルート
遠藤ケ	?	栗林	横浜山岳協会イベント	箱山	富田	?	長崎	遠藤佳	白石	白石	白石、加茂、坂本	単独	パートナー
				悪天、テント水没								一日で完登	備考

ツラギの会											所属	
1976					1975					年		
3	2		1		12		11			月		
20 ～ 21	10 ～ 11	1	12/28 ～ 1/3		14 ～ 15	7	29	23 ～ 24	9	2 ～ 4	日	
八ヶ岳	八ヶ岳	富士山	合宿 甲斐駒ヶ岳		谷川岳	富士山	富士山	八ヶ岳	三ツ峠	甲斐駒ヶ岳	山名・山域	
広河原沢奥壁3ルンゼ	横岳西壁 中山尾根	高所順応訓練	篠沢七丈滝	黄蓮谷右俣	黄蓮谷左俣	一ノ倉沢烏帽子中央稜	高所順応訓練	高所順応訓練	赤岳主稜	岩登り訓練	赤石沢奥壁左ルンゼ	ルート
小野田	?	小野田、栗林	白石、御園生、栗林、和田	栗林	御園生、和田	栗林	津山、小野田、遠藤ケ	?	和田、小野田	小野田、和田、遠藤ケ	白石、小野田、内田	パートナー
			フリークライム								ザイルが凍る	備考

ツラギの会													所属
1976													年
10		9		8		7	6		5	4		3	月
17	11	26	19	11~16		11	20	13	2 5	18	11	20 21	日
谷川岳	谷川岳	谷川岳	谷川岳	合宿	黒部別山	鷹取山	谷川岳	鷹取山	鹿島槍ヶ岳	伊豆城山	鷹取山	ハケ岳	山名・山域
幽ノ沢中央壁ダイレクト	一ノ倉沢	一ノ倉沢コップ状正面縁	一ノ倉沢4ルンゼ	大タテガビン南東壁	丸山東壁縁	懇談会	一ノ倉沢衝立正面雲稜第一	岩登り訓練	北壁 蝶型左稜	岩登り訓練	岩登り訓練	硫黄岳ジョーゴ沢	ルート
栗林	御園生	高橋美、牛沢	遠藤ケ、牛沢	10名	富田、津山、牛沢、栗林	会員全員集合	御園生	栗林	津山	6名、	白石、御園生、栗林	遠藤ケ、栗林	パートナー
6時間	悪天候、出合まで			豪雨で停滞多し	終了点でビバーク		5時間半、北稜下降		下降路間違えビバーク				備考

ツラギの会											所属
1977					1976					年	
3		2	1		12		11			月	
20 ~ 21	13	12	23	16	12/30 ~ 1/3	26	22	21	14	7	日
谷川岳	三ツ峠	谷川岳	松木沢	谷川岳	谷川岳合宿	谷川岳	谷川岳	谷川岳	谷川岳	三ツ峠	山名・山域
一ノ倉	岩登り訓練	幽ノ沢中央壁右フェイス	氷瀑訓練	一ノ倉沢 出合	線、一ノ倉尾根のサポート 一ノ倉沢滝沢リッジ、中央稜	一ノ倉沢衝立岩中央稜	幽ノ沢中央壁	一ノ倉沢テールリッジ	幽ノ沢中央壁	岩登り訓練	ルート
小島、栗林	御園生、小島、万実	富田	9名	白石	10名	御園生	富田	白石、富田、高橋美、栗林、小野田	白石	渡辺	パートナー
出合の時山頂の時		ハンゲ下で下降	遠藤ケ滑落左足首骨折	ラッセル深く危険		チーム一上で引き返す	ベルグラにて引き返す	降雪にて引き返す	悪天候、出合まで		備考

ツラギの会												所属	
1977												年	
12	11	10	9	8	7	6			5		4	月	
?	?	?	?	7/31 ~ 8/7		3	26	12	5	22	1 ~ 5	24	日
富士山	富士山	富士山	富士山	合宿	黒部別山	谷川岳	鷹取山	谷川岳	谷川岳	谷川岳	鹿島槍ヶ岳	三ツ峠	山名・山域
高所順応訓練	高所順応訓練	高所順応訓練	高所順応訓練	エンジンウインチ訓練	大テガビン南東壁	一ノ倉沢烏帽子奥壁変形チムニー	岩登り訓練	一ノ倉沢衝立岩中央稜	一ノ倉沢烏帽子奥壁ダイレクト	一ノ倉沢烏帽子奥壁中央カンテ	天狗尾根、荒沢北稜	岩登り訓練	ルート
?	?	?	?	11名		牛沢	白石、高橋美、御園生、万実、栗林	栗林、太田	御園生	御園生	栗林	白石、高橋美、御園生、万実	パートナー
夜行日帰り	夜行日帰り	夜行日帰り	夜行日帰り	ワイヤーロープ張り		小雨の中登攀		小雨、北稜下降	7時間、南陵下降	小雨の中2時間で登攀			備考

ツラギの会						所属						
1978					77	年						
10 ← 7	5	2	1	12	月							
10/23 ~ 7/22	27	10 ~ 11	1/4 ~ 12/29		日							
ヒマラヤ ネパール	谷川岳	富士山	13名 合宿	甲斐駒ヶ岳	山名・山域							
P29 南西壁登山隊10名 隊長・田中文夫 6/4 C2にて氷河崩壊雪崩 牛沢、万実、高橋美 隊員死亡、以降登攀中止		一ノ倉沢烏帽子岩南稜	高所順応訓練	篠沢7丈滝フリークライム	黄蓮谷左俣	赤石沢奥壁左ルンゼ 赤石沢奥壁中央稜	ルート					
ポーター 165名	ローカルポーター2名	リエゾン・オフィサー	コック、キッチン、メール	シェルパ5名	隊員10名	和田	?	多数	御園生	万実	万実	パートナー
2001.01.01		文芸社より出版	青春のヒマラヤに学ぶ					全フリー登攀	13P、7時間	ハング下まで	備考	

ツラギの会											所属	
1980			1979								78	年
4	3	1	12	11	10	8	5	3	2	1	12	月
20	22 〜 29	12/29 〜 1/1	11/30 〜 2	24	21	9 〜 12	3 〜 6	16 〜 17	10 〜 12	1/11~12/25		日
日和田山	ネパール	北岳 バットレス	八ヶ岳	丹沢	谷川岳	穂高岳	穂高岳	古賀志山	八ヶ岳	ヒマラヤ ネパール		山名・山域
岩登り訓練	カトマンズ	第4尾根 池山小屋	阿弥陀南稜 赤岳南方リッジ	広沢寺	一ノ倉沢2ルンゼ	畳岩 奥穂高 前穂高 奥又	チビ谷 濁沢岳 奥穂 濁沢	岩登り訓練	文三郎 赤岳 地蔵尾根	エベレスト・トレッキング ルクラ〜カラバタール		ルート
千鶴子、富田、和田	千鶴子	富田、和田	千鶴子、山口	和田	和田	千鶴子	千鶴子	千鶴子	田中康子 (難波康子)	武田、対馬、 麦倉千鶴子 アルパインツアー (7名) 富田、田中康子、 木村、村木		パートナー
	新婚旅行	完登					滝谷と間違えて登る		康子さん初めての冬山	ツアーコンダクター		備考

ツラギの会										所属									
1981					1980					年									
8		5		1		12		10		9	7	6	5	月					
18 ~ 1		3 ~ 5		1/10~12/26		10		23		27		28		3 ~ 5	日				
アルプス		スイス		前穂高岳		ヒマラヤ		ネパール		古賀志山		谷川岳		谷川岳		山名・山域			
アイガー		ミッテルレギ稜		クライマッターホルン		4峰正面、前穂高岳、岳沢		エベレスト・トレッキング		岩登り訓練		一ノ倉沢衝立岩南稜		幽ノ沢V字状右岩壁		一ノ倉沢衝立岩中央稜		芝倉沢、武能岳、蓬峠、大源太山	
千鶴子		千鶴子		千鶴子、和田		(14名)		アルパインツアー		千鶴子、和田		和田		和田、五十嵐		千鶴子、富田		千鶴子、坂本、和田	
西壁下降		アイスクライミング		ツアーコンダクター														備考	

ツラギの会										所属	
84	1983					1982			81	年	
1	12	8	7	1	12		1	12	月		
1/9 ~ 12/23		15~12		17	1/3 ~ 12/30			1/11 ~ 12/26		日	
ヒマラヤ ネパール		合宿 剣岳		丹沢	BC 赤岳 八ヶ岳			ヒマラヤ ネパール		山名・山域	
悪天候により5500mで引返す		真砂沢よりハンゴ段乗越より黒四ダム		八ツ峰6峰Cフェイスよりテンネ中央テムニ	広沢寺		硫黄岳 往復	赤岳 往復	阿弥陀岳 往復	ルート	
ポーター3名		シェルパ1名		小林、宮沢	樋口、宮沢、小林		宮沢	7名	後藤純子、佐藤真理子		パートナー
	サンテンバ・シェルパ		悪天候・時間切れ					山岳部コーチ		神奈川県立衛生短大	備考
	ツアーコンダクター										

ツラギの会										所属	
1985					1984					年	
6	5	5	3	1		1	1	10	9	8	月
2	12	3 ~ 5	24	9~10		24 ~ 25	3 ~ 4	6 ~ 9	9	25 ~ 28	日
丹沢	丹沢	唐松岳	丹沢	鹿島槍ヶ岳		富士山	富士山	唐松岳	丹沢	立山	山名・山域
新茅ノ沢	水無川キャンプ	八方尾根	大山	遭難捜索 川崎・芝笛クラブ		富士宮	富士宮	八方尾根	新茅ノ沢	室堂から往復	ルート
単独	泉(2歳)	千鶴子、泉(2歳)	千鶴子、泉(2歳)	清水栄治氏死亡 1982年7月、ルネ・トウキョウ、参加		単独	単独	千鶴子、泉(2歳)	千鶴子、泉(2歳)	千鶴子、泉(2歳)	パートナー
				単独参加							備考

フリー				ツラギの会							所属	
1991		90	1988				87	1986			年	
	1	12	10	8	7	1	12	3	2	1	月	
	1/3 ~ 12/21		9 ~ 10	3 ~ 9	10	1/8 ~ 12/26		8 ~ 9	23	8 ~ 9	1	日
	ヒマラヤ ネパール		鳥海山	礼文 ~ 利尻	丹沢	ヒマラヤ ネパール		谷川岳	丹沢	八ヶ岳	谷川岳	山名・山域
	(ポカラ ~ ダンプス)		象潟 ~ 鳥海山 往復	8/6 利尻岳 (単独登頂)	水無川 本谷	アンアプルナ ミニトレッキング ポカラ ~ ダンプス		一ノ倉 尾根	新茅ノ 沢	赤岳	西黒尾 根	ルート
	ベレストビュー 設計者の一人)		単独	6名家族 旅行	単独	竹内民生 (建築家)		富田	単独	単独	単独	パートナー
	主任設計者・熊谷義信			礼文 ~ 利尻 ~ 稚内		設計仲間の ガイド						備考

フリー								所属
	2000					93	1992	年
	8		4	3		1	12	月
	22 ～ 25		4/2 ～ 3/26			1/1 ～ 12/22		日
	槍ヶ岳		ヒマラヤ ネパール			ヒマラヤ ネパール		山名・山域
	槍沢 槍沢～東鎌尾根～槍ヶ岳～		アンナプルナミニトレック (ポカラ～チャンドラコット ～ダンブラス～ポカラ)			ホテル・エベレストビュー エベレスト山麓巡り		ルート
	千鶴子、有(13歳) 平戸(13歳)		千鶴子、 泉(17歳)、 有(12歳)			荒井(高校同級生) 中川(設計仲間) 鈴木(社員)		パートナー
	テント泊		家族でヒマラヤ			仲間のガイド役		備考

フリー									所属
2009		2007		2006		2004		年	
11	10	6	4	8		10	9	月	
2 ～ 3	10 ～ 11	4～15	29 ～ 30	12～14		16	18 ～ 20	日	
ハケ岳	北岳	ネパール	志賀高原	穂高岳		谷川岳	槍ヶ岳	山名・山域	
編笠山～権現岳～赤岳	草すべり～八本歯	カトマンズ滞在 カカニヒル、ナガルコット カトマンズ郊外	岩菅山 (避難小屋)	パノラマコース～涸沢～ 奥穂高岳～前穂高岳～岳沢		西黒尾根 (肩の小屋)	槍沢から往復(槍ヶ岳山荘)	ルート	
単独	単独	単独	単独	有、牛島、大野 大学一年生3名		単独	単独	パートナー	
テントが凍る	テント泊	10日間 ヒマラヤンホテル	太陽光発電調査	テント泊		太陽光発電撮影	太陽光発電撮影	備考	

フリー											所属
2013										2011	年
9	8	7				6				9	月
28	11	28	21	15	7	30	23	9		24 ～ 25	日
丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢		八ヶ岳	山名・山域
三ノ塔 ～ 塔ヶ岳 ～ 大倉尾根	三ノ塔 ～ 烏尾尾根	三ノ塔 ～ 烏尾尾根	三ノ塔 ～ 政次郎尾根	三ノ塔 ～ 烏尾尾根	三ノ塔 ～ 政次郎尾根	三ノ塔 ～ 烏尾尾根	三ノ塔 ～ 烏尾尾根	三ノ塔 ～ 烏尾尾根		本沢温泉 ～ 硫黄岳 ～ 赤岳 ～ 鉢泉	ルート
単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独		単独	パートナー
										テント泊	備考

フリー													所属
2014					2013						年		
2		1			12		11			10			月
9	1	18	12	4	30	21	23	16	4	27	11 ~ 14	6	日
丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	唐松岳	丹沢	山名・山域
三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	雨山峠 ~ 鍋割山 ~ 大倉尾根	雨山峠 ~ 鍋割山 ~ 大倉	三ノ塔 ~ 烏尾尾根	八方尾根	鍋割山 ~ 大倉尾根	ルート
単独	飯塚	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	飯塚	単独	千鶴子	飯塚	パートナー
									雨		小屋泊、 初冠雪		備考

フリー											所属
2014											年
5		4			3				2		月
10	3	27	12	5	29	21	15	9	22	19	日
丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	山名・山域
天神尾根く大倉尾根	三ノ塔く塔ヶ岳く天神尾根	三ノ塔く政次郎尾根	新茅ノ沢く烏尾尾根	三ノ塔く烏尾尾根	三ノ塔く烏尾尾根	三ノ塔く烏尾尾根	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	三ノ塔 往復	ルート 大倉くおおすみ山居く山岳 スポーツセンター
単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	パートナー 砂田、相原、田中有 中村先生ご夫妻、佐々木、西本、
										有志	備考 日本山岳文化学会

フリー													所属
2014													年
9	8				7				6	5			月
13 ～ 14	31	23	16	3	27	21	19	12	14	31	25	17	日
ハケ岳	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	丹沢	山名・山域
阿弥陀岳南稜～御小屋尾根	三ノ塔～塔ヶ岳～天神尾根	三ノ塔～往復	三ノ塔～政次郎尾根	三ノ塔～政次郎尾根	三ノ塔～烏尾尾根	鍋割山～塔ヶ岳～烏尾尾根	鍋割山	三ノ塔～烏尾尾根	三ノ塔～塔ヶ岳～天神尾根	源次郎沢～天神尾根	ヤビツ峠～表尾根～政次郎尾根	源次郎沢～大倉尾根	ルート
単独	単独	単独	単独	単独	単独	単独	有、朋美	単独	単独	単独	飯塚	単独	パートナー
テント泊		雷雨					雨で大倉へ						備考

中村純二先生
からのコメント



2014. 02. 19
丹沢：大倉にて

東京大学 名誉教授

物理学博士（宇宙光学）

第1〜3次 南極観測隊員（第3次越冬隊員） 南極大タロー、ジローと極地探査

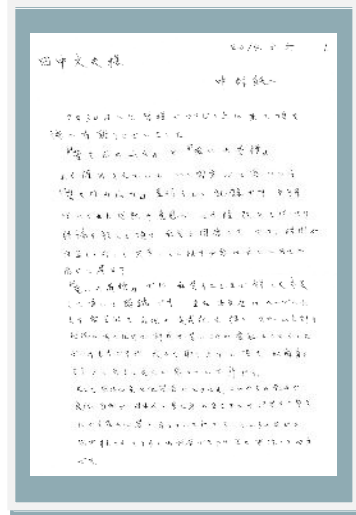
東京大学スキー山岳部 カラコルム(K)学術登山隊 1984 総隊長

日本山岳会三元副会長、日本山岳文化学会理事

【コメント】

『「若き日の山々」、よくまとめられていて、いい内容だと思います。

素晴らしい記録です。第四章はいずれも当然の意見で、この際改めてはつきり結論を記していただき、私共も同感です。やはり時間が経過していても、文章にして残す必要は大いにあると感じています。』



若き日の山々

著者 田中文夫

編集 二〇一四年八月十五日

日本山岳文化学会 正会員

総合人間学会 正会員

建築設備技術者協会 正会員

〒291-029 南西壁登山隊 隊長